

# ジェンダー研究

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報  
第2号（通巻19号）1999年

---

## — 目 次 —

---

### <論文>

- 言説、力、セクシュアリティ、主体の構築 ..... ホーン川嶋瑤子 ..... 3
- Women's Empowerment in Japan:  
Towards an Alternative Index on Gender Equality ..... Saskia E. Wieringa ..... 25
- 18世紀韓国における任允摯堂の気哲学：男女平等観について ..... 鄭 世華／鄭 好善訳 ... 49
- 近年の韓国における離婚の動向 ..... 金 惠善／吉川美華訳 ... 63
- Add Me, But I Can't Be Stirred Away  
—日本初の女性憲法学者久保田きぬ子と日本の憲法学界— ..... 中 山 道 子 ..... 75
- 韓国の文字ハンゲルと女性 ..... 印 省 熙 ..... 87
- Making Stories in Jane Austen's *Emma* ..... SHIDOOKA Rie ..... 99
- 創造的な空白  
—トリン・T・ミンハ夜間セミナー報告 ..... 石 川 裕 子 ..... 107
- <研究文献目録10>
- アフリカ女性文学研究の発展と文献紹介 ..... 大 池 真知子 ..... 113
- ジェンダー研究センター彙報（平成9年4月1日—10年3月31日） ..... 169
- あとがき ..... 183

# 言説、力、セクシュアリティ、主体の構築

ホ ー ン 川 嶋 瑤 子

## はじめに

現代フェミニズムは、過去30年にわたって、あらゆる領域における男女間の力関係のアンバランスを「問題化」し、その変更を求めてきた。その30年にわたる歴史を振り返れば、理論的蓄積の面でも、社会制度的変革の面でも、社会的・文化的価値規範の面でも、個々人の意識の面でも、20世紀後半における最大の革命の一つと言っても決して誇張ではない根幹的变化を生み出してきた。

日本においても、男女平等は法制度化され、社会原則として定着した。多くの女性がある程度の経済力を獲得したし、政治的参加も以前に比べれば確実に拡大した。教育達成における男女差の縮小、固定的性役割の揺るがし、というように、まだ不十分であるにせよ、フェミニズムが達成したものを挙げれば長いリストができる。

日本におけるフェミニズムのこのような多方面における評価すべき達成と奇妙な対照を示しているのが、1980年代以降恐ろしい勢いで進行した「女性の性・セクシュアリティの商品化」「女性に対する性暴力」等の「女性の体に対する支配」の強化である。しかも、女性の体・セクシュアリティの支配は、あまりにも日々の生活の中に組み込まれてしまったゆえに、不可視化されてしまった。

アメリカの第二波女性運動は、ラディカル・フェミニズムという重要な思想と運動を生み出し、男女の力の不平等の根源を性関係にあると見て、セクシュアリティを政治化した。「性階級はあまりにも深いため不可視的である。あるいは、それは、表面的な不平等として現われるかもしれない。すなわち、いくつかのあたらしい改革によって解決される不平等、あるいは、多分女性を労働力に完全に組み入れることによって解決されるような不平等として見えるかもしれない。」(ファイアストーン、1970、p. 3)<sup>1</sup>

今の日本におけるセクシュアリティをめぐる状況を見ると、セクシュアリティこそ男女の力の非対称の根源であると見たラディカル・フェミニズムの洞察の意味するものは再考に値する。

1970、80年代アメリカのフェミニズム運動において、主として公領域への進出による男女平等達成というリベラル・フェミニズム的アプローチと、私領域、特にセクシュアリティを中核とする男女関係の対等化を求めるラディカル・フェミニズム的アプローチとは、多くの点で車の両輪であった。しかし、しばしば、後者は、前者より一層衝突的、分裂的であった。性の解放、同性愛、ポルノ論争、生殖、中絶権等を含めて、セクシュアリティは、過去30年間にわたって、フェミニズム内部での理論的論争と運動面での衝突の場となってきたが、フェミニズムを超えてすべての人を巻き込む大きな社会・政治問題でもあり続けてきたと言える。

日本でも、確かに、セクシュアリティにかかわる問題が全く無視されてきたわけではなく、ミスコンテストや売春、ポルノへの反対運動、ピル解禁要求は時折浮上したし、中絶に関する優性保護法改訂反対運動もあった。職場におけるセクシュアル・ハラスメントは、何件かの訴訟を経て、改正雇用均等法により1999年からは雇用上の差別になった。女性に対する性暴力も深刻な問題として取り上げられるようになった、という具合に、セクシュアリティも問題化されてきた。

それにもかかわらず、日本では、性の商品化による女性のセクシュアリティの搾取に対する批判は、全体としては、その拡散に対抗するほどの力にはならなかった。逆に、この15年間に拡散が著しく進行して、大衆文化の一部となり、日常化、当然化したために、性差別問題としてとらえられることさえ少なくなってしまうように見える。雇用差別、賃金差別、女性管理者の少なさ、女性労働者のパート化の進行、政治における女性の代表の

少なさ、等については、男性と比べた女性の劣位を数値化することによって不平等を明示しやすい。また機会の不平等は社会的公平に反するという原則論は、多くの人に受け入れられやすい。対照的に、セクシュアリティにおける男女の力の非対等は数値化による可視化ができないし、そもそも力関係として見るという考え方は否定されやすい。

最近では、性関連産業の巨大化、性商品の消費者の拡大だけでなく、自らの性をすすんで商品化する女性たちが増えてきた。売春はかつて女性の貧困と結び付いていたが、最近は、「非行型」「生活苦型」から「普通」の女性たちによる「享楽型」への移行とも言われるようになった<sup>2</sup>。ポルノのどこが悪い、売春がなぜ悪い、個人の自由だ、という声が、性産業や男性消費者のみならず、女性たちからも出てきた。

日本では、なぜ「女性の性の商品化」がかくも短期間に進行したのだろうか？なぜ若い女性、少女たちが遊びや小遣い銭稼ぎのためにいとも簡単に性を売ようになったのか？「女性の性の商品化」は、女性のセクシュアリティの搾取なのか、それとも経済力獲得のための労働なのか？女性のエンパワーメントなのか？女性の性の商品化の拡散は、ジェンダー関係にどんな影響を及ぼしているのであろうか？

「性の商品化」をめぐるのは、アメリカでも、日本でも、多くの説がある。特に、個人の自由を中心とするリベラル・フェミニズムと、セクシュアリティを男支配、女従属の中核と見るラディカル・フェミニズムとは、多くの面に対立する分析を提供する。

本稿で、私は、(1)性の商品化に対するリベラル・フェミニズム的「個人の自由」アプローチは、女のセクシュアリティが男によって支配されている社会においては、支配からの解放よりもむしろ支配の一層の強化となる可能性が高いこと、(2)ラディカル・フェミニズムは、セクシュアリティにおける支配、従属関係の分析に有益な理論を提供したこと、しかしながら本質主義やエイジェンシーの欠如の問題点があるため、固定的であり、支配への抵抗という視点が弱いこと、(3)代わって、ポスト構造主義／ポストモダン思想の視点、とりわけミッシェル・フーコーが提示した「言説、力、主体」についての洞察を取り入れることにより、セクシュアリティをめぐる言説がいかに力と結び付き、男女の主体の構築に作用しているか、セクシュアリティをめぐる男女の力関係の構築、維持に貢献しているのかを分析し、しかしながら、支配には常に抵抗の可能性が内在しているという、より動的な分析を試みたいと思う。

## フーコーによる「言説、力、主体の分析」とフェミニズムにとっての意義

ポスト構造主義は、特に「主体」「知」「力」の面で、フェミニズムにとって有益な洞察をもたらした。近代ヒューマニズムが生み出した個人は、理性的、自律的、安定した、統一的主体であった。自己の存在を取り巻くコンテクストから切り離された主体であった。ポスト構造主義は、このような近代的主体概念を批判した。ポスト構造主義においては、言語を通して構築される主体（ラカン、クリステヴァ、シクスー）、書くことの結果としての主体（デリダ、イリガライ）、イデオロギーによってはたらきかけられ構築される主体（アルチューセール）、あるいは言説の中で構築される主体（フーコー）である。近代の「知」は真理の発見とその表現であり、真理へと至る方法の客観主義、科学主義は「知」の中立性を保障するものであった。それに対して、ポスト構造主義は、「知」を「力」と結び付けた。

近代的枠組みを脱構築していこうとするポスト構造主義は、フェミニズムにとっても、既存の秩序に挑戦する新しい戦略を切り開くものであった。それは、近代的「主体」や「知」の概念こそは、ながらく女性を排除、歪曲し、劣位に置くように機能していたものであり、したがって、このような女性にとって抑圧的な「主体」「知」を批判していくことは、重要な闘いの場であるという認識からであった。

特にフーコー（1976/86）<sup>3</sup>は、アメリカのフェミニズムに多大なインパクトを与えた。フーコーにとって、(1)知（思考、意味の生産）、(2)主体、(3)力関係（知に内在）は、言説において構築される。近代の「知」が前提

したような絶対的真理というようなものは存在しない。言説＝知＝力＝利害関係という結び付きのうえに築かれる「真実のレジーム（体制）」があるにすぎない。言説を通じた力の戦略によって、主体の構築とその管理が行われ、制度へのはたらきかけが行われる。

精神は、独立した思考力ではなく、言説／力によって書き込みが行われる場である。けれども、言説による書き込みは完全なものではなく、個人はエイジェントとして、それに抵抗する可能性を持つ存在である。アルチューセールのイデオロギー論は、イデオロギーによりはたらきかけられ、それに服従する主体の構築が中心であり、主体からの抵抗の視点は出てこない<sup>4</sup>。それに対して、フーコーは、異なる言説間の矛盾と競合、闘争、そしてそこにエイジェントとしての主体による抵抗の可能性があると提示した。

フーコーの『性の歴史』は、セクシュアリティが力の中核となったことを示した。セクシュアリティについての言説は、体の言説的構築を通して主体／アイデンティティを構築し、コントロールする。まさにセクシュアリティは力関係の衝突点となった。

フーコーはジェンダー関係を分析の中心としていないが、フェミニズムにとって、特に重要なテーマは、力＝知の体制（レジーム）の中で、「女の主体／体／セクシュアリティ」は、どのように意味づけられ、構築されているか、という問題である。

セクシュアリティとは、人の性的欲望、性的行為というだけでなく、アイデンティティの構成要素である。まさに人間の全存在から切り離すことができない重要な要素である。だからこそ、セクシュアリティにおける支配、被支配は、一方に支配する主体／体／アイデンティティを、他方に支配される主体／体／アイデンティティを作り出す。それによって、セクシュアリティにおける支配、被支配の関係が維持される<sup>5</sup>。

現代の日本において進行している「女の性の商品化」現象は、女性の主体／体／セクシュアリティ形成にどのように作用しているのか、どのような現実が構築されているのだろうか？女は男にない生殖力を持つゆえ、また男の性的欲望の対象として、男は常に女のセクシュアリティを自己の支配のもとに置こうとしてきた。現代日本におけるセクシュアリティをめぐる状況は、このような男のコントロールから女の主体／体／セクシュアリティを解放するものなのだろうか？女のセクシュアリティはどのような言説空間の中で構築されているのか、言説の生産者は誰か、言説はどのように流布・流通されているのか、言説はどのような力関係、利害関係と結び付いているか、どのように主体への働きかけが行われているのだろうか？これらのテーマを日米を比較しながら分析してみよう。

## アメリカにおけるセクシュアリティの政治化と闘争の展開

アメリカでは、1960年代の終わりまでには、セクシュアリティは社会を揺さぶる重要な政治問題となった。1953年に大衆ポルノ誌『プレイボーイ』が創刊されて、女性の性の商品化、娯楽化が進行し、大衆文化の一部となった。セクソロジー（性科学）<sup>6</sup>の発展は、女性のセクシュアリティの受動性という神話を壊し、能動性を強調した。1960年代初めの避妊ピル解禁は、生殖から解放された性を可能にした。さらに、人種差別反対を叫ぶ公民権運動が労働者運動、学生運動と連携して展開し、伝統からの解放、抑圧的な性や結婚制度からの解放といった社会変化が追及された。女性たちも、女性運動の展開の中で、性のダブルスタンダードの解消は女性解放の一環であるとして、フリーセックスを支持した。かくて、セクシュアリティをめぐる規範は大きく変化した。しかしやがて、「性の解放は、男に女の体へのより大きなアクセスを与えたのみではないか」「家父長制下における性の解放は、結局、男にとって都合のよい形での性の解放、女の性の利用にすぎないのではないのか」という議論を生んだ。

セクシュアリティをめぐる状況の著しい変化の中で、フェミニズムにおける理論化が現われた。ケイト・ミレットの『性の政治学』（1969）<sup>7</sup>と前出フィアストーン『性の弁証法』は、男による女のセクシュアリティの

支配を女性抑圧の根源として分析し、ラディカル・フェミニズムの先駆的貢献をした。ラディカル・フェミニストにとって、女の解放とは、「家父長制社会で男が規定する女の性からの解放」であり、自らの体と性のコントロールの回復を主張した。1960年代後半から全国的に展開した草の根的な女性運動は、「個人的なことは政治的」というモットーのもとにセクシュアリティを単なる「私的、個人的関係」から「政治的なもの」へと移行させた。「男と同じ権利の要求」を中心としてきた女性運動にとって、セクシュアリティの政治性を強調したことは、フェミニズム運動・理論に非常に重要な地平を開くものであった。しかし、セクシュアリティの政治性こそ、フェミニズム運動・理論にとっても激しい意見の衝突を生み出した。1970年代には、性の自由化やポルノの是非、中絶をめぐる、あるいはヘテロセクシュアリティの制度化、規範化に抗議するレズビアンズムをめぐる、フェミニズムは多くの対立と分裂を見た。

しかし、セクシュアリティは、フェミニズムとは別のルートからも、私的分野から引き出されて政治問題化した。というよりもむしろ、セクシュアリティは、既存の秩序が平和に維持されている限りプライバシーとして奥に置かれているが、いったん既存の秩序を揺るがすような現象や主張が生じるや、ただちに政治問題として前面に出てくるのだ、というべきであろう。それは、女性の平等問題としてではなく、道徳や表現の自由にかかわるからこそ、男にとって重要な問題として政治化するのである。性の解放やポルノをめぐる、一方では、伝統的価値、結婚制度、家族を守ろうとする保守勢力や宗教をバックにしたグループと、他方では、性モラルの変更を求める進歩主義者は激しく対立した。また、中絶権をめぐる、1973年に連邦最高裁による中絶合法化の判決<sup>8</sup>が出されて以来、間断なき論争が続いており、今日に至るまで、保守、革新を分かつ政治的分岐線の一つであり続けている。

ポルノ拡散をめぐる、1967年には「わいせつ物とポルノグラフィに関する大統領委員会」が設置され、中央政治の場での闘争の対象となった。同委員会の報告書は、ポルノ鑑賞と犯罪行為の間に因果関係があるとはただちに言えないとし、ポルノ規制は表現の自由を侵害することになるとした<sup>9</sup>。

司法の場における闘争としては、「Miller v. California」(1973)裁判があり、連邦最高裁判決によって、表現の自由の保障を受けない「わいせつ物」についての判断基準が示された<sup>10</sup>。「わいせつ性」は、性的表現の色欲へのアピール、感情侵害性が中心であり、女性差別とか蔑視と関連づけるものではなかった。女の体の使用であっても、「感情侵害性」は結局、女にとって、ではなく、男が判断者である。ポルノが拡散すればするほど、鑑賞する男にとって感情侵害性は希薄化する。結局、「わいせつ」を理由とするポルノ規制は著しく困難となった。

1970年代には、ビデオ、ケーブルTV等の新しいテクノロジーを通して、ポルノは一層拡散し、かつ、ポルノ自体が、単なる裸体の表象から、性器拡大、暴力的なものへと変質していった。1970年代後半、このようなコンテキストのなかで、フェミニストのポルノ批判が登場した。特にラディカル・フェミニストたちは、ポルノを「男支配、女従属を象徴するもの」としてとらえた。それまでのポルノ議論は、その反道徳性、性犯罪との関連が焦点であつたが、フェミニスト言説は、ポルノが表象するセクシズム議論の批判へと焦点を移行させ、女性の客体化、モノ化、蔑視を非難した。しかし、後述するように、ポルノ議論は、しばしばフェミニズム内での激しい対立を伴った。

法制度化を通じた反ポルノ闘争は、キャサリン・マッキノン、アンドレア・ドウォーキン等によって試みられた。「わいせつ物」取締りによる規制ではなく、ポルノで被害を受けた女性が市民的権利侵害の訴えを起こせる条例をインディアナポリス市で1984年に成立させた。ここでは、ポルノは、「わいせつ」としてではなく、「女性差別の実践」「性的にあからさまな女性の従属の描写」として定義されている<sup>11</sup>。この条例は、成立と同時に、その合憲性をめぐって、言説に圧倒的支配権を有する出版業者、書籍流通販売業者によって法廷闘争に持ち込まれ、定義の漠然さゆえに表現の自由を侵害するという理由で、1985年に違憲判決が出された<sup>12</sup>。この条例は、ポルノの持つ女性一般に対する差別性そのものを問題とするのではなく、ポルノに利用されて被害を受けた女性の救済をねらったものであったが、「表現の自由」の力はより強力であった。

1985年には、保守政権のもとでポルノ問題は再びワシントンの政治の場に持ち込まれ、司法長官の「ポルノグラフィ委員会」が設置された。同委員会は、ポルノ産業の拡大、犯罪組織との結合、ポルノの質的变化を強調して、暴力的ポルノは女性に対する暴力を誘発すること、性暴力を容認する態度を助長すること、ポルノは子供に悪い影響を与えること、子供のポルノへの利用は犯罪であること、を述べ、「わいせつ」取締りの強化を提言した<sup>13</sup>。

以上のように、アメリカでは、ポルノ問題は拡散と同時に、常に大きな社会問題として、政治、司法、立法、学界、フェミニズム理論と運動、道徳論、犯罪論、等あらゆる問題提起を巻き込んできた。

ところで、アメリカは「表現の自由の保障」に多大な価値をおく社会である。戦後マッカーシイズムによって思想弾圧が行われたという苦い歴史の記憶は今でも強く残っており、「表現の自由」の侵害に対しては著しく敏感である。このことは、出版物の法的規制は、社会的有害性（差別、性犯罪増加、子供への悪影響、等）を理由としても、表現と有害な結果との直接的関係を証明しないかぎり、著しく困難であることは、規制を試みた法律、条例がほとんど連邦裁判所によって違憲と判断されたことを見てもわかる。表現が人種差別的あるいは性差別的であり、「平等権」を侵害されたという訴えも、表現が表現という形にとどまっているかぎりは、表現が実質的に有害な結果を生じているか否かを論じることなく、ほとんど否定されてきた。グループ（女性、ある人種グループ、等）に対してではなく、特定の個人に向けられた場合のみ、名誉毀損が特別な状況において認められる程度である。マッキノン（1993/95, p. 93）<sup>14</sup> は、表現が平等を侵害しうるにもかかわらず、「表現の自由」と「平等権」とはどのように関連しているかが論じられることなく、表現の自由法は発達した、と述べ、このような表現の自由論を批判している。

しかし、アメリカでは、このような「表現の自由」の強い保障にもかかわらず、ポルノは、個人が特にそれを持ち込まないかぎり、日常生活の中に個人の意思に反して侵入してくることは少ない。公共の場にも少ない。（このような状況を一変させつつあるものが、後述するインターネット・ポルノの拡散である。）

では、日本ではどうであろうか？

## 日本におけるセクシュアリティの「大衆商品」化と非政治化

今日の日本は、日常がポルノ的記号に包囲されており、人々はそこから逃れることは不可能である。日本の性産業は、売春防止法の成立（1956）とその実施（1958）が抑制となることなく、法規制に対しては、次々と新種の風俗を考案して生き延びるというように、縮小どころか形態を多様化しつつ拡大してきた<sup>15</sup>。

特に1980年代以降、情報産業が中心となる資本主義経済の中で、女性の体は短期間のうちに商品化され、資本的利潤を生み出す道具とされてしまった。それは、いくつかの特徴をもっている。

第1に、女性の性の商品化の著しく短期間の拡散が、形態の多様化を伴って生じた。消費者の拡大、市場の巨大化は性産業の肥大化を招き、肥大化した性産業はあの手この手の新種の性商品を売り出し、消費を一層煽り、市場をますます巨大化するという螺旋的力学を生んだ。

第2に、性産業の巨大産業化、性売買産業と性情報産業の結合、先端の情報テクノロジーの活用がある。マスメディア（週刊誌、スポーツ誌、夕刊誌、テレビ番組、ビデオ）の一部がこぞって女性のセクシュアリティの商品化による利潤の拡大にのり出し、マスメディアのポルノ化現象を生み出した。マスメディア自体が大衆消費者の性的欲望の刺激装置と化し、性売買産業の宣伝媒体化となり、ポルノ消費市場をますます拡大させるという共存・共栄関係が構築されている。片居木（1995, p. 28）は、このような性売買産業と性情報産業の構造的結び付きを「マスコミ＝セックス産業複合体制」と呼んでいる<sup>16</sup>。

第3に、性商品の宣伝および流通、販売網の拡大があり、誰もが読む新聞、誰もが使用する交通機関、誰もが利用するスーパー等、人々の日々の生活圏に浸透しており、人々はそこから逃れることはできない。

第4に、性産業の国際化、観光・娯楽関連産業との結合がある。アジアへのセックスツアーは、1960年代の台湾旅行から、キーセン観光旅行、フィリピン、タイへの買春旅行へと観光・娯楽関連産業と結合して拡大した。80年代にはさらに、東南アジア女性を日本に連れてきて性産業に従事させるケースが増加した<sup>17</sup>。

第5に、「性商品」が普通の商品と同じように出回り、宣伝され、消費されるにつれ、性商品の消費自体が一般娯楽化し、後ろめたさは希薄化あるいは消滅した。電車の中で公然とポルノを眺め、レイプ・ストーリーの漫画に熱中する大衆の出現は、ますます性商品の普通商品化を促進した。

第6に、自ら性を商品化する「普通の」女性たちの出現である<sup>18</sup>。普通の女性、特に若年少女たちの性産業参入が一種の流行化し、ますます多数の若い少女たちが積極的に自らの性を商品化する現象を生み出した。女性たちの性産業への参入理由は、かつては貧困や非行、家庭環境の悪さ等の原因があることが多かったが、そのような特殊事情がない少女たちが手っ取り早い小遣い稼ぎ目的という動機で性を売るケースが増加した。

多数の、しかも若年の、どこにでもいる「普通の」女性たちの性産業参加という現象の出現は、日本の性産業肥大化を極めて特殊化するものである。アメリカでも性産業に引き入れられる少女たちの多くは14-15歳、家出や家庭の貧困、崩壊等の問題を抱える少女、だまされたケースがほとんどだとされており、また、子供の時に身近な人による性的搾取・利用を経験した者が多いと言われている。普通の家庭の少女で、通学しながら、しかも友人を通してかなり集団的に性産業に参入するという例は報告されていない。

## マスメディアが作る言説空間の日米差

表現の自由によるポルノの法的保護が強いにもかかわらず比較的日常生活に侵入してこないアメリカと、日常生活に浸潤している日本。日米の違いは一体どこから生じているのだろうか？この問題を、第1に、ポルノおよびポルノ的メッセージの生産、宣伝、流通、販売における差、第2に、マスメディアの自主規制における差、第3に、住民運動、市民運動、市民団体運動における差、という3点から見てみよう。

- (1) アメリカの一般の大手出版社はポルノを出版しない。ポルノの出版は、ポルノの出版社による。日本の大衆ポルノ誌は、出版界に最も大きな影響力を持つ最大手出版社によって出版されている。これらの大手出版社は、文芸書、一般教養書、子供向け書籍、学術書からポルノ的雑誌まで、たこの足の営業組織である。
- (2) アメリカで大きな販売部数を持つ大衆向け一般週刊誌は、ポルノ写真やポルノ広告を掲載しない。日本の大衆週刊誌の一部は、近年ポルノ掲載によって発行部数を拡大してきたが、その表現のどぎつさは増す一方である。
- (3) アメリカの大手新聞にポルノ誌広告が掲載されることはない。新聞の公共性、一般家庭に入っていくメディアであることに照らして、「広告掲載についてのガイドライン」を設定して自主規制を行っているからである。最終的には市民の目があり、不適切な広告については抗議の声が新聞社に寄せられる。広告欄も新聞の一部であり、新聞社は掲載について責任を持つ<sup>19</sup>。日本の大手新聞社はどこもポルノ的雑誌の広告を毎週定期的に掲載しており、これらは重要な広告収入源となっている。
- (4) アメリカでは、電車、駅等の公的場にポルノ的広告は掲載されない。郵便箱、電話ボックスにポルノチラシが入れられることもない。日本では新聞での広告に加えて、日々大勢の人々を運ぶ公共の輸送機関である電車の天井からぶら下がるという形態の広告が広く用いられている。個人の家庭の郵便箱にはアダルトビデオや性サービス関連のチラシが投げ入れられる。
- (5) 日用品を販売する大手スーパーはポルノを陳列、販売しない。日本のコンビニ等は、ポルノ的雑誌の陳列、販売所となっている。
- (6) アメリカのポルノ消費者は、ポルノをプライベートな場所で見るといった一種のルールがある。日本の消費者は、公的な場所で、人の目もはばからず読む。ポルノやアダルトビデオのモデルあるいは売春することの遊び

化、「みんながやれば怖くない」という日本的集団心理が、うしろめたさを消滅させた。人の目が行動抑制として機能していた日本文化の消滅もある。

(7) アメリカは、「表現の自由」が外部的に規制されることを嫌い、自主規制、業界規制によって、社会的に容認される範囲内に抑さえようとする。日本の業者は、金もうけになるか否かの商業主義によって支配されており、社会的責任からの判断基準はもっていないように見える。言説を支配するのはメディアであるが、自己点検機能を持たないし、メディアを批判するメディアは不在または縁的存在ということだろう。

(8) アメリカでは、地域住民の運動によって、「表現の自由」と他の利益（子供の健全育成、他人への迷惑制限、家族価値の保護、等）との調整の措置が採られる。ゾーニング、時間制限、展示方法の制限、宣伝の制限、等である。特に、コミュニティの構成員の一人として、自分達はどのようなコミュニティに住みたいか、どのようなコミュニティを作りたいか、を論じる地域住民運動は大きいインパクトを持ちうる。もともと市民運動の弱い日本で、青少年の健全育成に悪影響をもたらすという理由からのポルノ規制運動は一部で展開されたが、市民からの抗議の声を受けて、ポルノ的記号の拡散者側が態度を変えるということはずまない。

結論として、言説の生産、宣伝、流通、販売の面でも、メディア自体による自主規制の面でも、また、市民運動の面でも、アメリカでは、ポルノの日常生活への拡散を抑制するいろいろなカウンターパワーが存在するのに対して、日本では、拡散する要素ばかりが強力に作用し、それに立ち向かうカウンターパワーが不在または著しく微弱であるということだろう。

女性たちは、いつの時代にも、生活に追い詰められ、あるいはだまされて性を売った。売春は女の職業の最も古いものであったという。しかし過去においては、女性に広くあまねく自らの性の商品化を煽るマスメディアは存在していなかった。情報時代の今日、メディアは言説の最大の生産機関となった。フーコーは、セクシュアリティは禁止によって規定されるのではなく、何をすべきかの奨励によって規定されると述べた。日本のマスメディアの性情報や性売買産業が発信するポルノ的メッセージは、日常的に、女性たちに性の商品化を奨励し、男たちにはその消費を奨励している。我々はこのような言説空間の中で日々を生活している。このような言説空間の中で、日本人男女の主体構築が行われ、現実が構築されているのである。

### アメリカにおけるポルノ、売春をめぐるフェミニズム言説<sup>20</sup>

フェミニズム理論と運動は、ポルノをめぐる、激しく衝突したことは前述した。ここで、いろいろな考え方の中でも特に二つの相対立する考え方に焦点を置いて論じたい<sup>21</sup>。しかしその前に、伝統的議論に触れると、ポルノ反対派は、家族という制度内での生殖と結合した性の支持から、ポルノは性欲を刺激し、性犯罪、婚姻外出生等の社会問題を誘発するものであり、社会道徳を低下させ、人間の品性を侵害すると主張する。売春も同様である。

それに対して、リベラリズムの中でも特に個人の自由を中核的価値とする流れは、根本原則として、個人はその自由意思により自らしたいことを合理的に選択することができるという人間観に立ち、そのような個人の自由を最大限に支持する。「表現の自由」は個人が享受すべき権利であり、ポルノ制作も「表現の自由」として保障されるべきであると主張する。ポルノ鑑賞は、消費者にとって単なるファンタジーであり、カタルシス道具であり、ポルノ鑑賞と性犯罪との間には直接的因果関係があると科学的に証明されないから、その制限を正当化しない。不道徳性自体は犯罪化の理由とならない。売春についても、強制が伴うものは否定されるべきであるが、自由意思に基づく選択としての売春と買春は、契約の自由として尊重されるべきである。不道徳性は否定の理由にならない。

フェミニズムの中で、ポルノ規制に反対するリベラル・フェミニズムは、このようなりベラリズムの上に立っている。リベラル・フェミニズムの長い伝統は、女性も男性と同様の合理的判断能力を持ち、自己の行動を選択

できること、したがって男性と同じ権利と自由の享受を主張してきた。このような考え方に立って、ポルノモデルになること、売春することも、職業選択の自由であるという主張も出てくる。労働市場における性差別ゆえに女性の職業選択肢は限定されており、低賃金職に押し込められているという現実があり、一部女性が高賃金を伴う性産業への就業を選択するのは、性差別的労働市場においてはむしろ合理的選択である。他人や公権力が、女性の売春選択は不適切であるとして否定することや、女性のための特別の保護策をとることは、かえって女性を劣等視することになる。自由で対等な私人間での性的スキルやサービスの提供という労働契約であり、体を売っているのではない。売春の犯罪化、売春婦という社会的にネガティブな烙印が差別の原因となっているとし、売春の非犯罪化を主張する。ただし、「自由」な「選択」に基づかないものについては、不当である。したがって、「強制」を伴うもの、非対等な力関係の中での隷属的契約、十分な判断能力に欠ける若年者の場合は、否定される。

もちろん、リベラル・フェミニズムがこのような考え方で統一されているわけでは決してなく、女性にとって望ましい選択ではないとしつつも、「国家権力による規制への反対」「女性保護的な特別の法的措置への反対」「女性の自由意思の尊重」「自己の体の管理権」というように理由付けに幅があると言うべきであるが、個人の選択の自由を基本原則としている。

セクシュアリティに関して、リベラル・フェミニズムの基本原則に対してアンチテーゼを構成するのが、ラディカル・フェミニズムである。多くのラディカル・フェミニストにとって、セクシュアリティは人間存在の中心であり、男女の社会関係を築くものである。まさにそれゆえにこそ、男による女の支配の中核となっているのである。ポルノは単なる表現ではなく、力関係の表象である。

マッキノン (1989)<sup>22</sup> の次の言葉は、このような考え方の核心を的確に表明している。「セクシュアリティがフェミニズムにとって意味するものは、労働がマルクス主義にとって意味するものと同じである。セクシュアリティは最も自己に属するものでありながら、最も奪われているものである。……セクシュアリティは、ジェンダーの社会関係が構築され、編成され、表現され、方向付けられる社会的プロセスである。そのプロセスを通して、……“女”と“男”という社会的存在が作り出され、その男女関係が社会を作り出す。」(p. 3) マッキノンにとって、男による女の支配は性的である。「ポルノは、ファンタジーでもなく、カタルシスでもない。性的現実である。ポルノの中での女の表象は、現実の女の生き方を規定する。ポルノはいつでも手に入る性的物を提供する。」(ドウオーキン、1979、pp. 199–201)<sup>23</sup>

ラディカル・フェミニズムの考え方によれば、ポルノにおいて、女は主体としての存在を失い、客体化、モノ化される。ポルノは、知性、感情を持つ女の全的人間としての存在を否定し、女を非人間化し、性器に還元する。ポルノは大衆文化の中で、女の従属を支える最も強力な手段の一つである。

ポルノも、売春も、レイプ、暴力、セクシュアル・ハラスメント、子供の性的利用と同様に、性的侵略であり、セクシュアリティの支配を通じた女の支配であり、女のセクシュアリティの搾取である。売春は、労働ではありえない。女性の自由意思に基づく選択ではありえない。女の性の商品化の促進ではなく、性のコントロールの自らの手への回復こそが、女性の従属からの解放への道である<sup>24</sup>。

1980年代、今まで大きな社会的発言権を持たなかった性産業従事者、元従事者の間から、性の商品化をめぐる賛否相対立する組織的運動と発言が出てきた。

一つは、売春する権利の主張である。COYOTE<sup>25</sup> というような性産業従事者や性的自由主義者からの発言と運動に加え、売春を労働として認めるべきであるという主張の理論化が行われるようになった。特に有名なのは、デラコスト&アレクサンダ (1987)<sup>26</sup> らが先鋒に立つが、彼女らは、売春は自由意思による職業選択の一つであるとして、「売春する権利」を主張する。売春婦ラベルが売春婦への偏見を生み出してきたとして、売春を性的サービスを提供する労働 (セックス・ワーク)、売春婦をセックス・ワーカーとして、再概念化しようとする。ヒモはビジネス・マネジャーである。セックス・ワーカーが提供するものは性的サービスであり、体の売渡ではない。労働者として、労働条件の改善、訓練によるスキル向上等が必要である。研究者の中にもこのよう

な主張の擁護者もいる（ザッツ、1997）<sup>27</sup>。

二つには、売春サバイバーの組織 Whisper 等の声があり、上と全く逆の立場に立つ。売春は「自由意思」に基づく職業選択ではない。売春開始時期は14歳位であり、多くは子供の時に性的、身体的虐待を経験している。女性や子供を売春に押しやる「力」、いったん売春に入るとそこから出にくくする「拘束力」がはたらく。レイプ、暴行、ポルノ撮影で心理的、身体的に拘束される。ポルノは売春婦教育の役割を果たし、少女を売春の世界に慣らししていく。売春は性的搾取であり、被害者なき犯罪ではない<sup>28</sup>。

売春は女性にとって権利か、それとも性暴力かの問題は、国際舞台での攻防となった。

「北京での世界女性会議」で採択された「行動綱領」は、「女性への暴力」を非難したが、その中には強姦、夫・恋人による暴力、人身売買、セクシュアル・ハラスメント等は含まれたが、「売買春一般」を入れることに対しては一部から強い反対が出され、結局「強制売春」のみが入れられた。「一部の政府による妨害と NGO の動き」があったためだという<sup>29</sup>。「強制と自由」「成人売春と児童売春」「第三世界における売春と第一世界における売春」「売春と人身売買」を区別し、成人による自由売春を正当なる労働化しようとする動きは、国際的に勢力を増しているようだ。

## 日本における「性の商品化」をめぐる言説

日本でも、性の商品化の是非をめぐってはさまざまな言説があり、アメリカにおける言説と多くの類似性が見られる。大きくまとめると、性の商品化は、(1)強制による場合は悪いが、自由意思による場合は悪くないとする言説と、(2)自由意思による場合でも強制による場合と同様に悪いとする言説、とに分れる<sup>30</sup>。

第一の、強制は悪いが、自由意思による性の商品化は悪くない、という説（例えば、橋爪）<sup>31</sup>は、個人の自由意思、主体的選択、合意、自由契約、被害者不在という一連のリベラリズムの概念に依拠している。性産業で働く女性たちの性的自由と自己決定権の尊重からの肯定もある（川畑）<sup>32</sup>。自由売春を職業の一つ、性的サービス、スキルの提供に従事するセックス・ワークとして位置付けていこうとする立場からは、売春婦ラベルは売春婦差別を助長しているからこれをやめ、労働者としてのステータスを与えようとする。したがって、搾取のない、より良い性の商品化こそが大切となる（瀬地山）<sup>33</sup>。

これらの説が性の商品化をむしろ積極的に肯定的評価をしていこうとするのに対して、ある意味ではより消極的にだが、ポルノ・売春は必要悪、あるいはどうせ消滅しないとしてその存在を認めていこうとする立場がある。男の欲望本能論・生物論、犯罪防止効果（犯罪助長ではなく、ファンタジーのカタルシス効果を強調）等が用いられる<sup>34</sup>。商品化される女性への配慮はあまりない。

ポルノに関しては、ポルノは表現であり、女性差別的であっても、表現の自由はそれ以上の社会的価値があるものとして保障されるべきであるとする表現の自由の最大限の保障論がある<sup>35</sup>。しかし、「表現の自由」と「男女平等」という二つの基本的人権が衝突する時、どう調整されるべきか、という議論は欠如している。

第二の、性の商品化は、自由でも強制でも悪いとする言説において、個人の自由意思で行われる性の商品化であっても否定されるべき理由として言及されている主なものを挙げると、第1は、「社会規範」に根拠を置いた制限である。これに属するものとして、「性道徳論」：それ以上さかのぼることのできない社会の根本規範として、人の尊厳、社会の善良の風俗を守る性道徳があり、性の商品化はそのような性道徳に違反するという説（永田）<sup>36</sup>；「公共の福祉論」：表現の自由は絶対のものではなく、公共の福祉から一定の制限を受ける（紙谷）<sup>37</sup>；「自由の非絶対性」：「自由」は最高の価値ではない、女性の尊厳という他の価値との調整が必要であるという説；「他への迷惑・不快論」：性を商品化する本人にとってはよくても、女性一般を性的存在としてステレオタイプ化するから、他の女性には迷惑；「性規範論」：セックスは愛と結合すべきものであり、セクシュアリティは金銭で売買すべきでない、等がある。

第2は、「女性差別」論からの反対である。性の商品化は、女性差別、女性の主体性の否定（浅野）<sup>38</sup>、女性の性的客体化・モノ化、女性の人間性の歪曲、女性蔑視観の助長、性犯罪助長、女性の人権・尊厳の侵害、等の言葉で表現される。セクシュアリティは人格の一部であるという基本的考え方に立っている。

## セクシュアリティをめぐる言説／知／力と主体の構築

ここで、セクシュアリティをめぐるさまざまな言説の主要な対立点を取り出し分析しよう。ただし、異なる言説をリストアップして言説マップを作成し、相違点を対照し、議論の強さ、弱さを論じるという、言説の静的なとらえ方ではなく、主体や現実の構築にはたらきかける言説作用として動的にとらえることが目的である。すなわち、セクシュアリティについてのさまざまな言説がどのような言説空間を作っており、言説的ヘゲモニーを求める闘争が展開されているか、誰が言説生産への参加者であるか、言説の裏にどのような力が潜んでいるか、どのような主体が構築されているか、どのような現実が構築されているか、どこに変化の可能性があるか、というような問題を取り上げたい。

### 言説、力、主体

「権力と知の結び付きが行われるのはまさに言説においてである。言説は権力を運び産出する。」（フーコー、p. 129）<sup>39</sup> かつては点として存在した性産業であるが、マスメディアの性産業化、性情報産業と性売買産業の結合により、日本のセクシュアリティをめぐる言説の巨大な生産機構が作り出され、言説流布の経路は著しく拡大された。点在から網の目状の拡散となった。マスメディアや性売買産業が発信するポルノ的メッセージは、まさに圧倒的にヘゲモニックな言説群として、日本のセクシュアリティを規定している。ポルノ的フィクションが、日本の大衆文化の性的、社会的想像の形成において、他の競合的言説のどれよりも強く作用している。セクシュアリティについての社会通念を形成し、女性の性の商品化を自然化、当然化した。言説の背後に潜んでいる力、利害関係を隠すことに成功した。「性についての真理を産出する巨大な仕掛け」（フーコー、p. 73）が作り上げられたのである。

セクシュアリティについての言説は、体の言説的構築を通して主体／アイデンティティを構築し、コントロールする。マスメディアが生産し流布しているセクシュアリティについての言説は、女に対しては、自らのセクシュアリティの商品化、モノ化を、男にはその消費、支配を奨励している。女をあくまで性的存在、男の快樂のための性器に縮小しようとする。その逆は絶対に生じない。言説の生産、流通を支配するマスメディアは、男権によって支配され、男権中心のセクシュアリティの再生産機構となっている。

日本におけるセクシュアリティをめぐる言説空間は、自らのセクシュアリティをすすんで商品化する女性主体を作り出した（川嶋、1996）<sup>40</sup>。力は、主体の同意という形をとる時、最も効果的に作用する。主体のアイデンティティの一部として認識され、個人にとって当然に見える時、力の存在が隠される<sup>41</sup>。セクシュアリティを主体的に売る女性の創出は、強制を不要とする。「売られる女」から「売る女」へと移行した<sup>42</sup>。女性たちの自由意思による主体的選択としての性の商品化という表相を取るとき、女のセクシュアリティを支配、搾取しようとする男権的力・利害は隠蔽される。

禁止ではなく、奨励する言説が、主体構築と現実の創出にいかにか大きな力を持ちうるかの具体的例を示しているのが「援助交際」である。「援助交際」という慈善的に美化された言葉が与えられたことによって、好奇心をかき立て、より多くの少女たちの参入、利用者の拡大を促進した。それによって、「援助交際」をより一層現実として構築することに貢献し、メディアに格好の話題を提供し、一層の扇動、まさに「循環的扇動」（フーコー、p. 58）というべき現象を生み出した。もし、メディアが「高校生、中学生、小学校高学年生による少女売春の増加」「少女買春する男たちの増加」という表現を用い、少女たちの性を買う男たちを非難する言説が流

布されていたら、異なる現実が現出されていたに違いない<sup>43</sup>。

性を自発的に売る女たちの出現は、フェミニズムが追及してきた「女の主体化」の達成と言うべきであろうか？それとも、単なる「受動的な客体」から「能動的な客体」への移行<sup>44</sup>あるいは「疑似主体化」にすぎないのか？このような女性主体とは、一体、どういうものなのか、男性主体とどのような関係にあるのかを見なければならぬ。

## 主体と客体

現代女性解放運動は、女の主体の主張、客体化からの解放を主張した。ボーヴォワールは、今からちょうど50年前に、「男は主体であり、女は他者であること」「主体＝他者の関係は人間の意識にとって本質的なものであるが、通常それは相互的であり、主体であることと他者であることの両方を相互的に経験する。しかし、男女関係においては、男は常に主体、女は常に他者とされている」と述べた。そして、女が男を通して自己を位置付けるように社会化されている時、いかにそこから解放され、主体になれるかと問うた（1949/97, pp. 12-13）<sup>45</sup>。ボーヴォワールによる問題提起以来、男＝主体、女＝客体という関係からの解放は、フェミニズムにとって闘いの目標であり続けてきた。

特にラディカル・フェミニズムにとって、セクシュアリティは女の客体化の主たる領域であり、男が規定する女らしさからの解放は女の主体化への途であると主張した。「女らしさとは男にとっての性的魅力さであり、ジェンダーの社会化を通して、女は男が描く女のセクシュアリティを自己のものとする。セクシュアリティは力の一形態である。」「女の性的客体化／モノ化は、女の生き方の物質的現実となる。単なる心理的、態度的、イデオロギー的なものではない。……性的客体化は女の従属の第一次のプロセスである。」（マッキノン、1989, pp. 123-125）<sup>46</sup>

女の性の商品化は、男が女に対して欲望するセクシュアリティの提供であり、女の主体の主張、自己表現ではない。女は消費されるモノ、交換されるモノとして存在する。ポルノの制作者である男は、表現の主体として、女のセクシュアリティを規定し、消費者は表現の解釈を通して女のセクシュアリティを規定する。

このようなラディカル・フェミニズムによる分析に対しては、本質主義の批判が向けられている。ポルノには、暴力的、侵犯的なものから単なる裸体の表象までさまざまなものがあり、一律に「男支配、女従属」と結び付けることはできないという批判である。それに対し、スザンヌ・カペラーは、ポルノが女を客体／モノとして表象するそのあり方を問題にする。「女の客体化、モノ化は、男にとっては主体化である。客体、モノは決して主体とはならない。両者の間には対等なコミュニケーションはありえない。」制作者、読者、鑑賞者は、表象の主体であり、被表象者は客体として、主体の欲望と視線のために存在する。主体は客体に対して自己の欲望を投影する。客体は主体の筋書きに書き込まれ、主体の意思が客体の上に押しつけられる。主体は、客体の意思を否定する侵犯的行為を通して快楽を得る（カペラー、1986）<sup>47</sup>。

1990年代になって急速に浸透したコンピュータ・ポルノ、最新ではインターネット・ポルノは、ポルノ・コミックスと同様、コンピュータ・イメージであり生身のモデルはいないから人権は侵害されていないという議論が力を持ちやすい。しかし、ダイアナ・バタワース（1993）は、先端のメディア・テクノロジーによるポルノの有害性に警鐘を鳴らす。インターネットによって世界中に無制限に流布され、利用者はそれをダウンロードできる（ペントハウス・オンライン、ペントハウス・インタラクティブ等）。ヴァーチャル・セックスにおいては、利用者は、コンピュータ・プログラムが刺激する女とセックスする。ポルノの消費者は同時に生産者となる。コンピュータ・ポルノとインタラクティブに、利用者は女を好みに応じて選び、服を脱がせ、好きな姿勢を取らせ、自由自在にセックスする。消費者は、これまでのポルノのようにただ見る、想像するというだけでなく、より積極的に、女を自分の意のままに自由自在に操れる。さらに、実感的な三次元イメージへと進んでいる

と、バタワースは言う<sup>46</sup>。主体による客体の完全な性的支配を通して快楽の達成を追及する装置が、ヴァーチャル・セックスであると言える。

商品化される性的客体は、主体によって自由に支配されるモノであり、主体の欲望を満たすために存在するものである。女が自発的に自らの性を商品化することは、男＝主体、女＝客体・モノという関係を変更するものではない。女をあくまでセックスにし、それを自由に支配しようとする男性主体と、自らを客体化／モノ化する女性主体の構築は、男に都合のよい性関係をスムーズに現出させるのみならず、男と女の関係全般を編成する。それは、フェミニズムが追及してきた「女の主体化」とは逆行するものである。

## 言説、知、ジェンダー

知は言説によって構築される。そして、力は知／言説に内在する。言説の生産に誰が参加し、知を構築するのか？言説という力へのアクセスは、物的リソースへのアクセスと同様、決して人々の間に平等に配分されているわけではない。言説を有する者は、知を決定し、それを客観的知として、言説を持たない者に押し付けることができる。

「表現の自由」はすべての人に平等に保障されている不可侵の基本的人権として、あたかも利害関係から超越したかの表相を持っている。しかし、「表現の自由」にどのような意味が与えられるか、すなわち「表現の自由」という知の構築は、異なる参加者による異なる言説の競合において決定される政治的プロセスなのであり、そこには異なる利害関係が潜んでいる。

「表現の自由」と「平等保障」という二つ人権が衝突するとき、どう調整するのか？差別的表現は、表現にとどまっているかぎり表現の自由として保障されるべきなのか、それとも差別的表現は差別的現実を作り出すもの、平等を侵害するとして否定されるべきなのか？マッキノン<sup>47</sup>は、アメリカでは、「表現の自由」が「平等権」に優先されたと言う。「言論を持っている人たちの権力は、それが法の保護を受けるにしたがって、ますます独占的、威圧的、暴力的になってしまう」(マッキノン、1993/95、p. 94)<sup>48</sup>。

日本でも憲法が性の平等を保障しているにもかかわらず、二つの人権の衝突という問題提起すらほとんどされていないようだ。言論を有する人々の権力は、「表現の自由」という強力な「人権」によって保護され、「性の平等」という他の人権をも、あたかも当然であるがごとく、従属させてきた。「表現の自由」は言論を持っている優位者に一層多くの力を与えるものであるのに対し、「平等保障」は優位者よりも下位者が直接的受益者である。二つが衝突するとき、優位者に有利な言説が、下位者の利益を保障する言説に優先される。「表現の自由」の最大の享受者であるメディアは、「女性の尊厳」の侵害を日常的に行い、そして巨大な利潤を手にしていながら、「表現の自由」の名のもとに、保護されている。

表現の自由の内容の決定に参加するのは、まず第一にメディア関係者であり、そして裁判官であり、法学者であり、立法者であり、評論家たちであるが、いずれにしる圧倒的に男たちである。それが、女の体をめぐりものであるとしても、支配的な男の言説、特に「表現の自由論」の力の前に、対抗する女の言説、すなわち女性の体の商品化は女性の尊厳の侵害であり、性差別であるとする言説は、縁辺化あるいは無視される。あるいは、女性はまったく言説生産へのアクセスを持たない。

「表現の自由」を制限するものとして対置されてきたものは、「わいせつ」であり、「平等保障」ではない。そして、「わいせつ」の定義が、いかに、女性を排除したまま、男の言説によってつくられてきたかについては、すでに触れた。

売春は買春があってはじめて成立するわけだが、過去において、売春だけを処罰し買春を処罰対象にしてこなかったことも、言説への参加者は誰か、言説の裏にどのような利害が隠されているか、最終的決定者は誰であるのか、それによってどのような利益が保護されているのか、の分析が重要であることを象徴的に物語っている。

性の商品化をめぐるのは、売春権論や自由労働論から搾取論までさまざまな言説があることを見てきたが、性の商品化にかかわる現実には複雑であり、一般理論化することは困難である。性産業、買春者によるアジアの貧困地域の少女たちの性的、経済的搾取の現実があるのに対し、他方の極には、オフィス勤めでは到底稼げないような高収入を手に入れる売春者たちも存在することは否定できない。一般理論化は常に具体の捨象、内部差異の捨象を伴う。そこには、代表するものと、切り捨てられるものの力関係が存在する。

「売春の権利」によって利益を手にする者は、第一次的には、著しい利益をあげている性産業であり、多数の買春者である。そして、売春全体構図から見ればごく少数にすぎないが、強者の立場に立てた売春者たちがここに加わる。最も虐げられ、搾取されている弱者は、いかに数の面では多数者であっても、声なき存在であり、言説空間への参加者とはならない。彼女たちにとって、貧困の解決による売春からの脱出、より多くの選択肢の獲得こそが必要なのであり、売春の労働化による売春の継続であろうか？

### 自由、対、強制

「自由売春と強制売春」「成人売春と児童売春」「第一世界における売春と第三世界における売春」「売春と人身売買」を区別しようとする力は、世界的に勢力を獲得している。このような区別は、「成人女性による」「自由意思に基づく」「第三世界女性の搾取ではないような」売春を正当化しようとねらう言説的装置である。

「自由、対、強制」は、性の商品化の是非をめぐる議論の争点の一つであり、売春自由化論の前提となる。すなわち、女性の自己決定権は尊重されるべきであり、その否定は女性の主体性の否定になるという、リベラル・フェミニズム的主張、売春権主張者などの意見である。それに対し、売春の選択は、貧困、無知、選択の制限、情報の不足、若年等のためであり、自由で合理的な選択とは言えない、自由売春はありえない、という対抗意見がある。実際、貧困な国の貧困な家庭の少女や家族が同意したからといって、女性の自由意思に基づく売春であるとは言いがたい。自由と強制は、売春の現実においては、言葉が意味するほど対立する概念ではない。強制は、常に、自由意思による選択という表相を取りうる。

また、仮に自由意思、同意があったとしても、性的、経済的搾取は生じうる。「成人売春と児童売春」を区別する基準は年齢であるが、売春に合意できる年齢の設定は、利害関係によって決められる政治的なプロセスであり、決して、純粋に合理的判断能力の有無によって決定されるのではない。ネパールやオランダでは、1980年代に年齢引き下げが行われたという<sup>50</sup>。「第三世界における売春と第一世界における売春」もまた、売買春の国際化の中であまり意味をもたない。

「自由、対、強制」という考え方はそもそも、近代リベラル・ヒューマニズムの想定する「合理的、自律的、統一的、意識的主体」を仮定している。リベラリズムに立つ限り、なぜ女性は搾取的関係であっても選択してしまうのかという疑問に対し、説得力ある説明を持たない。搾取的であっても、女性の主体的選択であるかぎり自己決定権として尊重されるべきだという矛盾的主張をしなければならなくなる。「虚偽の認識による選択」という議論は、そもそも女性も「理性的判断力」を持つというリベラル・フェミニズムがよって立つ前提を揺るがせてしまう。「社会化による条件付け」という説明は、これまた女性の主体性の受動化を固定する危険をはらむという問題を生み出す。

それに対し、「矛盾を含む、状況的、流動的な主体」というポスト構造主義的な主体論に立つと、「自由、対、強制」という区別の陥穽から抜け出し、「主体による選択」とは、「文化・社会状況の中で構築される主体による、コンテクストの制約の中で行われる選択」ということになる。イデオロギーにはたらきかけられ、それに従う主体は、自主的に歩きだす（アルチューセール）のであり、強制は不要である。主体にはたらきかける権力の成功は、権力の隠蔽、すなわち強制の不在にある。「自由か、強制か」ではなく、文化・社会制度の中で、どのように主体が構築されているか、そのような主体によってどのような選択が行われているか、制度の中に潜んで

いる搾取性がどのような力によっていかにうまく隠蔽されているか、等が重要な分析課題となる。ただし、女性の主体性の否定、判断能力の否定ではなく、主体、判断能力にはたらきかける力の分析を重視すると同時に、受け身的に条件付けされるのではないエイジェントとしての女性の位置付けを可能にする。

### セクシュアリティは人格の一部か？

日本における近代の性欲論は、赤川（1996）<sup>51</sup>によると、「性欲＝本能論」モデルと、その後に出てきた「性＝人格論」モデルの両輪構成であった。「性＝人格論」、すなわち、性は人格の中心であり、金銭で売買してはならないという言説は、性教育、純潔教育の分野で使用され、80年代以降は売買春批判の中心的レトリックとなったと、赤川は言う。前者が主に男性の支持を受けているのに対し、後者の言説の担い手は女性を中心であると言う。前者は、売春必要論あるいは売春必要悪論へと結び付くのであるが、男の欲望／セクシュアリティについての議論が中心であり、女のセクシュアリティはほとんど論外である。それに対し、後者は、「売春は人権侵害」論の前提となる言説である。すなわち、買春はもちろん女性の人権侵害であるが、売春も自らの人権の侵害であるから許されない。言説とジェンダー利害関係の結び付きを示している。

「売春＝労働」論者および売春容認論者は、セクシュアリティは必ずしも人格の一部ではないと言う。「売春＝労働」論者にとって、売春は性的サービスの提供であり、体の提供ではない。あるいは、「売春を職業とする者は、性的仕事と自らの性生活を分離し、仕事としてのセックスには非エロ化の術を学ぶ」（ザッツ、1997）<sup>52</sup> ので、体は提供しても、心は渡さないという。体と心の分離を学習するのだという。

一方、宮台（1997、pp. 56-57）<sup>53</sup> は、「体はレイプされても心はレイプされない女子高生たちの登場」と題して、「フェミニスト的な「性は人格の尊厳」などと言うから、余計傷つけているのではないか、援助交際経験してもその後の人生を選択してしまうことになるということはない。感覚の変容もなく、ちゃんと恋愛もできる。援助交際もタバコと同じ道を歩むのではないか」と書いている（つまり、その後の生き方を決めてしまうということはない、という意味）。「まぐろ」をして、1時間我慢する」という少女たちが用いる表現は、体と心の切り離しのテクニックなのかもしれない。それでも、体への侵犯として記憶に残る経験の意味づけは、人生の時と状況に応じて変わるものである。性を売ること、さらにはレイプさえ扇動する文化の中での経験に対して、それにカウンターする文化に接したとき、まったく異なる意味づけを与え、自己の精神への異なる書き込みが行われる。レイプをどうということのない些少な日常行為として娯楽化することによって、レイプの侵犯性を抹消することが取るべき道ではなかろう。

主体は流動的であり、常にプロセスの中にある。セクシュアリティはアイデンティティ／主体の一部であるが、人によって、ライフサイクルの各段階で、また時と場所によって、人格の一次的要素であったり、二次的要素であったりする、と流動的に考えることが適切ではないか。性の商品化は、ほとんど10代、20代に生ずる。女の体の商品価値が最も高い時期である。それは、女の一生の中で、セクシュアリティが最も存在の中核的である時期、アイデンティティの形成に最も重要な時期でもある。それゆえにこそ一層、性の商品化を通じた女の主体、体への言説的および実践的刻み込みは、後々にまで大きな痕跡を残しうる。男の方は、若い時期にすでに、女の体をモノとして見ることで、自己の欲望を満たすために利用する商品として扱うことを学習してしまう。男女は、全く相対立する経験を通して、それぞれのセクシュアリティ／アイデンティティ／主体を構築する。それは、一方を支配者に、他方を被支配者にする。直接的力の行使を通してではなく、男権的言説空間の中で作られる男女の主体による自由な選択という形態を通して達成されている。

### 性の商品化の害

ラコンブ（1994、pp. 31-33）<sup>54</sup>によると、フェミニスト言説はポルノの害を、直接的害、間接的害、社会的

害の3つのレベルで論じてきた。直接的害とは、ポルノに利用される女性が受ける害である。間接的害は、ポルノ消費が性欲を刺激し、女性に対する性的強制や暴力を引き起こす害である。社会的害は、ポルノがもつセクシズムの社会化作用がもたらす害である。

直接的害について、暴力等による強制があれば直接的害が発生するが、本人の自由意思による場合は、ポルノも売春も被害者不在だという見解（例えば、前出橋爪）は、性の商品化を容認する議論として使用されてきた。しかし、婦人相談員として売春の世界を長年観察してきた兼松（1990、pp. 300-301）<sup>55</sup> は、「人間を最も人間らしくする愛の世界から遠く離れ」「売春はゆっくりとした自己破壊」であると述べている。人生のそれぞれの段階での経験は、その個人の主体、思考、行為の選択に影響を与える。対等な男女の人間関係、コミュニケーションを否定する性の商品化の経験がその後の生き方にどのようなインパクトを及ぼすか、「被害者不在」「援助交際もタバコと同じ」という単純な構図で描けないことだけは確かだろう。

間接的害をめぐるのは、ポルノの性犯罪誘発論と、性犯罪防止論（カタルシス効果論）が対立してきた（売春についても同様の意見が戦わされてきた）。ポルノと性犯罪との関係について、加害者がしばしばポルノの頻繁な消費者であること、ポルノ消費量と犯罪頻度との間の統計的関係の有無、ポルノが消費者にどのような態度の変化を生じるかの実験、によって論じられてきた。しかし、職場でのセクシュアル・ハラスメント、電車での痴漢、女性や少女さらに子供に対する性犯罪は確実に増加しているとはいえ、ポルノ消費との直接的因果関係を証明することは難しい。ポルノ消費の影響は人によって異なり、消費者がすべて性犯罪へと走るわけではないことは明らかであり、因果関係論からの有害議論は袋小路に入ってしまう。そのために、「ポルノは必ずしも犯罪を引き起こすとは言えない」という議論が、ポルノの有害性を過小評価し、ポルノを表現の自由として保護することに利用されてきた。

カメロンとフレイザー（1992）<sup>56</sup> は、「アディクション・モデル」と「コピーキャット・モデル」という代替のアプローチを提示する。アディクション・モデルは、ポルノを見れば見るほどちょっとした刺激では満足せず、より強い刺激を求めて、より過激な、よりエグゾチックなもの、より若年の少女、子供を利用したものへと拡大する。より有害なファンタジーから、さらに表象だけでは不十分で、やがて行動に移すようになることを説明する。コピーキャット・モデルは、ポルノは男の性的欲望、セクシュアリティを形成し、行動のシナリオを提供するという。売春サバイバーであるイブリナ・ジオッペ<sup>57</sup> は、売春の経験をもとに、ポルノと売春との関係について、ポルノビデオは売春婦教育のテキストであること、客の欲望を構築し、どのようにセックスをするべきか、語りを提供し、客はそこに表象されているセックスを売春婦に要求する、と述べている。

社会的害は、ポルノが持つセクシズムの社会化作用がもたらす害である。ポルノは侵犯、支配の文化を伝える。ポルノ的表象に頻繁に触れることによって、このような文化を内面化し、そのような文化規範に従って思考し、行為する男女の主体が構築されるように作用する。そのような男女が作られれば、セクシュアリティを通して支配／被支配の現実が構築され、維持される。

しかし、社会化作用の中にあっても、主体は一方向的に条件付けられるのではなく、主体による意味の解釈、異なる言説が送るメッセージとの交渉、行為の選択の余地がある。メッセージの読者は、主体として、意味の創造を行うのであり、受動的で無思考的客体ではない。それゆえに、ポルノへの反応は多様であり、そこに抵抗の力がありうる。

### 資本制と男権制の結合

売春自由化論者は、売春を性的サービス、スキルを提供する労働として位置づけ、売春というレッテルをはがすことを要求している。それに対し、売春反対論者にとって、売春は体の売買、性的搾取であり、労働ではありえない。セックスワークという言葉の使用は、売春から搾取性、支配従属関係性を払拭し、「対等な個人間の契

約関係」へと転換させるパワフルな言説的手段である。性商品から特殊性を消去し、性産業を正規の資本制産業化することによって、性の商品化から利潤を獲得している産業および個人の利益を保護しようとする。

タン・ダム・トゥルン (1990/93)<sup>58</sup> は、ラディカル・フェミニズムによるセクシュアリティ分析に対する批判として、資本制との関連、国家の政策との関連の分析の欠如を指摘している。

性の商品化は、単なるイデオロギー、文化的なことにとどまらない。物的・経済的利害とも直接的にかかわっていることは明らかである。性産業、性情報産業、観光関連産業、等が、女性のセクシュアリティの商品化によって獲得する資本制的利潤は莫大である。それに対して、性産業での従事から得る女性の利潤はわずかである。性の商品化によって、女性は通常の仕事からは到底稼げないような収入を上げるということが強調されるが、それは、逆に言えば、背後にある資本が女性の性の利用からいかに巨大な利潤を手にかけているかを示すものである。資本制的利潤がいかに生み出され、どのように配分されているかというメカニズムの分析が、セクシュアリティにおける支配・従属の分析と共に必要となる。

仮に売春を職業として見た場合、性によって最もセグレートされた職業ということになるだろう。セグレーションの打破をねらってきたフェミニズムにとっては、売春業の拡大は逆行現象ということになる。スキルの蓄積・訓練によるキャリアアップの可能性はどのくらいあるのだろうか？他の職業へと自由に転出できるように、というのが、どのようなスキルがあるのだろうか？

情報・サービスが産業の中心を占める時代になり、早々に、女性の性は、莫大な資本制的利潤を生む多様な商品として取り込まれ、男性消費者のためにサービス化、娯楽化された。テクノロジーは常に男が支配してきた。カメラ、ビデオカメラ、電話、コンピュータ、さらに近年におけるインターネットという新しいテクノロジーの発展は、男による女のセクシュアリティの支配に新しい態様と無限の拡散を与えている。

結局、女性の性の商品化は、資本制と男権制との非常に心地よい結合というべきであろう。性産業への若い女性の参入は、資本にとっても、多くの男たちにとっても、もっとも歓迎すべきことなのかもしれない。

### 性の解放か？

男の存在は、思考力を中心に規定されてきた。男は考えるコギトであった。それに対し、女の存在は、「性」を中心に規定されてきた。しかも、男にとっての「性」として。「フランス語で女のことをセックスと言うのも、女は男から見ると何よりもまず性的な存在であるという意味なのだ。男にとって女はセックスである。」(ボーヴォワール、1949/97、p. 11)<sup>59</sup>

現代フェミニズムは、女をあくまでセックスに還元しようとする、男による女の規定からの解放を求めてきた。1960年代のアメリカで性解放が進んだ時、それは女性にとって抑圧的性からの解放をもたらすものとして期待されたが、やがて、男支配の社会構造が変わらないままでの性の解放への疑問が出てきた(前述)。「問題は、女が、解放されて、どのようなセクシュアリティを楽しむか、ということである。女を客体/モノにする古いセクシュアリティをより自由に楽しむというのなら、それは空虚な勝利である。この、すでにより自由なセクシュアリティは、大体において、自由についての偽りの考えを反映している。すなわち、一方が他方を搾取し、非人間化する権利を持つという考えである。セクシュアリティの規範を変えないままでの女の解放は、無意味な目標だ。セックスは、それ自体では、女にとって解放的ではない。より多くのセックスであっても、だ。」(ソントグ、1973、p. 188)<sup>60</sup>

日本で進行している女の性の氾濫現象は、男権的セクシュアリティと性関連産業の金もうけ主義との結合によって推進されているものであり、決して男が規定する女のセクシュアリティからの解放ではない。男権支配のマスメディア、性関連産業が宣伝する女の体についての言説が作り出した、男にとって都合のよい性的存在としての女の創出にすぎない。

女のセクシュアリティをあくまで男の欲望を満たすために支配しようとする男の利益を、強制を用いることなく、女の任意的選択という形をとって達成しているものであり、セクシュアリティにおける対等性への歩みとは言えない。ポルノの侵犯性、支配性は、男権の「表象」であるが、それに同一化する女性主体を作り出すことに成功したことにより、女はセックスであることが「現実」となり、文化規範のみならず、物的状況をも編成している。

### どのように抵抗するか？

フーコーにとって、主体は言説の中で構築されるが、言説のはたらきかけを単に受動的に受け入れるのではない。人はエイジェントであり、抵抗は、言説＝力の網の目の至る所にある。なぜなら、言説／力は、単一、統括的なものではなく、ヘゲモニーを求めて競い合う言説／力の網の目を構成しており、そこは、言説間の矛盾、挑戦、衝突が生じ、闘争、抵抗が繰り返される場でもある (pp. 123-124)。

女と女のセクシュアリティは、自然なもの、生物的に規定されたものでもなく、個人が自由意思によって選択するものでもなく、異なる言説の競合と言説が作り出す現実によって構築されていく。しかしながら、個人は、完全に受動的に社会的条件付けされるのではなく、コンテキストによって制約されつつも自己の位置を選択する力を持ちうる。女の性の商品化を奨励するマスメディアのメッセージにもかかわらず、すべての女たちが性を売ることを選択するわけではない。個人はさまざまな言説の競合の中で判断し選択するという交渉のプロセスを通過する。そこにこそ、女のセクシュアリティを支配しようとする力への抵抗の可能性が存在する。

では、女をエイジェントとして、支配的言説が規定する女と女のセクシュアリティを批判し、挑戦し、抵抗することを可能にする状況は、どのようにして作り出せるのだろうか？

まず第一に、セクシュアリティを、単なる個人的なこととする見方を超えて、政治化することが必要である。女の性の商品化は、女／男の意味づけ、男女の力関係の規定を伴っていることを見るべきである。今日の日本では、労働、政治、教育等の領域における男女の不平等は政治問題化され、より平等な社会参画の達成へと一応の果実を生み出してきた。しかし、セクシュアリティを通した男による女のコントロールは、逆に強化されてきた。しかも、セクシュアリティは個人の自由の問題、私的な問題とされ、そこにはたらく力関係は不可視化され、非政治化されている。このような状況を打ち破るためには、セクシュアリティにおける不平等が、個々人の意識の面でも、また社会的レベルでも、可視化され、政治化される必要がある。

第二に、言説／知に内在する力関係を露出することである。「ジェンダーは男女の肉体的差異に意味を付与する知であり」「知とは世界を秩序立てる方法であり、……社会組織と不可分なものである。」(スコット、1988/94, p. 16)<sup>61</sup> 女／男の意味、女／男のセクシュアリティの意味は、知を構成し、社会秩序のあり方を規定する。女／体／セクシュアリティをめぐるどのような知が構成されるかは、まさに言説／力の衝突を通した闘争の場である。知の構築のプロセスにおける女の排除を批判し、女自身が知の生産者となることによって、女の不利を当然化している知を修正していくことが必要である。

第三に、現在の日本における女のセクシュアリティを規定しているヘゲモニー言説に対し、批判、挑戦、闘争、抵抗することである。特に、マスメディアが持つ圧倒的力の存在を認識し、常に批判の目を向けることが必要である。言説の裏にある力、利害を露出すること、言説の中に隠されている男支配、女従属の力関係を明らかにすることである。中立性に隠された支配のメカニズムを理解することである。

第四に、女のセクシュアリティをコントロールしようとする言説／力に抵抗する対抗的諸言説、代替の知の生産、流布が必要である。支配的言説は、自らに整合する現実を自然化、当然化することによって、それに対する批判力を鈍麻させようとする。したがって、批判する目を養うことに役立つ、抵抗の言説の生産が必要となる。

第五に、自分自身の主体が、どのような力によってはたらきかけられ、いかに構築されているか、について常

に注意を払うことである。女性は、しばしば、自分たちを下位に置く社会秩序を意識的、無意識的に受け入れることによって、その秩序の維持に加担するという、共犯的役割を担ってきた。我々は皆、秩序の中に生まれ、それによって主体を形成されているのであり、したがって、常にすでにその秩序の一部となっている。そして、そのような主体として、日々を経験する。それでは、すでに社会的に構築されており、ヘゲモニックなイデオロギーの作用を吸収してしまっている我々は、どのようにしたら、自らを構築するプロセスや自らの日々を経験を分析し、批判する力を持ちうるのだろうか？これは、現代フェミニズムに投げかけられた重要な問題提起であるが、オードリ・ロード（1984）が言うように、「自分自身の主体の中にあるヘゲモニックなイデオロギーの作用を常に認識し、自己点検すること」は重要である。「我々の経験の自己点検は知の源であり、我々を構築する社会的プロセスとイデオロギーを明らかにする手立てとなる。」<sup>62</sup>

異なる言説／知との出会い、異なる経験は、我々に、自分自身の中にある支配的言説の存在を認識させ、それに抵抗する力を与える。

「性の氾濫」という表現が一般的に使用されるが、それはあくまで「男に提供される女の体の氾濫」なのであり、決してその逆ではありえない。もし、「女に提供される男の体の氾濫」であるなら、おそらく、風紀を乱す、不快だという怒りの声が男たちの間からたちどころに上がることだろう。それは、社会秩序への容認されざる侵害となるだろう。日常化された「女の体の氾濫」を性の非対等として明確に認識することは、支配的文化的批判への出発点となる。我々は、日々さまざまな矛盾を経験をする。新聞で女に対する性犯罪の記事を読みながら、下段に掲載されている女の体への侵犯的な雑誌宣伝を見る。女の性器描写をでかでか書きたて、女の体への自由なアクセスを宣伝する雑誌広告が天井から下がる電車に乗る時、ポルノを眺めている男、レイプ・ストーリーの漫画に熱中している男の隣に座る時、怒り、不快さを感じつつ、そこから目をそらすか、あるいはあたかもそんな現実が存在しないかのごとく無視しなければならないという矛盾を日々経験する。そして、駅に張られた、「痴漢は犯罪です」と書いたポスターの横を通り過ぎ、セクシュアル・ハラスメントが性差別として法律化されたことを一歩前進であると喜ぶ。このような矛盾した経験を見つめることにより、批判し、抵抗する力を自らの中に育てることができる。支配に抵抗できる主体を作り出すことを可能にする。

そして、最後に、男権主義と商業主義による支配に対抗する、新しい社会価値の創出こそが必要であろう。社会価値とは、どのように生きたいか、どのような社会に生きたいか、どのような社会価値を次世代に伝えたいか、という観点から意味づけされるものであろう。それは、上から下へと押し付けられるのではなく、参加的、複数的、流動的、構築的な社会価値の創出ということになるべきであろう。男女の平等と尊厳の実質的実現は、そのような社会価値の重要な柱の一つを構成するべきであろう。

(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター教授)

## 注

1. Shulamith Firestone, *Dialectics of Sex* (New York: William Morrow & Co, 1970) p. 3. シュラミス・ファイアストーン『性の弁証法』林弘子訳（評論社、1975）。
2. 『現代のエスプリ 売春・買春：「生活苦型」から「享楽型」へ?』No. 230, 1986.
3. ミッシェル・フーコー『性の歴史I：知への意志』渡辺守章訳（新潮社、1986）Michel Foucault, *La Volonte de Savoir* (Editions Gallimard, 1976); Michel Foucault, *Power/Knowledge: Selected Interviews & Other Writings, 1972-1977*, edited by Colin Gordon (New York: Pantheon Books, 1980).
4. ルイ・アルチューセルのイデオロギー論において、主体／個人はあらゆるイデオロギーにとって構成的である。個人は、イデオロギーに常に呼びかけられ、自由な主体として服従を受け入れることにより、自主的にひとりで歩く。「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」柳井隆訳、柳井隆・山本哲士著『アルチューセルのイデオロギー論』（三交社、1993）に収録。
5. ただし、このことは、主体やアイデンティティを固定的にとらえるのではなく、流動的にとらえることと矛盾するものではない。

6. セクソロジーの面で特に画期的だった研究として、Alfred C. Kinsey, *Sexual Behavior in Human Male* (Philadelphia: W. B. Saunders, 1948); William Masters and Virginia Johnson, *Human Sexual Response* (Boston: Little, Brown and Company, 1966).
7. ケイト・ミレット『性の政治学』藤枝濤子他訳 (ドメス出版、1975) Kate Millett, *Sexual Politics* (New York: Simon & Schuster Inc., 1969).
8. Roe v. Wade, 410 U.S. 113, 153 (1973).
9. The President's Commission on Obscenity and Pornography.
10. Miller v. California, 413 U.S. 15 (1973) は、「わいせつ」の判断についての、3つの基準を示した。現代のコミュニティの基準に照らして、平均の人間が、作品を全体として見て、(1)色欲 (prurient interest) に訴えるものであるか、(2)性的行為の表現があらゆるさまに感情侵害的 (a patently offensive way) であるか、(3)作品が全体として文学的、芸術的、政治的、科学的価値に欠落しているか。  
マッキノンとは、「問題は、ポルノグラフィが増えるにつれて、ポルノグラフィによって事実上の文化的基準が設定されるようになる」と指摘する。『ポルノグラフィ：「平等権」と「表現の自由」の間で』柿本和代訳 (明石書店、1995) p. 114.
11. インディアナポリス市条例は、ポルノとは、「性的にあからさまな女性の従属の描写であり、かつ、女性が、(1)苦痛や凌辱を楽しむ性的モノとして描写され、(2)レイプを喜ぶ性的モノとして描写され、(3)縛られ、切られ、切断され、殴られ、傷つけられ、あるいは肉体の部分へと部分化され、(4)物体や動物によって挿入され、(5)蔑視、障害、拷問という状況の中で、汚く劣等に、出血し、殴られ、傷けられ、これらを性的なものにするように描写され、(6)支配、征服、侵害、搾取、所有、利用のための性的モノとして、あるいは隷属、服従、陳列の姿勢や位置を通して性的モノとして描写されているもの、の一つまたはいくつかに該当するもの、と定義している
12. American Booksellers Association, Inc. v. Hudnut, 771 F. 2nd (1985). 高橋和之「ポルノグラフィー性支配」『岩波講座 現代の法11：ジェンダーと法』(岩波書店、1997) 参照。
13. *Final Report of the Attorney General's Commission on Pornography* (Nashville: Rutledge Hill Press, 1986).
14. キャサリン A. マッキノン『ポルノグラフィ：「平等権」と「表現の自由」の間で』柿本和代訳 (明石書店、1995) Catharine A. MacKinnon, *Only Words* (Harper Collins, 1993).
15. 池田恵里子「性産業の拡大と市場再生産」『買春に対する男性意識調査』報告書 (男性と買い春を考える会、1998)。
16. 片居木英人「性の商品化ということ」林千代編婦人福祉研究会著『現代の売買春と女性：人権としての婦人保護事業を求めて』(ドメス出版、1995); 亀井淳『写真週刊誌の犯罪』(高文研、1987) pp. 159-165も参照。
17. 松井やより「アジアと買春-セックス・ツアーと人身売買」『買春に対する男性意識調査』報告書、注15と同じ; ロン・オングレディ『アジアの子どもとセックスツアーリスト』エクパット・ジャパン監修、京都YWCA アプト訳 (明石書店、1995); 菊地京子「周縁としての外国人女性労働者」『女と男の時空：日本女性史再考 VI 溶解する女と男』(藤原書店、1996)、等参照。
18. 伝統的に、売春する女性を特殊グループ化し、一般子女と区別するという線引きが行われてきたが、ここではそのような意図はなく、メディアの報道でしばしば用いられている表現として使用している。
19. 筆者が1995年秋に、下記のアメ리카大手新聞社9社に対し送った質問票への回答に基づく。アトランタ・ジャーナル、シカゴ・トリビューン、ロスアンジェルズ・タイムズ、マイアミ・ヘラルド、ニューヨーク・タイムズ、サンフランシスコ・クロニクル、ウォールストリート・ジャーナル、U.S.A.ツデー、ワシントン・ポスト。
20. Dany Lacombe, *Blue Politics: Pornography and the Law in the Age of Feminism*. (Toronto: University of Toronto Press Inc., 1994) 参照。
21. この議論では、リベラル・フェミニズムとラディカル・フェミニズムの対立を中心とするが、セックス・ラディカルと呼ばれる考え方もある。これは、ポルノも含め、人間の性的欲望、性的アイデンティティのさまざまなあり方を認めていこうとする。Carole S. Vance (ed.), *Pleasure and Danger: Exploring Female Sexuality*. (Boston: Routledge & Kegan Paul, 1984). その中でも特に、Gayle Rubin, "Thinking Sex: Notes for a Radical Theory of the Politics of Sexuality." また、ポルノには否定的であっても、国家権力の介入による規制に反対する意見もある。
22. Catharine A. MacKinnon, "The Problem of Marxism and Feminism." In *Toward a Feminist Theory of the State* (MA: Harvard University Press, 1989).
23. Andrea Dworkin, *Pornography: Men Possessing Women* (New York: E. P. Dutton, 1979).
24. ポルノは「男支配、女従属の表象であるとともに、そのように男女の生き方を規定する」というラディカル・フェミニズムのポルノ分析に対しては、本質主義、単一主義の批判が向けられている。
25. COYOTE とは、Call Off Your Old Tied Ethics.
26. F. Delacoste & Priscilla Alexander, *Sex Work*. (Pittsburgh: Cleis Press, 1988).
27. Noah D. Zats "Sex Work/Sex Act: Law, Labor, and Desire in Construction of Prostitution." *Signs*, Winter 1997, vol. 22, no. 2.

pp. 277-308.

28. イブリナ・ジオッペ「商業的性的搾取からの生還」「売買春をめぐる性的自由主義者の嘘を暴く」『買春に対する男性意識調査』注15と同じ。
29. ジャニス・レイモンド「女性に対する暴力としての売買春：北京会議等における NGO の妨害」『買春に対する男性意識調査』注15と同じ。
30. 江原由美子編『フェミニズムの主張』（勁草書房、1992）および江原由美子編『フェミニズムの主張2：性の商品化』（勁草書房、1996）；「特集＝ポルノグラフィ」『現代思想』1990年1月号；『ニューフェミニズム・レビュー3 揺れる視線の政治学：ポルノグラフィ』（学陽書房、1992）、等参照。
31. 橋爪大三郎「売春のどこが悪い」『フェミニズムの主張』注30と同じ。
32. 川畑智子「性的奴隷制からの解放を求めて」『フェミニズムの主張2』注30と同じ。
33. 瀬地山角「よりよい性の商品化へ向けて」『フェミニズムの主張』注30と同じ。
34. 小浜逸朗「ポルノ批判の言説に寄せて」『現代思想』1989年9月号。「性欲の現象論」『現代思想』1990年1月号。
35. 奥平康弘『性表現の自由』（有斐閣、1986）
36. 永田えり子「性の商品化は道徳的か」『フェミニズムの主張2』注30と同じ。
37. 紙谷雅子「性の商品化と表現の自由」『フェミニズムの主張2』注30と同じ。
38. 浅野千恵「潜在的商品としての身体と摂食障害」『フェミニズムの主張2』注30と同じ。
39. ミッシェル・フーコー『性の歴史I：知への意志』注3と同じ。
40. ホーン川嶋瑤子「日本の大衆ポルノ文化のジェンダー・イデオロギー：女のアイデンティティとセクシュアリティの構築」『日米女性ジャーナル』no. 20, 1996.
41. フーコー、p. 112、およびルイ・アルチュセール「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」p. 101参照。注4と同じ。
42. 岩永文夫『読売新聞』1995年2月5日。
43. 援助交際について異なった視点から記述したものとしては、宮台真司『制服少女たちの選択』（講談社、1994）、黒沼克史『援助交際』（文芸春秋、1996）、大治朋子『少女売春供述調書』（リヨン社、1998）、庄子晶子・島村ありか・谷川千雪・村瀬幸浩『“援助交際”の少女たち』（東研出版、1998）等参照。
44. 白藤花夜子「割れた鏡のカレイド・スコープ」pp. 13-16『ニューフェミニズム・レビュー3 揺れる視線の政治学：ポルノグラフィ』注30と同じ。
45. シモーヌ・ド・ボーヴォワール『第二の性I』井上たか子、木村信子監訳（新潮社、1997） Simone de Beauvoir, *Le Deuxieme Sexe* (Gallimard, 1949)
46. Catharine A. MacKinnon, "Method and Politics." In *Toward a Feminist Theory of the State*, Ibid.
47. Susanne Kappeler, "Subjects, Objects and Equal Opportunities," from *The Pornography of Representation* (Polity, 1986). Reproduced in *feminism and sexuality*, edited by Stevi Jackson and Sue Scott (New York: Columbia University Press, 1996).
48. Diana Butterworth, "Wanking in Cyberspace: The Development of Computer Porn." from *Trouble and Strife*. no. 27, 1993. Reproduced in *feminism and sexuality*, edited by Stevi Jackson and Sue Scott, Ibid.
49. キャサリン A. マッキノン『ポルノグラフィ：「平等権」と「表現の自由」の間で』注14と同じ。
50. ジャニス・レイモンド「女性に対する暴力としての売買春：北京会議等における NGO の妨害」『買春に対する男性意識調査』注15と同じ。
51. 赤川学「売買春をめぐる言説のレトリック分析」『フェミニズムの主張2』注30と同じ。
52. Noah D. Zats "Sex Work/Sex Act: Law, Labor, and Desire in Construction of Prostitution." Ibid.
53. 宮台真司『世紀末の作法』（リクルート ダ・ヴィンチ、1997）。
54. Dany Lacombe, *Blue Politics*. Ibid.
55. 兼松左知子『閉じられた履歴書』（朝日新聞社、1990）。
56. Deborah Cameron and Elizabeth Frazer, "On the Question of Pornography and Sexual Violence: Moving Beyond Cause and Effect," from *Pornography*, ed. Catharine Itzen (Oxford University Press, 1992). Reproduced in *feminism and sexuality*, edited by Stevi Jackson and Sue Scott, Ibid.
57. イブリナ・ジオッペ「売買春をめぐる性的自由主義者の嘘を暴く」『買春に対する男性意識調査』注15と同じ。
58. タン・ダム・トゥルン『売春－性労働の社会構造と国際経済』田中紀子・山下明子訳（明石書店、1993） pp. 91-99. Thanh-Dam Truong, *Sex, Money and Morality: Prostitution and Tourism in Southeast Asia* (Zed Books, Ltd., 1990).
59. シモーヌ・ド・ボーヴォワール『第二の性I』注45と同じ。
60. Susan Sontag, "The Third World of Women," *Partisan Review* 40 (1973). Cited by C. MacKinnon, *Toward a Feminist Theory of the*

*State*, *ibid.*, p. 118.

61. ジョーン・スコット『ジェンダーと歴史』荻野美穂訳（平凡社、1994）Joan Wallach Scott, *Gender and the Politics of History* (New York: Columbia University Press, 1988).
62. Audre Lorde, *Sister Outsider* (Trumansburg, New York: The Crossing Press, 1984).

## アフリカ女性文学研究の発展と文献紹介

大池 真知子

### 目 次

#### はじめに

#### I. アフリカ女性文学研究の発展

##### A. アフリカ女性文学研究史

1. 男性作家が表象した女
2. 男性中心の文学史のなかの女性作家
3. 女性文学研究の歴史

##### 注

##### B. 女性作家紹介

1. Ama Ata Aidoo
2. Zaynab Alkali
3. Mariama Ba
4. Tsitsi Dangarembga
5. Assia Djebar
6. Buchi Emecheta
7. Bessie Head
8. Flora Nwapa
9. Grace Ogot

#### II. 文献紹介

##### A. 本稿作成にあたり参考にした文献の目録

##### B. 女性文学研究に関する文献目録

##### C. 女性作家の作品および研究論文目録

1. Ama Ata Aidoo
2. Zaynab Alkali
3. Mariama Ba
4. Tsitsi Dangarembga
5. Assia Djebar
6. Buchi Emecheta
7. Bessie Head
8. Flora Nwapa
9. Grace Ogot

### はじめに

本稿は、アフリカ女性文学研究史をたどり、その基本文献を紹介するものである。全体は大きく2部に分けてある。第I部の前半で、アフリカ女性文学研究史をたどったあと（以上I-A）、後半で、主要なアフリカ女性作家を9人選び、それぞれの作家の伝記、主要作品、研究動向を紹介する（以上I-B）。第II部は文献目録となっている。まず、本稿を作成するにあたって参考にした文献、データベースなどを表示する（以上II-A）。つぎに、第I部の前半で触れた文献を含む、アフリカ女性文学研究における主要な文献を提示する（以上II-B）。つづいて、第I部の後半で触れた9人の作家に関する文献を提示する。ここでは、最初に作家自身による文学作品、エッセイ、インタビューなど、つぎに作家についての研究論文、という順に文献を提示する（以上II-C）。

本稿が対象とする範囲について一言述べておく必要があるだろう。まず全体をつうじて、白人作家は除外している。とくに南アフリカ文学を考えるうえで、白人作家の作品も、文学を形成する重要な要素の一つであることは明かだ。しかし本稿では、アフリカ人で、有色人種で、女である作家たちの文学を紹介することに、大きな意義があると考えたため、対象を白人作家以外にしぼった。

また批評家には当然、アフリカ人だけでなく他地域出身者も、非白人だけでなく白人も、女だけでなく男も含

まれる。まず性別についてだが、本文で述べるように、初期の1960年代および1970年代には男性批評家が中心となっていたが、1980年代になると、女性批評家が多く活躍するようになる。本稿では、特別に男であることを明記しない場合、原則的に女性批評家である。

つぎに批評家の出身地、人種については、批評書による著者紹介ではほとんどの場合明らかにされていない。よってはっきりしたことは言えないが、印象としては黒人批評家が多いように思われる。だがときには、南アフリカの白人批評家なども見られる。本文で述べるように、「アフリカ」の「女」としてのアイデンティティをめぐる問題は、アフリカ女性文学が学問分野として成立する際、もっとも根源的な問いとして生じ、さらに1990年代、ポストコロニアリズムの理論と連動することで、高度に政治的な問題として発展した。したがって、かつての無自覚的なオリエンタリズムはもはや許容されない。たとえば、1995年にナイジェリアのBuchi Emecheta(ブチ・エメチェタ)についての批評書を出したKatherine Fishburn(キャサリン・フィッシュバーン)のような「(白人で、中産階級出身で、フェミニストで)西洋人の」(Fishburn xi)批評家の場合、みずから抱く異文化の視点を意識し、主流のフェミニストがアフリカの女によるテキストを読む場合に生じる権力の磁場について論じることになる。これは私見であるが、同じ黒人だがアメリカ人であるAlice Walker(アリス・ウォーカー)によって注目を集めた女性性器切除(いわゆる女子割礼)の問題も、アフリカの「伝統」文化に対する野蛮なイメージを結果的に増幅させたとして、アフリカの女たちの反発を招き、アフリカの「伝統」にもとづくアイデンティティを意識するひとつのきっかけとなったのではないかと。もっとも、概して旧植民地出身の知識人は、一生のうちかなりの移住を繰り返すため、出身地だけでアイデンティティを特定すること自体に無理がある。たとえば、もっとも初期の女性批評家の一人でもある作家のMaryse Condé(マリーズ・コンデ)は、カリブで生まれ、アフリカに移住し、その後ヨーロッパに渡り、現在はアメリカに住みながらひんぱんにカリブを訪ねている。本稿では、批評家の所属大学というレベルでしかないが、できるかぎり出身を明記するよう努めた。

以上の問題は、「アフリカ文学」と言ったときの「アフリカ」の定義の曖昧さ、そしてそこに含まれる政治の問題を鋭く反映している。いったいだれが「アフリカ」文学の担い手なのか、という問題は、いまでも確定していない。アフリカ出身者である必要があるのか？アフリカ出身でありさえすればいいのか？亡命のアフリカ文学者は？アフリカを舞台にした作品を書く欧米の白人作家は？アフリカを論じる日本人の文学者は？さらには、北アフリカはアフリカに含めるべきか、それともアラブとして除外すべきか？そしてこれらの問題に、「アフリカ」の「伝統」に対してアンビバレントな位置を占める「女」という座標が加わったとき、問題はいっそう複雑になるのである。

もうひとつの、だが同様に重要な問題として、アフリカ文学で使用される言語をめぐる議論がある。この議論については、本文中で参考文献を挙げるとして、とりあえずここでは、本稿が対象とした言語の範囲を明らかにする必要があるだろう。まず、I-Aの女性文学研究史は、筆者の知識の限界もあり、対象を英語圏のアフリカにはほぼ限っている。もっとも、アメリカの黒人女性研究とのつながりという点でも、英文学で始まったポストコロニアリズム研究とのつながりという点でも、アフリカ女性文学研究の中心は英語圏の作家にあることを書き添えておく<sup>1</sup>。

I-BおよびII-Cで取り上げる9人の作家には、フランス語圏の作家も2人含まれている。北アフリカはフランス語が支配的であり、地域的なバランスをとるためにそこから1人選んだのと、西アフリカのフランス語圏のイスラム地域は、女性文学のひとつの中心をなしており、そこからもう1人選んだためである。なお研究論文については、英語で書かれたもののみを対象とした。もちろん文学作品についてはその限りではないが、エッセイやインタビューなどは英語のもののみとした。地域別の内訳は、北アフリカから1人、南部アフリカから2人、東アフリカから1人、西アフリカから5人となっている。地域的なかたよりは、注目されている女性作家の数をそのまま反映している。南アフリカ共和国からは、アパルトヘイト以降の作家も選びたかったが、他の作家と比べるとどうしても軽量級の感があり、今回は選ばなかった。

また、これは純粋に本稿の枚数制限から生じる限定であるが、II-Cで提示した個々の作家についての文献目録が対象とした年代についても、一言触れておく。1985年に、Brenda Berrian（ブレンダ・ベリアン）によるかなり網羅的な文献目録が出版された。それが1984年までを対象としているので、本稿の目録では、研究論文は1985年以降のものを対象とした。作家自身が書いた作品についてはもちろんこの限りではない。なお Bessie Head（ベッシー・ヘッド）については、研究論文が大量にあり、またヘッド単独の文献目録も何点か出版されているので、本稿では1990年以降のものに限った。

文献目録に関して、その他、書き方のうえでの留意点がいくつかある。第一に、I-Aの女性文学研究史で言及はしたが、女性文学研究には直接的にはかかわらない文献については、そのつどI-A末尾の注で文献情報の詳細を紹介している。第二に、II-Cで挙げた個々の作家についての研究論文で、相互参照しているものがいくつかある。それらを含むもとの論文集は、原則的に、II-Bで挙げた女性文学研究全体の文献目録に完全な細目が記してある。そうでない場合は、もとの論文集の細目を、その作家の研究論文目録の筆頭に挙げてある。第三に、II-Cにおいて、短編集に含まれる短編、エッセイ集に含まれるエッセイ、論文集に含まれる研究論文などの初出は、原則的に単独の項目としては挙げていない。第四に、II-Cで文献を挙げた順序であるが、作家自身による作品は年代順、作家についての研究論文は筆者のアルファベット順にしてある。最後に、文献目録はMLA第四版のスタイルシートに従って作成している。

## I. アフリカ女性文学研究の発展

### A. アフリカ女性文学研究史

#### 1. 男性作家が表象した女

本項の目的は、アフリカ女性文学研究史をたどることにあるが、アフリカ文学自体がまだあまり知られていない分野であるため、本格的に女性文学研究が始まる1970年代以前の、おおよその文学の状況と文学研究の動向を知っておく必要がまずあるだろう。したがって以下では、男性作家がいかに女を表象してきたか、そして男性作家中心の文学研究において、女性作家がいかに等閑視されてきたか、について簡単に触れることから議論を始めたい。

アフリカ文学最初の意識的な文学運動は、1930年代、フランス語圏アフリカおよびカリブ出身の詩人を中心に、パリで始まった。この運動は、「黒」を意味する「ネグリチュード」と呼ばれ、その名が示すとおり、黒人の文化的アイデンティティを高らかに謳いあげるものであった。「白」が象徴する論理や理性に対し、「黒」は、直感や情熱を象徴するとされ、シュールレアリズムの運動とも連動して、新たな世界観を打ち出したのである。だが、この主張が内包する本質主義は、当然批判の対象となり、とくに第二次世界大戦後の20年の間、アフリカ文学界の議論の中心となった<sup>2</sup>。そしてこの議論——すなわち、アフリカ人の文化的アイデンティティはいかにあるべきか、そして文学はそれをいかに表現することが可能か、という議論——をとおして、アフリカ文学が学問領域として発達していった。さまざまな批判はあるとしても、当時、「黒」は否定的なもののすべての象徴であり、それをあえて肯定するのは、きわめてラディカルな主張だったことは確かである。

さて、われわれの関心は、この運動において女がいかなる位置を占めていたかということであろう。その答えをもっとも端的に示す例として、ネグリチュード運動の創始者であり旗手であったセネガルの Léopold Sédar Senghor（レオポルド・セダール・サンゴール）の詩を挙げよう。

裸の女、黒い女

おまえの身をつつむその色は生命、その形は美だ！

わたしはおまえの影に育った かつてその双つの 掌のぬくもりが わたしの臉の上にあった

そしていま 真昼の正午に 黒く灼かれた 高い峠の上から わたしはおまえ、約束の大地を見出す  
するとおまえの美しさが わたしの心の中核を 空を切る鷺の一閃のようにとらえる。

裸の女、闇の女

硬い果肉の熟れた果実、黒い酒の暗い恍惚、わたしの口をリリカルにするその口

純粹なる地平線のサヴァンナ、東風の熱い愛撫にふるえるサヴァンナ

彫刻されたタムタム、勝利者の指の下でとどろく緊張したタムタム

おまえのコントラルトの荘重な声は愛された女の魂のうただ。(32-3)<sup>3</sup>

上の引用から明らかなように、この詩では、詩人を育ててくれる暖かな母親としての女と、詩人の性的対象としてのエロティックな女が、切れ目なくアフリカの大地や文化の源として比喩化されている。だがこの問題ある女性表象は、前段で述べた議論ではまったく問題とはされなかった。そこでは、民族的、人種的な差異を文化的な差異とすることの是非は問われても、その差異を表象するのに、女がいかに比喩化されているかが批判的に問われることはなかったのだ。

1960年代になってアフリカ諸国が独立を果たすようになると、抽象的に「黒」を謳うネグリチュード運動は下火となり、代わってアフリカ文学の中心となったのが、個々の独立国家が直面する諸問題を現実的に描く小説であった。この新しい文学の流れを作り、長年にわたってその中心であり続けているのが、ナイジェリアの Chinua Achebe (チヌア・アチェベ) である。アチェベは、社会に生きる一個人の内面に焦点を当て、前植民地時代のアフリカ社会が、ヨーロッパの侵略によって崩壊するさまを描き、植民地時代の社会の権力関係を描き、そして欺瞞に満ちた独立を、独立後の社会の混乱を、描いてきた。以上の説明から明らかなように、抽象的な民族の主張から始まったアフリカ文学は、植民を契機とした国家の歴史と、それに翻弄される個人の物語を語るようになっていったのである。

では、国家と(男性)個人の歴史物語において、女はいかなる役割を果たすのだろうか<sup>4</sup>。アフリカ文学にとって記念碑的な作品となったアチェベの処女作、*Things Fall Apart* (1958) を例にとって考えてみよう。以下の引用は、アフリカの伝統社会がいかに高い敬意を母親に対して抱いているかを示すものとして、しばしば引かれる箇所である。

なるほど子供は父親のものだ。しかし父親が子供をぶつと、子供は母親の小屋に慰めを求める。人は、ものごとがうまくいって人生が心地よいときには、父親の土地に属する。しかしつらく悲しいときには、母親の土地に庇護を求める。母親はそこにいて守ってくれる。母親の骨はそこに眠っている。だからこそわれわれは言うのだ。母は偉大だと。(94)<sup>5</sup>

たしかに母が社会において重要な位置を占めているのは、引用から明白だ。だがこれは、主人公が罪を犯して母方の村に追放になり、母方の長老が主人公を慰めるときの言葉である。つまり母は、歴史の晴れ舞台から外れた周縁に存在する。その証拠に、主人公は、追放中に生まれた娘に「母方の親戚に敬意を表して」(115)「母は偉大だ」という意味の名をつけるが、息子には「荒野で授かったもの」という意味の名をつける。かくして女は、偉大な母として象徴化されることにより、歴史の現場から実は荒野に追いやられ、歴史を生きる(男性)主人公を周縁で支える装置として機能することになる。

以上のサンゴールとアチェベの例から明らかなように、男性作家は、民族、国家を担う男性主体を支える他者として女を比喩化してきた。社会の一員として生き、歴史を語る主体として女が描かれるようになるには、女性作家の登場を待たねばならなかったのである。だが、女の立場から女を描く女性作家が1960年代に登場しても、ジェンダーの視点が欠落した当時のアフリカ文学研究では、正当に評価されたとは言いがたい。次項では、初期の文学批評における女性作家の位置について述べたい。

## 2. 男性中心の文学史のなかの女性作家

「ネグリチュード」はまったく男中心の運動であったが、アチェベと同時代の独立期以降の作家——すなわち植民地時代に教育を受け、独立期前後に作品を発表し始めた作家——のなかには、少数だが女性作家はいた<sup>6</sup>。だが彼女らは、民族と国家中心の文学史のなかでは等閑視されてきた。

とくに初期のアフリカ文学研究は男性批評家が多く、女性作家を正當に評価しなかった。現在でも定評のあるイギリスのハイネマン社のアフリカ作家シリーズは、1960年にアチェベの処女作を第一号として始まり、その後次々と良質の作品を刊行した。よって1960年代後半から1970年代にかけて、代表的な作家を何人か選んで論評し、アフリカ文学の紹介をするといった性格の研究書がいくつか出版される。たとえば、イギリスの男性批評家 Gerald Moore (ジェラルド・ムーア) による *Seven African Writers* (1962) およびその改訂版 *Twelve African Writers* (1980)、アフリカの Eustace Palmer (ユースタス・パーマー) による *An Introduction to the African Novel* (1972) や *The Growth of the African Novel* (1979)、カリブの Oscar Dathorne (オスカー・ダソーネ) による *African Literature in the Twentieth Century* (1974年初版、1976年改訂縮小版) などである<sup>7</sup>。ところがこれらの研究書は、まったく女性作家を扱っていないか、さもなければごく表面的にしか女性作家に触れていない。

具体的に見るため、まがりなりにも女性作家に触れてはいるダソーネのものを紹介しておこう。まず、最初に国際的な評価を受けた女性作家であるナイジェリアの Flora Nwapa (フローラ・ンワパ) について、ダソーネはこう断じる。「ンワパのスタイルは、想像力に欠け無味乾燥だ。その結果、読者はけっしてエフル(ンワパによる同名の処女作のヒロイン)にもエフルの問題にもかかわることはない。さらに、毎日の家庭の雑事を詳細に記述することで、エフルの神秘的な存在の効果は台無しになっている」(116)。この評価は、アフリカ文学に限らずよくある、女性作家に対する低い評価の典型的な例だといえる。だが実は、あえてヒロインのこまごまとした日常生活を描くことで、ヒロインを脱神話化し、現実社会に生きる存在として女を創造するというのは、女性作家の戦略なのだ。また、ダソーネが名前を挙げている数少ない女性作家のなかで、部分的にはあるが唯一肯定的に評価されているのが、ケニアの Grace Ogot (グレイス・オゴト) である。オゴトに対する評価を引用する。「全体として、グレイス・オゴトの作品は、アフリカの女にかかわっている。*In the Promised Land* において、ニヤボル(ヒロイン)は、愛情深い妻として美しく描かれ、作品の唯一の救いとなっている。夫婦の問題が夫でなく自分のせいで起きるのだと迷わず考え、彼女は村を去る。なぜなら彼女は、それが妻としての義務だと考えるからだ。短編でも、グレイス・オゴトの女たちは、強い義務感を持っている。部族の家族に対して族長の娘が抱く義務感、厳格な道徳観に対してエリザベスが抱く義務感など」(131)。この賛辞を、この男性批評家にとって望ましい女性像のみが評価されていることの現われだと考えるのは、あながち無理なことではない。さらに不可解なのは、南アフリカの「カラード」の女性作家、ベッシー・ヘッドの扱われ方である。彼女は本文中でまったく言及されていない。にもかかわらず、表紙には彼女の写真が載っている。表紙のデザイナーは、著名なヘッドが当然言及されていると考えたのだろうが、この不一致について何の処置もとらないというのも、なんとも女性作家をバカにした態度ではなからうか。

もうひとつ、アフリカ文学研究で女性作家が低くしか評価されないことを示す例を挙げよう。先に述べたハイネマンのシリーズは、シリーズ刊行以来6年たって初めて女性作家の作品を選んだ。その間実に25冊の男性作家による作品が刊行されている。2冊目はその4年後、つまり1970年、さらに29冊の男性作家の作品を挟んで刊行されている<sup>8</sup>。

上の例から明らかなように、男性批評家を中心となっていた初期のアフリカ文学研究では、女性作家は周縁に置かれていた。女性作家が書いた作品をジェンダーの視点から正當に評価し、女性文学なるものがジャンルとして確立するのは、次の項で述べるように、70年代の女性運動を経て80年代になってからなのである。

次の項でいよいよ、アフリカ女性文学研究が独立した学問領域としていかに発達していったかを追っていく

が、その前に、90年代現在のアフリカ文学研究全体のなかで、女性作家が占める位置について述べておこう。アフリカ文学史の今のところは決定版と考えていいものが、1993年に出された *A History of Twentieth-Century African Literatures* である<sup>9</sup>。そこでは1～5章を英語圏アフリカ文学、6～8章をフランス語圏アフリカ文学、9章をポルトガル語圏アフリカ文学、10章をアフリカ諸語の文学、11章をアフリカ女性作家、12章を言語の問題、13章をアフリカにおける出版、にそれぞれ当てている。この章だてから明らかなように、女性文学というのは、文学史の主流に組み入れることは難しいが、言語、出版に並ぶ、論じるべき問題のひとつとしてとらえられているのである。触れないわけにはいかないが、本流からは外れた作家たち——このような誇らしいゲッターが、女性作家が今日置かれている位置だといえる。

### 3. 女性文学研究の歴史

#### a. 1970年代——女性文学研究のあけぼの

1970年代の世界的な女性運動に影響を受け、アフリカ文学におけるジェンダー研究は、70年代初期、おもに男性作家がいかに女を表象しているかについての研究から始まる。当時の批評家はほとんどが男性であった。Wilfred Cartey (ウィルフレッド・カーティ) は *Whispers from a Continent* (1969) において、ネグリチュードの詩で、母がアフリカの象徴として神話化されている構造を分析するが、それを批判的に論じるというよりは、ひとつの語りの方策として肯定している。また、作品中の女の登場人物について論じたものは、ナイロビ大学の G. C. M. Mutiso (ムティソ) の “Women in African Literature” (1971) に始まる。エディンバラ大学の Kenneth Little (ケネス・リトル) は *The Sociology of Urban Women's Image in African Literature* (1980) において、さまざまな文学作品における女の登場人物を、6つのカテゴリー——恋人と愛人、妻、「自由」な女、母、高級娼婦と売春婦、政治活動家と労働者——に分類した。これらの分類項目から明らかなように、ここで女は、主として男との関係における客体としてとらえられている。しかしなによりも、リトルの限界はその断片性にある。彼は雑多な文学作品から女性の登場人物を選び出して解説するだけで、彼女らが各作品のエコノミーのなかでどう作用しているかについては分析しない。この文学分析としての限界ゆえに、タイトルが「社会学」となっているであろう。

だが70年代には、女性作家を女性批評家がジェンダーの視点から論じる論文が、散発的ではあるが発表される。例えば Yinka Shoga (インガ・ショガ) の “Women Writers and African Literature” (1973) や、アメリカの批評家 Roseann P. Bell (ロゼアン・P・ベル) の “The Absence of the African Woman Writer” (1978) である。なかでもカリブ出身の女性作家 Maryse Condé (マリーズ・コンデ、「はじめに」を参照) は、“Three Female Writers in Modern African Fiction: Flora Nwapa, Ama Ata Aidoo and Grace Ogot” (1972) において、3人のアフリカ女性作家を、フェミニズムの理論を文学で実践する者にとらえ、評価している。作品がコンデ自身の理論に合致しないことを嘆くなど、作品の正当な評価よりもイデオロギーが先走っている感はあるが、当時これを発表したことは、ジェンダー批評にとっては大きな前進であった。また、ともにアメリカで研究活動を行うベルら編集の *Sturdy Black Bridges: Visions of Black Women in Literature* (1979) は、アフリカだけでなく、カリブやアフリカ系アメリカの文学も対象としているが、アフリカ女性文学研究に関係する論文を4篇含んでいる<sup>10</sup>。

#### b. 1980年代——女性文学研究の発展：女性作家の開花と理論化の試み

1980年代になると、作品を発表する女性作家の数も次第に増えていく。その結果、1983年、先に述べたハイネマンのシリーズから初の女性作家の作品集が、当時アイオワ大学でアフリカ女性文学研究の中心となっていた Charlotte H. Bruner (シャーロット・H・ブルナー) 編集により刊行される。北アフリカを含むアフリカ全土から、24人の作家が選ばれており、植民地時代に作品を書いた黒人女性作家による先駆的な作品も収録されてい

る。もっとも、ハイネマンのシリーズが始まって以来21年が経過し、256冊目にしてやっと刊行されたという感否めない。また85年には、ピッツバーグ大学のBrenda Berrian (ブレンダ・ベリアン)の手によって、300ページ近い女性作家の文献目録が出版される。ベリアンは、さらに88年にも、26ページの簡単なものではあるが文献目録を発表し、主要な作家についてはフォローアップをしている。以上のことから、80年代には、女性作家が多く輩出し、女性文学がひとつの学問領域として成立する準備ができたのだともいえる。

80年代には、批評もまた飛躍的な発展を遂げる。まず、女性作家のみを扱った単独の批評書、*Women Writers in Black Africa* (1981) が、南カリフォルニア大学の男性批評家Lloyd Brown (ロイド・ブラウン)によって書かれる。ブラウンは男性ながら、「主要なサハラ以南のアフリカ女性作家のキャノンを確立した」(Cobham 138)として高い評価を得ている。ブラウンは、単なる紹介にとどまらず、序でアフリカ文学研究史をジェンダーの側面から概説し、第2章で、それまであまり知られることのなかったごく初期の女性作家から女性文学史をたどる。そして3章から7章にかけて、5人の代表的な女性作家を各々論じている。この批評書は、90年代も後半になった今でも言及されることがしばしばあり、時代的な制約を超えた洞察力に満ちているといえる。これと同じ傾向の、単独の男性批評家が何人かの主要な女性作家を選んで作品分析をするものとして、ナイジェリアのラゴス大学のOladele Taiwo (オラデレ・タイウオ)による*Female Novelists in Modern Africa* (1984)がある。しかしその分析に対して、女性批評家や女性作家たちからは、「偏っている」(Davies, "Introduction" 5)、「表面的」(Davies & Fido 339)、「陳腐で不正確」(Stratton, *Contemporary* 4)という評や、女性作家を「あたかも自分がめとった多くの妻たちであるかのように、気まぐれにほめてやっている」(Aidoo 166)という評が多く、評判が悪い。

さらに86年には、二人の女性批評家、フロリダ国際大学のCarole Boyce Davies (キャロル・ボイス・デイヴィーズ、当時ニューヨーク州立大学)とコーネル大学のAnne Adams Graves (アン・アダムス・グレイヴス)編集で、女性文学評論集、*Ngambika: Studies of Women in African Literature* が出版される。両批評家ともに、アフリカの大学で学んだり教えたりした経験があり、後述するように、とくにデイヴィーズの90年代になってからの活躍はめざましい。序を含む19本の論文のうち、16本が女性研究者によるものであり、女性作家だけでなく女性研究者も次第に活躍するようになってきたことを示すものとして興味深い。もっとも女性研究者が単独で一冊の研究書を出すには、時期尚早であった。デイヴィーズとニューヨークの社会研究所のElaine Savory Fido (エレヌ・サヴォリー・フィド、ガーナ、ナイジェリア、カリブの各大学で教鞭をとった経験がある)が指摘するように、女性研究者はまとまった時間がとりにくい傾向にあるからだろう (340)。

*Ngambika*の最大の功績は、デイヴィーズの序にある。彼女はそれまでの女性文学研究を詳細にたどり、アフリカ女性文学研究史を跡づけただけでなく、アフリカ・フェミニズムの基本となる枠組みを定義したのである。

これらの批評家 [アフリカ女性文学批評家] の視点には、二つの影響が見られ、したがってある種の緊張が見られる。一方で、アフリカの人々を新植民地主義ならびにその他の人種的、階級的な抑圧から解放しなければならないということ、さらに、伝統的なアフリカ文化が持つ特長を尊重しようということが基本にある。また他方で、国際的な女性運動の影響があり、アフリカ社会における女の位置を検証するにはフェミニストの意識が必要であると認識されてもいる。このように、両方に忠実であるために生じる緊張が結び目となって、この批評 [デイヴィーズらが実践する批評] が生まれてくるのである。(“Introduction” 1)

上の引用は、「アフリカ」の「女」の自己定義に必然的に含まれる二重の決定項——「人種/民族」と「ジェンダー/セクシュアリティ」——を、アフリカ・フェミニズムを定義するコードとして、明確に打ち出している。この二重の枠づけは、アフリカ女性文学研究のみならず、広くアフリカ女性研究、さらには第三世界の女性研究において、このあと90年代に至るまで議論の中心となるものであり、デイヴィーズがこの時期にこの点を文学研

究の面から指摘したことは、重要である。デイヴィーズは、明らかに Elaine Showalter (エレイン・ショウウォーター) に倣って、評論集全体を、①男性作家による女性像の再検討、②女性作家による自己定義の分析、③女性にかかわる社会的、政治的テーマの考察——の3部に分けており、このことから、彼女が主流のフェミニズムを強く意識したうえで、アフリカのフェミニズムを確立しようとしている意気込みが伝わってくる<sup>11</sup>。

デイヴィーズの論文とほぼ同時期に、デイヴィーズと似たような趣旨の、やはり大きな影響を及ぼした論文が、雑誌 *Signs* に発表される。ナイジェリアのイバダン大学でナイジェリアの女性研究の中心となっている Chikwenye O. Ogunyemi (チクウェニエ・O・オグニエミ) による “Womanism: The Dynamics of the Contemporary Black Female Novel in English” (1985) である。オグニエミはこの論文において、アフリカの女性文学を例に分析しながら、それまで白人中心だったフェミニズムを黒人の視点から再検討し、ウーマニズムという黒人独自のフェミニズム——すなわちジェンダー／セクシュアリティ以上に、人種／民族をより重要な決定項とするフェミニズム——を提唱する<sup>12</sup>。デイヴィーズとの違いは、デイヴィーズが二つの決定項を同等に見ているのに対し、オグニエミは、既存のフェミニズムに対するアフリカ側からの対抗もあって、人種／民族を優先させている点である。*Signs* はいうまでもなく、アメリカのフェミニズム研究の中心に位置する雑誌であり、アフリカの女を代表してそこに論文を発表するという政治的な意図が、強く働いていたに違いない。オグニエミの論文は、90年代になって本格化するアフリカ独自のフェミニズム理論を追究する動きのなかで、ウーマニズムという言葉とともに何度も言及されることになる。

次の項目に移る前にもう一点、デイヴィーズの序が明らかにした重要な点を指摘しておきたい。それは、女性文学を口承文学と結びつけることが必要だという論点である。伝統的な口承文学と、ヨーロッパ諸語で書かれた近代文学との関係は、以前からアフリカ文学が抱える大きな問題であったが、80年代になってその問題がきわめて政治的な面から論じられるようになった<sup>13</sup>。その議論の口火を切ったのが、ナイジェリアの男性批評家 Chinweizu (チンウェイズ) らのグループである。彼らは、本来のアフリカ文学は、アフリカ人によってアフリカの言葉でもって書かれなければならないと主張し、その挑戦的な民族主義は、多くの議論を巻き起こした。さらにケニアの男性作家 Ngugi Wa Thiong'o (グギ・ワ・ジオンゴ) は、*Decolonising the Mind: The Politics of Language in African Literature* (1986) において、マルクス主義的な視点から、言語の問題を階級、民族の問題と結びつけて論じた。だがこれらの活発な議論は、ジェンダーの視点から考察されることはなかった。この議論を背景に、デイヴィーズは、口承文学をジェンダーの視点から研究すること、そしてまた、口承文学の伝統をもとにして女性文学を研究することが必要だ、とするのである。残念ながら、デイヴィーズの指摘は指摘以上ではなく、論文集に収録された論文でも、この点に踏み込んで分析したものはない。だが、言語の問題、口承文学の問題が、ジェンダーの問題とも交差されつつ、批評理論的な視座から論じられるようになる90年代を先取りしていたという面で、デイヴィーズの指摘は注目に値するといえる。

ここまで女性文学およびその研究が盛んになるとさすがに、男中心のアフリカ文学界も女性文学を無視していることはできなくなり、80年代後半になって、アフリカ文学研究の主要な学術雑誌、*African Literature Today* と *Research in African Literatures* が、1987年と1988年にあいついで女性文学特集を組む。前者の編者の言葉を借りれば、「ここ10年ほどの間、アフリカ女性作家による完成度の高い作品がめざましい勢いで花開いており、それらを無視しつづける言い訳が立たなくなつて」(1) きたのである。さらに後者は、その序でアマースト大学の Rhonda Cobham (ロンダ・コブハム) が宣言するように、「きっちりとした理論に基づいた」(138) 特集を試みている。コブハムは、それまでのアフリカ女性文学研究を批判して言う。「アフリカ女性作家研究の多くは、ある作家を女性であると認めさえすれば、その作家の作品をアフリカ男性作家と別のカテゴリーに置くことができる、としていたように思われる。批評の方法、理論上の概念、形式と政治意識の問題を扱うに際して、ジェンダーが差異を形成するのに役立つファクターとなりうるものが、まったく意識されていなかった」(138)。これら二誌の序の言葉は、80年代のアフリカ女性文学の主要な動き——女性作家の活躍と女性文学研究を理論化

する試み——を、それぞれ端的に表しており、興味深い。

このように、80年代もとくに後半になると、ジェンダーが批評的な視点として注目されるようになってくる。だがこの時点では、単独の批評家がまとまった研究書を出すのではなく、さまざまな批評家による論文集、または多少寄せ集め的な雑誌の特集、という形で研究がなされているため、個々の論文が理論に立脚していても、全体を見通せるような女性文学理論として体系化されるまでには至ってはいない。それには90年代になるまで待たなければならなかった。

### c. 1990年代——女性文学研究の成熟：理論の体系化・精密化

80年代の女性文学の発展を受け、90年代の初頭には、中米ガイアナ大学の Adeola James (アデオラ・ジェイムズ) による女性作家のインタビュー集、*In Their Own Voices: African Women Writers Talk* (1990) と、ブラナー (Bruner) 編によるハイネマン・シリーズからの2冊目の女性作家の作品集 (1993) が出版される。この作品集は、1冊目の作品集から10年後に出されたことになり、1冊目が出されるまでにかかった年月と比べると、80年代から90年代にかけての女性作家の勢いがよくわかる。それを表すのが、第2作品集の前書きの言葉である。「アフリカ女性文学作品集、*Unwinding Threads* (1983) ……には、『今日、物語を執筆するアフリカの女は、いくらか珍しいと言わねばなるまい』と、前書きがされている。この命題は正しいが、現在、アフリカ女性作家は、もはや『荒野』から叫ぶ孤立した声ではない。彼女たちの声は、本国や外国の聴衆に届き、お互いの声を意識している。早くから出版し、今も書いている作家は、新しい作家の役割モデルとなっている」(Bruner, *Heinemann* vii)。この言葉から、90年代初期、女性文学が一つのジャンルとして確立し、その伝統が形成されつつあることが明らかである。

個々の作家の研究も進み、主要な作家に関しては、一人の研究者が単独の作家について論じる批評書や、単独の作家についてこれまで書かれた論文を集めた論文集も出版される。前者の例としては、ガーナ出身の男性批評家 Vincent O. Odamtten (ビンセント・O・オダムティン) による *The Art of Ama Ata Aidoo: Polylectics and Reading Against Neocolonialism* (1994)、ミシガン大学の白人女性批評家 Katherine Fishburn (キャサリン・フィッシュバーン、「はじめに」参照) による *Reading Buchi Emecheta: Cross-Cultural Conversations* (1995) などが挙げられる。後者の例としては、ナイジェリア出身の Marie Umeh (マリー・ウメー、現ニューヨーク市立大学。ナイジェリアのアナンブラ州立大学でも7年教えた) 編集の *Emerging Perspectives on Buchi Emecheta* (1996) および *Emerging Perspectives on Flora Nwapa: Critical and Theoretical Essays* (1998)、ニューヨーク州立大学の Ada Uzoamaka Azodo (アダ・ウゾアマカ・アゾド) と東カリフォルニア大学の Gay Wilentz (ゲイ・ウィレンツ) 編集の *Emerging Perspectives on Ama Ata Aidoo* (1998) が挙げられる。また、フローラ・ンワパ (Flora Nwapa) の死後、1995年に組まれた *Research in African Literatures* のンワパ特集も、後者の範疇に入るだろう。とくにベシー・ヘッド (Bessie Head) については、文献目録も含めて多くの研究書が出版されている<sup>14</sup>。

個々の作家研究の発展もさることながら、女性文学研究全体にとって記念碑的な研究書が、1994年に出版された。90年代に出るべくして出た研究書、ニューヨークのカソリック・ワーカーの Florence Stratton (フローレンス・ストラトン、シエラレオネのンジャラ大学で19年教えた) による *Contemporary African Literature and the Politics of Gender* である。ストラトンは、この重要な研究書において、アフリカ文学をジェンダーの視点から再検討することを求めている。序で、ポストコロニアリズム理論の文脈に位置づけながらアフリカ文学研究史をたどり、アフリカをはじめとするこれまでの第三世界の文学研究においては、ジェンダーの視点が欠落していることを証明する。さらに第1部で、男性作家による女性表象を分析する。これらは今まででも行われてきた批評だが、ストラトンほどラディカルに理論を交差させた研究はなかった。第2部では、主要な女性作家を一人一人取り上げて分析し、それをとおして女性文学の伝統を構築しようと試みる。これまでの研究では、個々の作家の分析で終わるのが大半で、そこから全体的な伝統を見通すまでにはいかなかった。女性文学の伝統の構築というの

は、ストラトンがすでに“The Shallow Grave: Archetypes of Female Experience in African Fiction”(1988) という論文で小規模ながら試みていたことである。第3部で、女性作家による異議申し立てに対して、男性作家がそれぞれの作品中でどう応えたかを分析する。これによって、ジェンダーは、アフリカ文学を創造しかつまた研究する者にとって、文学史全体の書き直しを迫るほどの重要なコードであることが明らかにされた。一言で言えば、ストラトンの研究書は、アフリカ文学研究をジェンダーの視点から再理論化したのである。

ストラトンだけでなく、90年代のアフリカ女性文学研究全体が、アフリカ女性文学理論を構築することに力を注ぐようになる。それらは一様に、フェミニズムとポストコロニアリズムの理論を交差させ、ジェンダー／セクシュアリティと人種／民族が、アフリカ女性文学を形成する重要な批評コードであるとしている。ナイジェリアの女性作家 Phaniel Akubueze Egejuru (ファニユエル・アクブエゼ・エゲジュル) とカリフォルニア大学の Ketu H. Katrak (ケチュ・H・カトラク) 編による *Nwanyibu: Womanbeing and African Literature* (1997)、Juliana Makuchi Nfah-Abbenyi (ジュリアナ・マクチ・ンファ＝アベニ) による *Gender in African Women's Writing: Identity, Sexuality, and Difference* (1997)、Roopali Sircar (ルーパリ・サーカー) による *The Twice Colonised: Women in African Literature* (1995) はすべて、上の二重のコードによりアフリカ文学を論じている。

ストラトンのように鳥瞰図的な意図をもった研究が現れる一方で、アフリカ女性文学研究のなかで細分化が進んだのも1990年代の特徴である。例えば *Research in African Literatures* は、1994年に、口承文学としての女性文学を特集し、また1997年の自伝の特集は、その多くを女性作家の研究に当てている。一方、インディアナ大学の Obioma Nnaemeka (オビオマ・ンナエメカ) 編の *The Politics of (M)othering: Womanhood, Identity, and Resistance in African Literature* は、そのタイトルから明らかなように、母性の分析に力点を置いた研究である。

また、地理的な細分化も行われ、国別、地域別の女性作家論も登場する。西アフリカに関しては、Aduke Adebayo (アドウケ・アデバヨ) 編の *Feminism and Black Women's Creative Writing: Theory, Practice, and Criticism* (1996) や、スコットランドのスターリング大学の Stephanie Newell (ステファニー・ネウエル) 編による *Writing African Women: Gender, Popular Culture and Literature in West Africa* (1997) などがある。とくに文学活動が盛んなナイジェリアのみを論じたものとしては、ナイジェリアのポート・ハーコート大学の Henrietta C. Otokunfor (ヘンリエッタ・C・オトクネフォー) と同大の Obiageli C. Nwodo (オビアゲリ・C・ンウォド) 編による *Nigerian Female Writers: A Critical Perspective* (1989) や、ナイジェリアのイバダン大学の オグニェミ (Ogunyemi) による *Africa Wo/Man Palava: Nigerian Novel by Women* (1996) などが挙げられよう。ポート・ハーコート大学の Helen Chukwuma (ヘレン・チュクウマ) 編による *Feminism in African Literature: Essays on Criticism* (1994) および Gloria Chineze Chukukere (グロリア・チネゼ・チュクケレ) による *Gender Voices and Choices: Redefining Women in Contemporary African Fiction* (1995) は、主としてナイジェリアを論じながら、他のアフリカ文学にも言及している。また、ナイジェリア女性作家の作品集としては、数人の有名な女性作家の陰に隠れて、これまで注目されてこなかった女性作家の作品を集めた *Breaking the Silence: An Anthology of Short Stories By the Women Writers of Nigeria* (1996) が、ともに作家である Toyin Adewale (トイン・アデワレ) と Omowunmi Segun (オモウンミ・セグン) 編により出版されている。南アフリカに関しては数多くの作品集が出ている。初期のもっとも有名な Susan Brown (スーザン・ブラウン) 他編の *Lip from Southern African Women* (1983) をはじめとして、南アフリカの詩人であり活動家でもある Lindiwe Mabuza (リンディウエ・マブザ) 編の *One Never Knows: An Anthology of Black South African Women Writers in Exile* (1989) や、英語だけでなくアフリカンス語とズール語のものを含む、Cherry Clayton (チェリー・クレイトン) 編の *Women and Writing in South Africa: A Critical Anthology* (1989) がある。研究書では Maureen N. Eke (モーリーン・N・エケ) による *From the Heart: Women and Liberation in New Writings by Black South African Women* (1993) や、M. J. Daymond (M・J・デイモンド) 編集の *South African Feminisms: Writing, Theory, and Criticism, 1990-1994* (1996) などが出ている。東アフリカに関する最近のものは、筆者が探した限りでは見つけることができなかった。北アフリカはフランス語が支配的

であるため、本稿の対象から外れるが、筆者の限りある知識の範囲内で挙げるとすれば、カリフォルニア大学の Winifred Woodhull (ウイニフレッド・ウッドフル) による *Transfigurations of the Maghreb: Feminism, Decolonization, and Literatures in French* (1993) などがある。

また1990年代、上述のローカル化と同時に、他方では通文化的な研究傾向も顕著になる。この動きは、文化人類学など社会科学の分野では1980年代にすでに始まっており<sup>15</sup>、文学研究でもオランダの Mineke Schipper (ミネケ・スキッパー) 編集の *Unheard Words: Women and Literature in Africa, the Arab World, Asia, the Caribbean, and Latin America* (1984) などが出版されていたが、とくに90年代になって、多くの作品集や研究書があいついで出版される。代表的な作品集としては、ガーナ出身で在イギリスのジャーナリスト Margaret Busby (マーガレット・バスビー) 編集による350ページに及ぶ *Daughters of Africa: An International Anthology of Works and Writings by Women of African Descent from the Ancient Egyptian to the Present* (1992) がまず挙げられよう。さらに、デイヴィーズとナイジェリアの Molaria Ogundipe-Leslie (モララ・オグンディペ=レズリー、後述) 編集の *Moving Beyond Boundaries, vol. 1: International Dimensions of Black Women's Writing* (1995) は、エッセイ、短編小説、詩を含む。評論としては、コモンウェルスを扱った、ホマートン大学をはじめイギリスの諸機関で活躍しているインド系の Susheila Nasta (スシェイラ・ナスタ) 編による *Motherlands: Black Women's Writing from Africa, the Caribbean and South Asia* (1991) や、Cynthia Vanden Driesen (シンシア・バンデン・ドライセン) による *Centering the Margins: Perspectives on Literature in English from India, Africa, Australia* (1995) の他、西アフリカとアメリカ合衆国の女性文学を比較した東カリフォルニア大学の Gay Wilentz (ゲイ・ウィレンツ) による *Binding Cultures: Black Women Writers in Africa and the Diaspora* (1992) や、ノース・カロライナ州立大学の Karla F. C. Hollway (カルラ・F・C・ホルウェイ) による *Moorings and Metaphors: Figures of Culture and Gender in Black Women's Literature* (1992)、さらにカリブとイギリスの視点も加えた、ケンブリッジのアンゲリア・ポリテクニクの Gina Wisker (ジーナ・ウイスキー) 編による *Black Women's Writing* (1993) や、デイヴィーズによる *Black Women, Writing and Identity: Migrations of the Subject* (1994) などがある。また、デイヴィーズ編の *Moving Beyond Boundaries, vol. 2: Black Women's Diasporas* (1995) は、アフリカ、ラテンアメリカ、カリブ、ヨーロッパ、アメリカ合衆国の黒人の女性作家を対象にしたインタビューと論文を含み、ノース・カロライナのウエイク・フォレスト大学の Mary K. DeShazer (マリー・K・デシャザー) による *A Poetics of Resistance: Women Writing in El Salvador, South Africa, and the United States* (1994) は、タイトルに挙げられている3カ国における抵抗、革命の詩についての評論である。

上のような黒人間の通文化的な研究の流れを受け、アフリカ系アメリカ人の女が主流だった黒人フェミニズムに大陸アフリカの視点を加え、主流のフェミニズムに潜む白人女性中心主義に対してよりダイナミックな異議申し立てをしていこうという動きが、社会科学、人文科学などの分野横断的に出てくる。ここでとくに強調されたのは、アフリカの母親たちが昔からそれぞれの社会の中で育み、今も形を変えて継承している、伝統的な女の自立の知恵である。ここでは、とくに文学の分野からの貢献を挙げておく。まず、*Re-Creating Ourselves: African Women and Critical Transformations* (1994) を著したオグンディペ=レズリー (Ogundipe-Leslie) は、詩人であり、文学批評家であり、活動家であり、ナイジェリアでの運動を通じて彼女が語るアフリカのフェミニズムは、文学だけでなく広い領域で影響を及ぼしている。論集でよく引かれる論文は、“African Women, Culture and Another Development” および “The Female Writer and her Commitment” である。もともと文学批評理論が専門であるナイジェリアのオバフェミ・アウオロウオ大学の Mary E. Modupe Kolawole (マリー・E・モドゥペ・コアウォレ) は、*Womanism and African Consciousness* (1997) のなかで、アフリカ独自のフェミニズムを模索している。その多くのページは文学作品の分析に費やされているものの、この研究書の貢献はむしろ、英語圏中心の現在のアフリカ学会ではとくに等閑視されがちな、フランス語圏アフリカのフェミニストの成果を交えて、理論の発展の概括をしていることにあり、文学批評以外の分野でも役に立つと思われる。インディアナ大学

のンナエメカ (Nnaemeka) もやはり文学批評家であるが、ナイジェリアで開催された「アフリカとアフリカ・ディアスポラの女性会議」をもとに彼女が編集した *Sisterhood, Feminisms and Power: From Africa to the Diaspora* (1998) は、作家、活動家、文化人類学者、歴史家、などさまざまな分野の女たちが文章を寄せ、アフリカの視点からジェンダー研究を行いたいと考えるあらゆる者にとり、非常に有益なものとなっている。このように、さまざまな分野の成果を共有することで、アフリカの女独自の経験全体を説明しうる理論を形成し、さらにフェミニズムとポストコロニアリズムの両理論を交差させて、ジェンダー、人種、民族、宗教、階級、などさまざまな軸足を持つ新しい解放の理論を目指そうという動きが、アフリカの女性研究全体をつうじて出てきているのである。残念ながら、アジアのガヤトリ・スピヴァックやトリン・ミンハに並ぶような先鋭的な理論家はアフリカからはいまだ輩出していないが、今後の発展がますます楽しみである。

## 注

1. 参考までに、フランス語圏アフリカの女性作家研究の文献目録を、いくつか示しておく。Christine H. Guyonneau, "Francophone Women Writers from Sub-Saharan Africa: A Preliminary Bibliography," *Callaloo* 24 (1985): 453-83. また、*Callaloo* 29 (1986): 694-736は、マダガスカル、モーリシャス、レユニオンの女性作家に関する文学研究、文学作品を扱っており、貴重である。Beverly Ormerod, and Jean Marie Volet, "Francophone Women Writers from Sub-Saharan Africa: An Annotated Bibliography," *African Literature Association Bulletin* 18.4 (1992): 15-22. さらに Irene A. D'Almeida, *Francophone African Women Writers: Destroying the Emptiness of Silence* (Gainesville: UP of Florida, 1994) および Mary Jean Green, Karen Gould, Maximin Micheline Rice, Keith L. Walker, and Jack A. Yeager, eds, *Postcolonial Subjects: Francophone Women Writers* (Minneapolis: U of Minnesota P, 1996) も参考になる。
2. ネグリチユードをめぐる議論については、Rand Bishop, *African Literature, African Critics: The Forming of Critical Standards, 1947-1966*, Contributions in Afro-American and African Studies 115 (Westport, CO: Greenwood, 1988) を参照。
3. レオポルド・セダール・サンゴール著『レオポルド・セダール・サンゴール詩集』日本セネガル友好協会編1979年 pp. 32-3.
4. アチェベの女性表象については、Oike Machiko, "Women, Narrative and History in African Literature: A Comparative Study of Chinua Achebe and Buchi Emecheta," diss., Ochanomizu U, 1998 を参照。
5. Chinua Achebe, *Things Fall Apart* (1958; London: Heinemann, 1976) 94.
6. それどころか、1910年代に母語で作品を発表した女性作家すら存在する。例えば Lillith Kakaza (リリス・カカザ。およそ1885-1950) は、1913年から14年ごろ、コーサ語で短い中編小説と長編小説を出版している。
7. Gerald Moore, *Seven African Writers* (London: Oxford UP, 1962). Gerald Moore, *Twelve African Writers* (London: Hutchinson, 1980). Eustace Palmer, *An Introduction to the African Novel* (London: Heinemann, 1972). Eustace Palmer, *The Growth of the African Novel* (London: Heinemann, 1979). Oscar Dathorne, *African Literature in the Twentieth Century, Studies in African Literature* (1974 as *The Black Mind: A History of African Literature*, Minnesota: U of Minnesota P; London: Heinemann, 1976)
8. 1冊目は、Flora Nwapa, *Efuru*, African Writers Ser. 26 (London: Heinemann, 1966)、2冊目は Flora Nwapa, *Idu*, African Writers Ser. 56 (London: Heinemann, 1970) であった。本稿でも取り上げたグレイス・オゴトも、1966年に処女作を発表しているが、処女作だけでなくオゴトの多くの作品は、ケニヤの出版社の版しか流通しておらず、非常に入手しにくい状況となっている。
9. Oyekan Owomoyela, ed., *A History of Twentieth-Century African Literatures* (Lincoln: U of Nebraska P, 1993).
10. Karen Chapman, "Introduction to Ama Ata Aidoo's *Dilemma of a Ghost*," pp. 25-38; Sonia Lee, "The Awakening of Self in the Heroines of Ousmane Sembene," pp. 52-60; Marie Linton-Umeh, "The African Heroine," pp. 39-51; Andrea Benton Rushing, "Images of Black Women in Modern African Poetry: An Overview," pp. 18-24.
11. Elaine Showalter, ed., *The New Feminist Criticism* (New York: Pantheon, 1985). 邦訳、エレイン・ショーウォーター編『新フェミニズム批評——女性・文学・理論』青山誠子訳 岩波書店 1990年
12. ウーマニズムといえばアフリカ系アメリカ人のアリス・ウォーカーが提唱したものが有名だが、オグニエミはウォーカーとはべつに、だがウォーカーときわめて近い概念に到達したとしている。Alice Walker, *In Search of Our Mother's Gardens* (San Diego: Harcourt, 1983) 参照。アフリカ系アメリカ人の中でのその後の議論の展開については、Clenora Hudson-Weems, *African Womanism: Reclaiming Ourselves* (2<sup>nd</sup> rev. ed. Troy, MI: Bedford, 1994) および Tuzyline J. Allan, *Womanist and Feminist Aesthetics: A Comparative Review* (Athens: Ohio UP, 1995) などを参照。
13. 言語、口承文学の問題については、以下の文献を参照。Chinweizu, Onwuchekwa Jemie, and Ihechukwu Madubuike, *Toward the*

*Decolonisation of African Literature: African Fiction and Poetry and Their Critics* (Enugu, Nigeria: Fourth Dimension, 1980). Ngugi Wa Thiong'o, *Decolonizing the Mind: The Politics of Language in African Literature*, *Studies in African Literature* (1986; London: Currey, 1992). Oyekan Owomoyela, "The Question of Language in African Literatures." *A History of Twentieth-Century African Literatures*, ed. Oyekan Owomoyela (Lincoln: U of Nebraska P, 1993) 347-68. *African Literature Today* 17 (1989) Special issue on Question of Language. *African Literature Today* 18 (1990) Special issue on Orature. *Research in African Literatures* 23.1 (1992) Special issue on The Language Question. *Research in African Literatures* 24.2 (1993) Special issue on Oral Literature. *Research in African Literatures* 28.1 (1997) Special issue on The Oral-Written Interface.

14. ここで注記しておきたいのが、ヘッダの特別な位置である。彼女は、女性作家のなかでも早くから評価が確立され、しかもその評価を今なお維持している例外的な作家であり、ここで述べる女性作家研究の歴史の流れとは、別枠で考えるべきであろう。もっともヘッダ研究の関心の多くは、セクシュアリティ/ジェンダーよりは土地や人種に焦点が当てられており、それゆえ主流の文学研究に取り入れられやすかったのだと思われる。詳しくはI-Bのヘッダの項参照のこと。
15. たとえば次の研究書を参照。Filomina Chioma Steady, ed., *The Black Woman Cross-Culturally* (Cambridge, MA: Schenkman, 1981). Rosalyn Terborg-Penn and Andrea Bonton Rushing, eds., *Women in Africa and the African Diaspora: A Reader*, 2<sup>nd</sup> ed. (1987; Washington, D.C.: Howard UP, 1996).

## B. 女性作家紹介

### 1. Ama Ata Aidoo (アマ・アタ・エドゥ)

1942年、ガーナ（当時ゴールドコースト）のファンティ人として生まれる。イギリスによって投獄され、拷問を受けたうえ殺された祖父と、首長として活躍した父親をもち、アフリカの植民の歴史と、伝統的な文化に対する強い意識とともに育った。1964年、ガーナ大学レゴン校を卒業。同年、処女作の *The Dilemma of a Ghost* をレゴンの学生劇場で上演して以来、短編集、小説、詩集などを発表し、多方面で活躍する。ガーナ大学での教職を初めとして、アメリカの研究機関での顧問、ガーナのローリンズ政権下での文部大臣などの要職を務める。現在、ジンバブエの首都ハラレで執筆活動を続けている。一児の母。

#### a. 作品

##### *Anowa* (1970)

親の反対を押し切って結婚したため不幸な結末を迎える娘を主人公とする、昔からある教訓物語をもとにした劇作品。アフリカ文学全体のなかでも評価の高い作品である。物語の時代は、ガーナがイギリスの植民地支配下に置かれる19世紀に設定されており、植民をめぐる男女の権力関係が大きなテーマとなっている。主人公である娘は、親にさからってみずから結婚相手を選ぶ、意志の強い自立した女として登場する。だが、彼女の反対にもかかわらず、夫が奴隷商売をし、それに成功するにつれ、二人の力関係は変化し、彼女は精神を病むようになる。ついに、奴隷商売の成功の陰に隠された夫の性的不能が明らかになったとき、夫は自殺、彼女は狂死し、物語は幕を閉じる。

オダムティン (Odamtten) の分析により、作品の歴史的な背景——イギリスが、ガーナの民族対立を利用して、植民地化を成功させたプロセス——が年代のうえで正確に特定されたのは、作品研究史における大きな収穫であった。植民の権力関係を男女の権力関係と合わせた上での、歴史的なさらなる分析が待たれる。

##### *Our Sister Killjoy: Or Reflections from a Black-Eyed Squint* (1977)

エドゥの作品中、もっとも実験的な形式と言語表現でもって書かれた作品。主人公は若いガーナの女で、ヨーロッパでの研修旅行中、アフリカに対して無知なヨーロッパの人々や、アフリカの現実を見ようとしないヨーロッパ在住のアフリカ人らと知り合いながら、過去の植民地支配、現在も続く新植民地主義のシステム、アフリカの矛盾などに対して、過剰なまでに敏感に意識させられる。印象的なシーンが、主人公がドイツの街を散策しているとき突然、「黒人の女！」という少女の声を耳にし、みずからの他者性を認識するという場面である。いうまでもなくこれは、フランツ・ファノンの『黒い皮膚、白い仮面』で描かれる体験と重なるものである。

また、あまり論じられていないが問題を含むのが、主人公がドイツ人の主婦と結ぶ同性愛的な関係である。今後、セクシュアリティと人種についての精緻な理論による分析が必要である。

*Changes: A Love Story* (1991)

上の2作品の説明から明らかなように、エドゥは他の女性作家とは違って、男女の問題よりむしろ植民地主義の問題をつきつめる傾向にあり、かつてのインタビューで、植民地主義がいまだ深刻である現在、「アクラ（ガーナの首都）の恋する二人については書けない」（Interview, *African*, 17）と語っていた。*Changes*はそのエドゥが、まさにアクラの恋人を扱った作品で、彼女の政治意識が変化したことがうかがえる。ここでは、主人公の女が経験する離婚、再婚こそが政治の場として表象されている。現代的なエリートである主人公は、祖母とも、母とも、友人とも違う新しい生き方を求め、妻子もちの男と再婚して伝統的な一夫多妻制の形を借りながら、それによって得られる自由を満喫する。しかし結局、伝統と近代を重ねることができずに、結婚生活は破綻する。

興味深い点は、主人公だけでなく、さまざまな社会階層、宗教、民族の女たちの結婚が描かれ、現代アフリカの権力構造の複層性が、明確に書き分けられていることである。特に、一夫多妻制をイデオロギーの面から分析した論文は、社会科学の分野でも少なく、それが宗教、階級、民族、教育などの差異と交差させられ、多くの問題を提示している。意外なほどまだ分析が進んでいない作品で、今後の批評が注目される。

**b. 批評**

エドゥについての批評は、大きく3つの方向からなされている。言語と形式、フェミニズム、アフリカのアイデンティティー、である。形式の面からの批評としては、伝統的な口承文学とのつながりを論じたものや、作品の言語分析などがある（例えば、Arlene Elder〈アーレーン・エルダー〉、Mildred A. Hill-Lubin〈ミルドレッド・A・ヒル＝ルービン〉など）。フェミニズムからの批評は、エドゥのラディカルな言語を、既存の秩序を攪乱するフェミニストの戦略であると位置づけ、エドゥは、主流のフェミニズムの白人中心主義に対し、アフリカの女の視点から挑戦していると考察する（例えば、Sara Chetin〈サラ・チェティン〉、Chimalum Nwanko〈チマルム・ンワンコ〉、Kofi Owusu〈コフィ・オウス〉、Caroline Rooney〈キャロライン・ルーニー〉など）。アフリカのアイデンティティーについて論じたものでは、ディアスポラの経験に焦点を当てたものが多い（例えば、Kwaku-Larbi Korang〈クウェク＝ラルビ・コラン〉、Gay Wilentz〈ゲイ・ウィレンツ〉など）。オダムティン（Odamatten）の研究書 *The Art of Ama Ata Aidoo: Polylectics and Reading Against Neocolonialism* は、研究書としては唯一の単行本であるが、そのタイトルが示すとおり、エドゥの作品を構成する多様な声をひとつの方向に収斂させることを避け、それぞれの作品を歴史的なコンテクストに置きながら、多重性を可能にしたエドゥの作品分析を試みる。とくに二章で行われた *Anowa* の歴史的背景の分析は、見事である。

**2. Zaynab Alkali (ザイナブ・アルカリ)**

作家を多く輩出するナイジェリアのなかでも珍しい、北部イスラム圏出身の作家。1950年、ナイジェリア、ボルノ州の、トゥラ＝ワジラ地域で生まれる。アーマドゥ・ベロ大学ザイラ校、バイエロ大学カノ校を卒業。ナイジェリア各大学で教職に就く。父親は40代の頃にキリスト教徒に改宗するが、アルカリ本人は1960年代初期にイスラム教徒となり、キリスト教とイスラム教の両方の影響を受ける。夫との間に6人の子供がいる。

**a. 作品**

*The Stillborn* (1984)

ナイジェリア北部の村の娘の、結婚、別離、自己実現、夫との和解といった人生が、彼女の幼なじみたちの人生と織り合わさって語られる。物語の最後に、主人公が将来、家族の中心である女主人となることが暗示され、彼女の果敢な人生の描写と合わさって、西アフリカのイスラム文化独特の女の位置が表象されている。

物語の大きなテーマのひとつが、移民、そして都市と村落の問題である。大方のこの種の物語とは違って、主人公は一度だけでなく、何度か町と村の間を行き来し、村は次第に町と変わらなくなっていく。また、物語の最後に、主人公は夫の住む町へ戻ろうと決意するが、都市への移住が家族の伝統への回帰を表すことになり、都市＝近代化／村落＝伝統という二項対立が、女の視点から崩されている。

#### b. 批評

アルカリについての批評は、まだ数少ない。ウメー (Umeh) は、アルカリをンワパ (Nwapa) のあとを継ぐ作家の一人に数え、さらにウーマニスト (アフリカに視点を置いたフェミニスト) の作家のリストに加えている。今後、アルカリと他のナイジェリア人作家とを比較することで、これまで注目されなかった北部の視点を入れた、より全体的なナイジェリア文学の像を形成する手助けになろう。また、西アフリカのイスラム圏の女性作家との比較も重要であり、それによって、これまで英語圏、フランス語圏という壁に阻まれてきた地域研究も生まれてくるのではないだろうか。

### 3. Mariama Bâ (マリアマ・バー)

1929年、セネガルのウォロフ人として生まれる。早くに母親をなくし、母方の祖父母に育てられ、イスラムの伝統的な教育とヨーロッパ流の学校教育の両方を受ける。高校時代、セネガルの教育について書いた小品を発表。卒業後は、小学校教師、のちに地方の教育官として働いただけでなく、9人の子供を育てながら、女性運動や教育運動にも深くかかわった。このように多忙をきわめたため、本格的な作品を発表したのは、実に51歳になってからであったが、それは野間賞受賞という栄誉を彼女にもたらした。アフリカの女性作家が国際的な賞をとったのはこれが初めてのことであった。だがその翌年、1981年に早過ぎる死を迎え、二作目は死後出版されている。

#### a. 作品

##### *Une si longue lettre* (1980)

中年の女が夫の喪に服している間、これまでの人生を振り返って、昔からの親友にあてて手紙を書くという、書簡体小説の形をとっている。熱烈な恋愛結婚、第二妻をめとるという夫の裏切り、にもかかわらず離婚をせずに義理の家族とも付き合い、子供たちを育て、仕事もこなすというその後の暮らし、夫の死、などが、友人に打ち明ける親密な調子で内面から描かれる。友人自身も夫に裏切られたが、離婚し、現在は役人として海外で暮らしている。小説は、そこまでラディカルではない方の女を中心にするので、一般的な中産階級の女の心情を十分に描くことに成功している。

以上、粗筋だけ追えば、単純なフェミニスト小説のように読めるが、ウォロフ社会独特の伝統的なカーストと、教育程度の差から生じる新しい階級との関係、イスラム社会の女性差別と、母系制のウォロフ社会の家族意識との関係が重なり合っており、描かれる権力関係はけっして単純ではない。

#### b. 批評

野間賞受賞により、バーは、英語圏中心のアフリカ女性文学界のなかで例外的に注目を浴びたフランス語圏の作家であるだけでなく、バーのおかげで、他のフランス語圏の女性作家も読まれるようになったといっても過言ではない。初期の批評は、セネガル本国のジャーナリストや研究者によってなされた短い記事やインタビューなどで、多くは、伝記的な事実や作品の紹介などに費やされた。本格的な批評のほとんどは、アフリカのフェミニスト作家という視点から、バーを論じている。社会的、文化的な背景から作品を論じたものとしては、数少ないなかから Mbye Cham (ムビエ・チャム) の論文を挙げたい。また、Siga Fatima Jagne (シガ・ファティマ・ジャグネ) によるバーの解説は、解説にとどまらないほど文化的側面を丁寧にまとめてあり、有益である。ジャグネが述べるように、今後は、同じく女に焦点を当てるにしても、セネガルの伝統的な女の語り部の伝統とのか

かわりを論じるような、より文化的、社会的な文脈に即した研究が待たれる。

#### 4. Tsitsi Dangarembga (ツィツィ・ダンガレムバ)

1959年、植民地時代のローデシア（現ジンバブエ）に、シヨナ人として生まれる。2歳から6歳までをイギリスで過ごす。1977年、ケンブリッジで薬学を学ぶためふたたび渡英するが、3年で帰国。ほどなくして祖国が独立を果たす。しばらく働いたのち、ふたたび、今度はジンバブエ大学に入学し、心理学を学ぶ。独立直後の民族回帰の時期、母語の口承芸術の伝統に目覚め、アフリカ人作家の作品を読みふけり、大学の演劇部で劇を執筆、監督する。作家としては、事実上の処女作の *Nervous Conditions* がコモンウェルス作家賞を受けたことで、一気に注目を集めた。現在は映画にたずさわっている。

##### a. 作品

###### *Nervous Conditions* (1988)

*Nervous Conditions* は、タイトルを、フランツ・ファノンの『地に呪われたるもの』の前書きを書いたサルトルの言葉からとっている。このことからわかるように、*Nervous Conditions* は、植民地主義という病的な状況に精神をむしばまれる少女と、それを生き延びるもう一人の少女の物語である。語り手の少女は、学校に通うため、町に住む金持ちの叔父の家に寄宿する。そこで、5年間イギリスに住んだ結果すっかり欧米化された従姉に会い、彼女からさまざまな新しい見方を学ぶ。だが従姉は、アフリカの文化とヨーロッパの文化とを統合しようとしてできず、拒食症になり、最後は精神病院に入ってしまう。病んでいく従姉をとおして、階級の矛盾、家父長制の矛盾、植民地主義の矛盾が、きわめて鋭く表象され、それが少女の成長物語として語られるところに、この小説の力がある。

##### b. 批評

アフリカの少女の成長の物語として、*Nervous Conditions* は、すでに揺るぎない地位を築いているといつてよく、それゆえ本稿でも、ダンガレムバの主要作品はこれ1作のみであるにもかかわらず彼女を取り上げた。批評のほとんどは、フェミニスト的な問題意識と植民地主義の議論を交差させたものである。例えば Sue Thomas (スー・トマス) は、ファノンの理論にジェンダーの視点から修正を迫るものとして、*Nervous Conditions* を読み解く。また Sally McWilliams (サリー・マックウィリアムズ) は、ホミ・バーバの模倣の理論を借りながら、*Nervous Conditions* は、女の主体も植民地主義の主体も社会によって構築されるものだと明らかにしていると論じる。これ以外の視点からの研究としては、Etienne Galle (エティエンヌ・ギャル) による、ダンガレムバの英語とシヨナ語についての論文を挙げたい。

#### 5. Assia Djebar (アッシア・ジェバー、本名 Fatima Zohra Imalayen ファティマ・ゾーラ・イマライエン)

男女を問わず北アフリカでもっとも有名な作家の一人であるジェバーは、1936年、アルジェリアに生まれた。家はイスラム教徒だったが、父親がフランス植民地政府の学校で教えていたため、ジェバーはフランス流の教育を受けることになった。彼女は学校で優秀な成績を修め、1955年には、最初のアルジェリアの女として、フランスのセブルの高等師範学校に入学した。卒業以来、チュニジア、アルジェリアで教鞭をとりながら、小説、短編小説、詩、演劇、映画などの創作活動にたずさわる一方で、評論、映画評、翻訳なども手がける。80年代初期に移住して以来現在まで、パリのアルジェリア文化センターの研究員を勤めながら、執筆活動を続けている。1958年、レジスタンスのメンバーと結婚、二人の子供をもうける。その後離婚し、1980年には詩人と再婚している。

### a. 作品

#### *Les femmes d'Alger dans leur appartement* (1980)

1959年から78年にかけて書かれた6つの短編小説を集めたもの。ジェバーのフランス語文学作家としてのターニングポイントとなった作品でもあり、マグレブ文学全体にとっての記念碑的な作品でもある。植民地時代の過去と、独立後の現在を並べながら、独立後もなお閉じ込められているアルジェリアの女を描き、フェミニズムがはたしてアルジェリアの状況を変え得たのかを問うている。

#### *L'Amour, la fantasia* (1985)

4部作の第1作目。1830年のアルジェリア征服から1954年～62年の独立戦争までのアルジェリアの植民の歴史を、女の声で語りなおす物語。その歴史意識は、つねに傑作として高く評価されてきた。語り手の母親が住む都会の共同体の女たちと、山地の農民の女たちの集団の歴史が、口承の歴史として再現され、さらにそれが、語り手の個人的な歴史と重なり合わされて、物語を織り成している。

#### *Vaste est la prison* (1995)

*Ombre sultane* (1987)、*Loin de Médine* (1991) に続く4部作の第4作目。自伝的な色彩の濃いこの作品は、ジェバーのこれまでの創作活動の総決算といえるものである。語り手はみずからの人生を子供時代からたどり、それが、語り手の女の先祖や親戚たちの歴史と織り合わせられる。さらに、歴史上の人物も登場する。物語の最後に、1994年に暗殺されたジャーナリストについて語られ、現在のアルジェリアに蔓延する恐怖と死を訴える。

### b. 批評

ジェバーは国際的に高い評価を受けており、ポストコロニアリズム、歴史、政治、フェミニズム、言語などの面から分析されている。その作品は数カ国語に訳され、とくに英訳をとおして欧米で広く読まれているが、残念なことに政治的な理由により、本国でアラビア語に訳されたものはひとつもない。

ジェバーがフランス語で書くことは、議論を呼んできた。例えば、アルジェリア独立後に発表されたリアリズム小説は、内容的には好意的に受け入れられたが、独立後になお、国語であるアラビア語ではなくフランス語で書いていることに対し、強く非難する批評家もいた。ジェバーの言語について書かれた代表的な論文は、Mildred Mortimer (ミルドレッド・モーティマー)、Adlai Murdoch (アドライ・マードック)、Clarisse Zimra (クラリス・ツィムラ)のものなどがある。

ジェバーの歴史意識については、数多くの論文が書かれている。ジェバーは、歴史を描くことで女の過去を取り戻し、同時に現在のアルジェリアの社会を批判するが、その手法は4部作において遺憾なく発揮されているとされる。ジェバーの歴史意識については、Mary Jean Green (マリー・ジーン・グリーン)、Danielle Marx-Scouras (ダニエル・マルク＝スクラ)、Andrea Page (アンドレア・ページ)、Marie-Blanche Tahon (マリー＝ブランシュ・タオン)らが論じている。

ジェバーの強いフェミニスト意識は、多くの賞賛を受けている。*La Nouba des femmes du Mont Chenoua* は、1979年のヴェネチア映画祭で国際批評家賞を受賞したが、本国アルジェリアのテレビで上演されると、あまりにも「フェミニスト的」だとして批判された。ジェバーのフェミニスト的な面を分析したものとしては、Rafika Merini (ラフィカ・メリニ)、Mildred Mortimer (ミルドレッド・モーティマー)、Clarisse Zimra (クラリス・ツィムラ)らの研究がある。

## 6. Buchi Emecheta (ブチ・エメチェタ)

1944年、ナイジェリアのラゴスでイボ人の両親のもとに生まれる。高校を出たあと結婚し、1962年、夫に続いて渡英。人種差別的な社会環境も手伝って夫との生活が破綻してからは、母子家庭で5人の子供を育てるかたわら、社会学の学士号、修士号を取得。同時に執筆活動も行い、何社からも拒否されたすえ、1972年に処女作を発

表。以降継続して作品を発表しつづけ、79年に発表した *The Joys of Motherhood* で世界的に認められる。イギリス、ナイジェリアの大学で教鞭をとり、国際的な作家会議でも講演するなど活躍している。現在もロンドンに住み、時々ナイジェリアに里帰りしてインスピレーションを受けながら、創作活動を続けている。

#### a. 作品

##### *The Joys of Motherhood* (1979)

エメチェタの出世作。エメチェタは、初期の自伝的な作品のあと、アフリカの過去に取材し、女の抑圧の歴史を掘り起こした。これはなかでももっとも深みのある作品で、植民地時代から独立期を舞台に、近代化から取り残された母親の悲劇的な一生を描いている。この小説が高く評価されている理由は、それまで男の視点からしか描かれなかった植民地化と近代化を、女の視点から、しかも近代化の主人公である男をつねに支える存在であった母親の視点から、きわめてリアリティに描いているためである。主人公は、村の伝統的な価値観、つまり、母親であることによって女は社会的な意味と位置を得るのだ、という価値観でもって育つ。ところが結婚を期に、彼女は首都に移住する。近代的な新しい環境では、母親であることが女の地位を保障するどころか、女の社会参加を阻むようになっていく。にもかかわらず、主人公は、母親であることだけに生きる価値を見出し、最後には子供のだれにも看取られず、独り死ぬ。

##### *Double Yoke* (1982)

*The Joys of Motherhood* のあと、エメチェタは、現代のアフリカに目を向けるようになる。*Destination Biafra* (1982) でナイジェリアの内戦を描いたあと、*Double Yoke* では、大学生の娘を主人公に、現代のアフリカの女が直面する問題——伝統的な価値観に従い家庭を守らなければならないのと同時に、教育を受けたからには男に劣らぬ働きもしなければならない、という「二重の束縛」——を描く。主人公の娘は、単位を取るために教授と関係を持ち、妊娠してしまう。だが彼女は、大きなおなかのまま堂々と学業を続け、最初は彼女をふしだらな女だとして非難していたボーイフレンドも、最後には彼女を受け入れる。タイトルの“Double Yoke”というフレーズが、現代のアフリカの女の苦境を端的に表しているとして、当時ひんぱんに引かれた。

##### *Kehinde* (1994)

初期の作品と同様、最近の2作品では、エメチェタは、現代のイギリスの移民社会を舞台に、移民のアイデンティティの問題を描いている。*Gwendolen* (1989) の主人公はジャマイカ移民の少女、*Kehinde* の主人公はナイジェリア移民の女である。彼女は、夫と何年もイギリスで過ごしているが、ナイジェリアの好景気に引かれて帰国を決意する。夫はナイジェリアで第二夫人までめとり、家族の中心として君臨するが、主人公はナイジェリアの大家族の生活になじめず、イギリスに戻り、そこを自分の故郷として選びなおす。

イギリスの黒人女性文学も、最近ジャンルとして成立しつつあり、今後エメチェタをその側面から論じることも必要となろう。

#### b. 批評

エメチェタの批評の初期のもの、つまり80年代のものは、ほとんどが彼女のフェミニスト的な視点を、「抑圧されたアフリカの女の真の声」として評価するものだった。そして逆に、少数ではあるが、アフリカ中心主義をとる批評家からは、エメチェタはヨーロッパかぶれの裏切り者であるという非難を受けてきた。前者の代表例が、Katherine Frank (キャサリン・フランク) を筆頭として、Nancy Bazin (ナンシー・ベイジン)、ウメー (Umeh) らであり、後者の代表例がオグニェミ (Ogunyemi) らである。例外的に Rolf Solberg (ロルフ・ソルバーグ) が、エメチェタがアフリカの伝統に対して抱く敬意と、アフリカの家父長制に対して行う批判の両義性を、指摘していた。だが90年代になると、Cynthia Ward (シンシア・ワード) のように、この両極の批評はアフリカフェミニズムの根本的な対立を反映している、という見方も登場する。またフィッシュバーン (Fishburn) は、アフリカ文化に反対するフェミニスト的な抗議の声ばかりが強調されていた、それまでの西

洋的な視点からのエメチェタ研究に修正を加え、植民地主義に対するアフリカ人としての抗議の声を読み取り、二つの抗議の声がいかに複雑に絡んでいるかを分析した。フェミニスト批評の先陣を切っていたウメーも、90年代になると、エメチェタのアフリカ的な側面にも焦点を当てて論じているようである。また近年、イギリスの黒人移民作家としてエメチェタを位置づける研究も、少しずつ見られるようになってきた。

## 7. Bessie Head (ベッシー・ヘッド)

ヘッドの人生は、1990年に出版された評論集のタイトルを借りれば、まさに「悲劇的な人生」だった。1937年、アパルトヘイト下の南アフリカ、白人の母親とその家の使用人である黒人の父親との間に、母親が収容されていた精神病院で生まれた。「カラード」の育ての親のもとで成長し、ヘッドが自分の出生をめぐる事実を知らされたのは、寄宿舎に入れられた13歳のときだった。そのときすでに、母親は精神病院で自殺していた。学校を卒業後、しばらく教師として働いたあと、ジャーナリストになり、同じくジャーナリストの夫とともに、政治活動を行う。夫と別れたあと、1964年、息子を連れてベチアナランド（現ボツワナ）に亡命。亡命後は、やはり教師として働きながら記事を書く。ボツワナ独立後は、1969年に精神をわずらって以来、入退院を繰り返しながらも実験農場にかかわり、文筆活動を続ける。1983年、早過ぎる死を迎える。

### a. 作品

#### *A Question of Power* (1973)

きわめて自伝的な要素の濃い作品。主人公はヘッドと同様、南アフリカからボツワナに亡命し、息子を育てながら実験農場にかかわる。圧巻は、アパルトヘイト下での人種差別、ボツワナの村人からの民族差別、アフリカ社会の女性差別などの矛盾により、精神を病む主人公の心の闘いの軌跡を、内側から描いた部分である。物語の最後に、主人公は、土地と結びつくことによって癒される。

このように、社会の矛盾を個人的な視点に限って表象した作品は、アフリカ文学では類を見ない。ここには、他の作家に見られる、伝統的な共同体のつながりといったものは皆無で、主人公は社会から疎外され、ひたすら内に向く。にもかかわらず、このきわめて特殊な作品がアフリカ文学研究で高く評価されたのは、アフリカが抱える矛盾を鋭くえぐっていたからであろう。

その他のヘッドの作品で有名なものは多いが、多く邦訳が出ているので、そちらの解説を参考にされたい。

### b. 批評

第I部の注でも触れたとおり、ヘッドは他の女性作家に比べ、例外的に早くから評価された作家である。たとえば、1986年という早い時期、そしてさらなる研究の発展を反映して1992年にも、文献目録が出版されている。もちろん彼女の作品を読めば、ジェンダーの視点は明らかであり、フェミニズム批評も多くされているが、彼女を他の女性作家とは別格の、キラ星のごとき地位においてきたのは、ジェンダーよりもむしろ、人種、土地、国家といった面からの関心だったといえる。またその独特の作品世界ゆえに、彼女の作品世界を受け継いだ作家が見当たらず、他の女性作家と有機的に結びつけて女性文学の伝統のなかで論じるのが難しいこともあって、女性文学研究において、幸か不幸か別枠で扱われてきた感がある。今後、ヘッドをアフリカ女性文学のなかで適切に評価していくことが課題であろうし、それによってアフリカ女性文学研究も、より豊かになっていくに違いない。

ヘッドを精神分析の視点から研究した論文は、Roger Berber (ロジャー・バーバー)、Elaine Campbell (エレヌ・キャンベル)、Patrick Colin Hogan (パトリック・コリン・ホーガン)、Modupe O. Olaogun (モドゥペ・O・オラオグン)、Jacqueline Rose (ジャクリン・ローズ) など数多い。また、土地と国家の問題については、Françoise Lionnet (フランソワーズ・リオネ)、V. S. Menager-Everson (V・S・メナジャー＝エバーソン)、Maxine Sample (マクシン・サンプル) らが論じている。フェミニスト的な視点からの研究では、Ifeyinwa Grace Achufusi (イフェインワ・グレイス・アチュフシ)、Nancy Bazin (ナンシー・ベイジン)、Sara Chetin (サ

ラ・チェティン)などが挙げられよう。

## 8. Flora Nwapa (フローラ・ンワパ)

黒人アフリカ女性作家で、最初に国際的な評価を受けた作家として名高い。1931年、ナイジェリアのイボ人として生まれる。祖父母、両親、ともに大商人で、地域の尊敬を受けていた名門の出身である。ンワパ自身もエリートで、ナイジェリアのイバダン大学、およびエジンバラ大学を卒業。高校教師、大学の事務官、各省庁の役人を勤めるだけでなく、みずから出版社を設立して活躍する。夫との間に3人の子供を持つ。1993年、没する。

### a. 作品

#### *Efuru* (1966)

ンワパの処女作だが、アフリカ女性作家の第一声として、彼女の作品のなかでもっとも高い評価を受けている。植民地時代の田舎を舞台にして、主人公の女と村人たち、とくに村の女たちとの関係が、日常の細かな描写とともに描かれる。主人公は、生まれも立派で、勤勉で、皆の尊敬を受けるが、子供に恵まれない。そのこともあってか、夫は家庭を顧みず、主人公は夫と別れる。物語の最後は、二人目の夫とも別れた主人公が、安らかに眠りながら、湖の女神——女に富を与えるが子供は与えないといわれる——の夢を見る場面で終わる。2作目の *Idu* (1970) も同様に、植民地時代の田舎を舞台にしている。

#### *One is Enough* (1992)

3作目以降、ンワパは作風を変え、現代のアフリカの都市を舞台にして、直截的な言葉で女の自立について語るようになる。*One is Enough* は、そんなンワパの後期の代表作である。主人公は、子供に恵まれないため夫と不仲になり、単身、都会に出る。そこで体を武器に商売に大成功し、ついには子供まで授かる。だが彼女は、子供の父親と結婚は望まず、「独りで十分」として独り身を貫く。男性作家が、女が都会へ出るのを否定的に描いてきたなか、身を売るといふ問題のあるやり方にしろ、都会で成功し、幸せをつかんだ女を描くことで、大きな問題提起をした作品である。

### b. 批評

ンワパの初期の批評は、西洋のフェミニズムの枠組みで、女の自立を強調するものが多かった。その意味では同国人のエメチェタに対する評価と似ているが、エメチェタの徹底的な抗議に比べ、ンワパの抗議はあいまいで、したがって評価も低かったといえる。しかし90年代になると、ンワパは、アフリカの伝統的な女の文化を発見した、アフリカ女性文学の母であるとする批評が、大半を占めるようになる。その先陣を切ったのが、Susan Andrade (スーザン・アンドレイド) である。また95年、ンワパの死を悼んで *Research in African Literatures* がンワパの特集を組むが、そのなかでンナエメカ (Nnaemeka)、オグニェミ (Ogunyemi)、ウメー (Umeh) などは、ンワパの分析をとおして、アフリカ独自のフェミニズムを模索している。とくに上述の *Efuru* における女神像は、アフリカの伝統文化における女の尊厳の象徴として、一種のアーキタイプになりつつある。

まだンワパの全体像をとらえた研究はなく、今後、現在高く評価されている初期の作品を、現代のアフリカを舞台にした後期の作品と関連づけながら、ンワパのフェミニスト意識の展開を探る必要があるだろう。

## 9. Grace Ogot (グレイス・オゴト)

1930年、ケニアのルオ人として生まれる。55年から59年にかけて、ウガンダとイギリスで看護婦と助産婦としての勉強をしたのち、ラジオのアナウンサー、航空会社の広報部、などさまざまな仕事に就く。そのかわり、60年代前半から執筆活動を続け、ケニア作家協会の初代会長を務めるなどして活躍。80年代には、国会議員、さらには副大臣として取り立てられ、女性の権利拡大のために努めている。83年に母語で書くことを宣言して以

来、母語で創作活動をしている。

#### a. 作品

##### *The Promised Land* (1966)

植民地時代を舞台にした、若い夫婦の移住の物語。土地を切望する夫は、妻の反対をおしきって、ケニヤからタンガニーカ（現タンザニア）に移住し、成功する。が、地元住民の反感を買い、のろいをかけられ、夫は病に侵され、妻は夫を引きずるようにしてもとの村へ帰る。処女作にしてすでに、オゴトをはじめとする東アフリカ作家の重要なテーマである、土地、移住の問題、そして社会の内部に潜む悪意、その発露であるマジックが複雑に重ねられており、それがさらに男女の権力関係と結びつけられている。

#### b. 批評

今回取り上げた女性作家のなかで、もっとも忘れられた存在だといえる。1990年に出版された女性作家インタビュー集でも、「公務に忙殺されていて」連絡が取れなかったという理由で収録されていないし、パレク（Parekh）とジャグネ（Jagne）の作家紹介でも取り上げられていない。したがって、この解説を書くにも非常に苦労させられたほどだ。

だが、上の作品紹介でも触れたとおり、とくに土地意識と絡んだ国家や民族の問題が、きわめてサイコロジカルな表象をされているという点で、もっと注目されてしかるべき作家であろう。最近の研究で、ヘッドと比較したものがあがるが、上の論点はヘッドにも共通するものであり、今後の比較研究の発展が期待される。

## II. 文献紹介

### A. 本稿作成にあたり参考にした文献の目録

I-Aの女性文学研究史を書くにあたって主に参考にしたのは、以下の3点である。

- Brown, Lloyd W. "Introduction" and "The Woman's Voice in African Literature." *Women Writers in Black Africa*. Contributions in Women's Studies 21. Westport, CO: Greenwood, 1981. 3-13, 14-34.
- Davies, Carole Boyce. "Introduction: Feminist Consciousness and African Literary Criticism." *Ngambika: Studies of Women in African Literature*. Eds. Carole Boyce Davies and Anne Adams Graves. Trenton, NJ: Africa World, 1986. 1-23.
- Davies, Carole Boyce, and Elaine Savory Fido. "African Women Writers: Toward a Literary History." *A History of Twentieth-Century African Literatures*. Ed. Oyekan Owomoyela. Lincoln: U of Nebraska P, 1993. 311-46.

I-Bの作家の紹介における事実関係は、以下の研究書の記述による。

- Bruner, Charlotte H., ed. *The Heinemann Book of African Women's Writing*. Heinemann African Writers Ser. Oxford: Heinemann, 1993. 作家紹介の部分
- , ed. *Unwinding Threads: Writing by Women in Africa*. Heinemann African Writers Ser. 256. Oxford: Heinemann, 1983. 作家紹介の部分
- James, Adeola, ed. *In Their Own Voices: African Women Writers Talk*. Studies in African Literature. London: Currey, 1991. 作家紹介の部分
- Parekh, Pushpa Naidu, and Siga Fatima Jagne, eds. *Postcolonial African Writers: A Bio-Bibliographical Critical Sourcebook*. Westport, CO: Greenwood, 1998.

II の文献目録を作成するにあたって参考にしたのは、以下の文献およびデータベースである。

- Azodo, Ada Uzoamaka. "Issues in African Feminism." *Women's Studies Quarterly* 25. 3-4 (1997): 201-7. (シラバス)
- Berrian, Brenda. *Bibliography of African Women Writers and Journalists: Ancient Egypt-1984*. Washington, D.C.: Three Continents, 1985.
- . "An Update: Bibliography of Twelve African Women Writers." *Research in African Literatures* 19(1988): 206-31.
- Bullwinkle, David A. *African Women: A General Bibliography, 1976-1985*. African Special Bibliographic Ser. 9. New York: Greenwood, 1989.
- . *Women of Northern, Western, and Central Africa: A Bibliography, 1976-1985*. African Special Bibliographic Ser. 10. New York: Greenwood, 1989.
- . *Women of Eastern and Southern Africa: A Bibliography, 1976-1985*. African Special Bibliographic Ser. 11 New York: Greenwood, 1989.
- UnCover. Online. CARL. Jan. 1998.
- COPAC (Consortium of University Research Libraries). Online. Jan. 1998.
- LC MARC: Books All. Online. U.S. Library of Congress Information System. Jan. 1998.
- MELVYL. Online. University of California, California Digital. Jan. 1998.
- MLA International Bibliography of Books and Articles on the Modern Languages and Literatures. *MLA International Bibliography*. CD-ROM. Silver Platter. Aug. 1998.
- Nnaemeka, Obioma. "Black Women Writers." *Women's Studies Quarterly* 25. 3-4 (1997): 208-24. (シラバス)
- Scheven, Yvette, ed. *Bibliographies for African Studies 1987-1993*. London: Hans Zell, 1994.

参考までに、より広い範囲でのアフリカ女性研究のためには、以下の文献目録が参考になると思われる。

*Africa Bibliography*. Yearly.

*Current Bibliography on African Affairs*. Quarterly.

*International African Bibliography*. Quarterly.

*Studies on Women Abstracts*. Bimonthly.

*WIN (Women's International Network) News*. Quarterly.

*Women Studies Abstracts*. Quarterly.

とくに Diane M. Duesterhoeft がまとめた "Special Periodical Issues about African Women, 1972-1991." *Current Bibliography on African Affairs* 24.1 (1992-3): 1-52 は、さまざまな分野にわたる雑誌のアフリカ女性研究特集号を目次細目まで挙げており、有益である。

## B. 女性文学研究に関する文献目録

*African Literature Today* 15 (1987). Special issue on Women in African Literature Today.

Aidoo, Ama Ata. "To Be an African Woman Writer: An Overview and a Detail." *Criticism and Ideology: Second African Writers Conference, Stockholm 1986*. Ed. Kirsten Holst Petersen. Uppsala, Sweden: Scandinavian Inst. of African Studies, 1988. 155-72.

Adebayo, Aduke, ed. *Feminism and Black Women's Creative Writing: Theory, Practice, and Criticism*. Ibadan,

- Nigeria: AMD, 1996.
- Adewale, Toyin, and Omowunmi Segun, eds. *Breaking the Silence: An Anthology of Short Stories By the Women Writers of Nigeria*. 1996. 2<sup>nd</sup> ed. Lagos, Nigeria: The Women Writers of Nigeria, 1998.
- African Literature Today* 15 (1987). Special Issue on Women Writers.
- Bell, Roseann P. "The Absence of the African Woman Writer." *CLA Journal* 21.4 (1978): 496.
- Bell, Roseann P., Bettie J. Parker, and Beverly Guy-Sheftall, eds. *Sturdy Black Bridges: Visions of Black Women in Literature*. Garden City: Anchor, 1979.
- Berrian, Brenda, comp. "An Update: Bibliography of Twelve African Women Writers." *Research in African Literatures* 19 (1988): 206–31.
- , comp. *Bibliography of African Women Writers and Journalists: Ancient Egypt—1984*. Washington D.C.: Three Continent, 1985.
- Brown, Lloyd. *Women Writers in Black Africa*. Contributions in Women's Studies 21. Westport, CO: Greenwood, 1981.
- Brown, Susan, Isabel Hofmeyer, and Susan Rosenberg, eds. *Lips from Southern African Women*. Johannesburg, South Africa: Ravan, 1983.
- Bruner, H. Charlotte, ed. *The Heinemann Book of African Women's Writing*. African Writers Ser. Oxford: Heinemann, 1993.
- , ed. *Unwinding Threads: Writing by Women in Africa*. African Writers Ser. 256. Oxford: Heinemann, 1983.
- Busby, Margaret, ed. *Daughters of Africa: An International Anthology of Words and Writings by Women of African Descent from the Ancient Egyptian to the Present*. London: Cape, 1992.
- Cartey, Wilfred. *Whispers from a Continent*. New York: Random, 1969.
- Chukukere, Gloria Chineze. *Gender Voices and Choices: Redefining Women in Contemporary African Fiction*. Enugu, Nigeria: Fourth Dimension, 1995.
- Chukwuma, Helen, ed. *Feminism in African Literature: Essays on Criticism*. Enugu, Nigeria: New Generation, 1994.
- Clayton, Cherry, ed. *Women and Writing in South Africa: A Critical Anthology*. Marshalltown, South Africa: Heinemann Southern Africa, 1989.
- Cobham, Rhonda. "Introduction." *Research in African Literatures* 19 (1988): 137–42.
- Condé, Maryse. "Three Female Writers in Modern African Fiction: Flora Nwapa, Ama Ata Aidoo and Grace Ogot." *Présence Africaine* 82.2 (1972): 132–43.
- Davies, Carole Boyce. *Black Women, Writing and Identity: Migrations of the Subject*. London and New York: Routledge, 1994.
- . "Introduction: Feminist Consciousness and African Literary Criticism." Davies and Graves 1–23.
- . *Moving Beyond Boundaries: Black Women's Diasporas*. Vol. 2. New York: New York UP, 1995.
- Davies, Carole Boyce, and Elaine Savory Fido. "African Women Writers: Toward a Literary History." A *History of Twentieth-Century African Literatures*. Ed. Oyekan Owomoyela. Lincoln: U of Nebraska P, 1993.
- Davies, Carole Boyce, and Anne Adams Graves, eds. *Ngambika: Studies of Women in African Literature*. Trenton, NJ: Africa World, 1986.
- Davies, Carole Boyce, and Omolara Ogundipe-Leslie, eds. *Moving Beyond Boundaries: International Dimensions of*

- Black Women's Writing*. Vol. 1. New York: New York UP, 1995.
- Daymond, M. J., ed. *South African Feminisms: Writing, Theory, and Criticism, 1990–1994*. Gender and Genre in Literature. New York: Garland, 1996.
- DeShazer, Mary K. *A Poetics of Resistance: Women Writing in El Salvador, South Africa, and the United States*. Ann Arbor: U of Michigan P, 1994.
- Egejuru, Phaniel Akubueze, and Ketu H. Katrak, eds. *Nwanyibu: Womanbeing and African Literature*. Annual Selected Papers of the ALA (African Literature Association)1. Trenton, NJ: Africa World, 1997.
- Eke, Maureen N. *From the Heart: Women and Liberation in New Writings by Black South African Women*. East Lansing: Michigan State U, 1993.
- Holloway, Karla F. C. *Moorings and Metaphors: Figures of Culture and Gender in Black Women's Literature*. New Brunswick, NJ: Rutgers UP, 1992.
- James, Adeola, ed. *In Their Own Voices: African Women Writers Talk*. Studies in African Literature. London: Currey; Portsmouth, NH: Heinemann, 1990.
- Kolawole, Mary E. Modupe. *Womanism and African Consciousness*. Trenton, NJ: Africa World, 1997.
- 楠瀬佳子『南アフリカを読む——文学・女性・社会』第三書館 1994年
- 楠瀬佳子、山田裕康編訳 バッシー・ヘッド、グシナ・ムシヨーベほか著『女が集まる——南アフリカに生きる』現代企画室 1990年
- Little, Kenneth. *The Sociology of Urban Women's Image in African Literature*. London: Macmillan, 1980.
- Mabuza, Lindiwe. *One Never Knows: An Anthology of Black South African Women Writers in Exile*. Braamfontein: Skotaville, 1989.
- Mutiso, G. C. M. "Women in African Literature." *East Africa Journal* 3.3 (1971): 4–14. Rpt. in *Socio-Political Thought in African Literature*. London: Macmillan, 1974.
- Nasta, Susheila, ed. *Motherlands: Black Women's Writing from Africa, the Caribbean and South Asia*. London: Women's, 1991.
- Newell, Stephanie, ed. *Writing African Women: Gender, Popular Culture and Literature in West Africa*. London: Zed, 1997.
- Nfah-Abbenyi, Juliana Makuchi. *Gender in African Women's Writing: Identity, Sexuality, and Difference*. Bloomington: Indiana UP, 1997.
- Nnaemeka, Obioma, ed. *Sisterhood, Feminisms and Power: From Africa to the Diaspora*. Trenton, NJ: Africa World, 1998.
- , ed. *The Politics of (M)othering: Womanhood, Identity, and Resistance in African Literature*. London and New York: Routledge, 1997.
- Ogundipe-Leslie, Omolara. "African Women, Culture and Another Development." Ogundipe-Leslie, *Re-Creating* 21–41.
- . "The Female Writer and her Commitment." *African Literature Today* 15 (1987): 5–13. Rpt. in Ogundipe-Leslie, *Re-Creating* 57–67. An earlier version of this appeared in *The Guardian* (Lagos) 21 Dec. 1983.
- . *Re-Creating Ourselves: African Women and Critical Transformations*. Trenton, NJ: Africa World, 1994.
- Ogunyemi, Chikwenye O. *Africa Wo/Man Palava: Nigerian Novel by Women*. Women in Culture and Society. Chicago: U of Chicago P, 1996.
- . "Womanism: The Dynamics of the Contemporary Black Female Novel in English." *Signs* 11.1 (1985):

- 63–80. Rpt. in *Revising the Word and the World: Essays in Feminist Literary Criticism*. Ed. Veve A. Clark, Ruth-Ellen B. Joeres and Madelon Sprengnether. Chicago: U of Chicago, 1993.
- Otokunefor, Henrietta C., and Obiageli C. Nwodo, eds. *Nigerian Female Writers: A Critical Perspective*. Lagos, Nigeria: Malthouse, 1989.
- Parekh, Pushpa Naidu, and Siga Fatima Jagne, eds. *Postcolonial African Writers: A Bio-Bibliographical Critical Sourcebook*. Westport, CO: Greenwood, 1998. (女性作家の項目をいくつか含む。第II部の文献目録の相互引証参照のこと。)
- Research in African Literatures* 19.2 (1988). Special Issue on Women Writers.
- Research in African Literatures* 25.3 (1994). Special Issue on Women as Oral Artists.
- Research in African Literatures* 26.2 (1995). Special Issue on Flora Nwapa.
- Research in African Literatures* 28.2 (1997). Special Issue on Autobiography and African Literature. (女性文学研究論文をいくつか含む)
- Schipper, Mineke, ed. *Unheard Words: Women and Literature in Africa, the Arab World, Asia, the Caribbean, and Latin America*. Trans. Barbara Potter Fasting. London: Allison, 1985.
- Shoga, Yinka. "Women Writers and African Literature." *Afriscopes* 3.10 (1973): 44–5.
- Sircar, Roopali. *The Twice Colonised: Women in African Literature*. Creative New Literature Ser. 3. New Delhi: Creative, 1995.
- Steady, Filomina Chioma, ed. *The Black Woman Cross-Culturally*. Cambridge, MA: Schenkman, 1981.
- Stratton, Florence. *Contemporary African Literature and the Politics of Gender*. New York and London: Routledge, 1994.
- . "The Shallow Grave: Archetypes of Female Experience in African Fiction." *Research in African Literatures* 19.2 (1988): 143–69.
- Taiwo, Oladele. *Female Novelists of Modern Africa*. London: Macmillan, 1984.
- Terborg-Penn, Rosalyn and Andrea Bonton Rushing, eds. *Women in Africa and the African Diaspora: A Reader*. 1987. 2<sup>nd</sup> ed. Washington, D.C.: Howard UP, 1996.
- Vanden Driesen, Cynthia. *Centering the Margins: Perspectives on Literatures in English from India, Africa, Australia*. New Delhi: Prestige, 1995.
- Wilentz, Gay. *Binding Cultures: Black Women Writers in Africa and the Diaspora*. Blacks in the Diaspora. Bloomington: Indiana UP, 1992.
- Wisker, Gina, ed. *Black Women's Writing*. Insights. New York: St. Martin's, 1993.
- Woodhull, Winifred. *Transfigurations of the Maghreb: Feminism, Decolonization, and Literatures*. Minneapolis: U of Minnesota P, 1993.

## C. 女性作家の作品および研究論文目録

### 1. Ama Ata Aidoo

#### a. Works by Ama Ata Aidoo

##### (1) Works of Fiction

- The Dilemma of a Ghost*. London: Longmans and Green, 1965. New York: Collier-Macmillan, 1971. (play)
- "Story-Telling in an African Village." *The New African* (1966 Oct.): 166. (short story)
- "Cut Me a Drink." *Modern African Stories*. Ed. Ellis Komey and Ezekiel Mphahlele. London: Faber, 1968.

13-9. (short story)

“Satisfaction?” *University of Cape Coast English Department Workpapers* 2 (1972): 2-12. (short story)

*Anowa*. London: Longmans and Green, 1970. Washington D.C.: Three Continents, 1979. (play)

*No Sweetness Here*. London: Longman, 1970. New York: Doubleday, 1971. (short stories)

上田光子訳「この世にやさしさはない」土屋哲編訳『現代アフリカ文学短編集』鷹書房 1977年 151-81頁

*Our Sister Killjoy: Or Reflections from a Black-Eyed Squint*. London: Longman, 1977. New York: NOK, 1979. (novel)

*The Dilemma of a Ghost and Anowa*. Harlow, U.K.: Longman, 1985. (play)

*Someone Talking to Sometime*. Harare, Zimbabwe: College, 1985. (poetry)

*The Eagle and the Chickens and Other Stories*. Enugu, Nigeria: Tana, 1987. (short stories)

*Birds and Other Poems*. Harare, Zimbabwe: College, 1987. (poetry)

*Changes: A Love Story*. New York: The Feminist Press at The City University of New York, 1991. (novel)

*An Angry Letter in January*. Coventry, U.K.: Dangaroo, 1992.

“THESE DAYS [III]-A Letter to Flora Nwapa.” *Research in African Literatures* 26.2 (1995): 17-21. (poem)

## (2) Essays

“The African Poet, His Critics and His Future.” *Legonite* (1964): 57-9.

“Thank You Mr. Howe.” *Transition* 6.29 (1967): 5-6. (letter)

“No Saviors.” *New African* 52 (1969): 37-9. Rpt. in *African Writers on African Writing*. Ed. G. D. Killam. New York: Africana, 1973. 14-8.

Introduction. *The Beautiful Ones Are Not Yet Born*. By Ayi K. Armah. New York: Collier-Macmillan, 1969. i-iv.

“Commitment.” *University of Cape Coast English Department Workpapers* 1 (1971): 10-4.

”Roundtable Discussion.” First African Literature Association Conference, Northwestern U, Evanston, Illinois. *Issue* 6.1 (1976): 124-7.

“Images of Women.” Woman and Work in Africa Symposium 6, U of Illinois, Urbana, 29 April 1979. (speech)

“Unwelcome Pals and Decorative Slaves: The Women as a Writer in Modern Africa.” *Medium and Message*.

Proc. of the International Conference on African Literature and the English Language, U of Calabar, Nigeria, 1980. 17-37. Rpt. in *AFA: Journal of Creative Writing* (Imo, Nigeria) (1 Nov. 1982): 34-43.

“To Be A Woman.” *Sisterhood is Global*. Ed. Robin Morgan. New York: Doubleday, 1984. 258-65.

“The Girl Who Can.” *Ms* (1985 Mar.): 99-101

“Sisterhood is Global.” *Essence* (1985 Mar.): 12+.

“To Be an African Woman Writer: An Overview and a Detail.” *Criticism and Ideology: Second African Writers Conference, Stockholm 1986*. Ed. Kirsten Holst Petersen. Uppsala, Sweden: Scandinavian Inst. of African Studies, 1988. 155-72.

“— for Kinna VII.” *West Africa* (6-12 Mar. 1989): 357.

“Nowhere Cool.” *Callaloo* 13.1 (1990): 62-70.

“Whom Do We Thank for Women’s Conferences?” *Ms* (1991 Jan.-Feb.): 96.

“Literature, Feminism and the African Woman Today.” *Reconstructing Womanhood, Reconstructing Feminism: Writings on Black Women*. Ed. Delia Jarrett-Macauley. London and New York: Routledge, 1996. 156-

74.

“The African Woman Today.” Nnaemeka, *Sisterhood* 39–50.

*The Power of the Word: Culture, Censorship, and Voice*. Co-author with Meredith Tax, Marjorie Agosin, Ritu Menon, Ninotchka Rosca, and Mariella Sala. New York: Women’s World, 1997.

### (3) Interviews

“An Interview with Ama Ata Aidoo.” *Cultural Events in Africa* 35 (1967): i–iv.

Interview. *African Writers Talking*. Ed. Dennis Duerden and Cosma Pieterse. New York: Africana, 1972. 18–27

“Ama Ata Aidoo.” James 8–27.

“We Were Feminists in Africa First.” By Adewale Maja-Pearce. *Index on Censorship* 19: 9 (1990): 17–8.

“Public Affairs, Politics, and the Destinies of People: An Interview with Ama Ata Aidoo.” *World Literature Written in English* 32.2–33.1 (1992–1993): 12–21.

“‘A New Tail to an Old Tale’: An Interview with Ama Ata Aidoo.” *Novel* 26.3 (1993): 297–308.

“An Interview with Ama Ata Aidoo.” *Massachusetts Review* 36.1 (1995): 123–33.

### (4) Others

Reading of the short story, “The Late Bud,” from *No Sweetness Here* (1970). Audiotape. First Person Feminine, Radio Ser., Iowa State U, Ames, Iowa. III.

#### b. Works on Ama Ata Aidoo

Berrian, Brenda. “The Afro-American West African Marriage Question: Its Literary and Historical Contexts.” *African Literature Today* 15 (1987): 152–9.

Booth, James. “Sexual Politics in the Fiction of Ama Ata Aidoo.” *Commonwealth Essays and Studies* 15.2 (1993): 80–96.

Chetin, Sara. “Reading from a Distance: Ama Ata Aidoo’s *Our Sister Killjoy*.” *Wisker* 146–59.

———. “Rereading and Rewriting African Women: Ama Ata Aidoo and Bessie Head.” *DAI* 53 (1992): 808 A. U of Kent.

Coussy, Denise. “Is Life Sweet? The Short Stories of Ama Ata Aidoo.” *Short Fiction in the New Literatures in English: Proceedings of the Nice Conference of the European Association for Commonwealth Literature and Language Studies*. Ed. Jacqueline Bardolph. Nice : Fac. des Lettres & Sciences Humaines de Nice, 1989. 285–90.

Dunton, Chris. “‘Wheyting Be Dat?’: The Treatment of Homosexuality in African Literature.” *Research in African Literatures* 20.3 (1989): 422–48.

Eko, Ebele. “Beyond the Myth of Confrontation: A Comparative Study of African and African-American Female Protagonists.” *ARIEL* 17.4 (1986): 139–52.

Elder, Arlene. “Ama Ata Aidoo and the Oral Tradition: A Paradox of Form and Substance.” *African Literature Today* 15 (1987): 109–18.

Gourdine, Angeletta Kim Marie. “Bridging the Middle Passage: Reading and (R)reading Diasporic Politics in Alice Walker’s *Possessing the Secret of Joy* and Ama Ata Aidoo’s *Changes*.” *DAI* 55 (1995): 3841 A. Michigan State U.

Hill Lubin, Mildred A. “The Storyteller and the Audience in the Works of Ama Ata Aidoo.” *Neohelicon* 16.2 (1989): 221–245.

- Hoeller, Hildegard. "Ama Ata Aidoo." Parekh and Jagne 32–9.
- Innes, C. L. "Mothers or Sisters? Identity, Discourse and Audience in the Writing of Ama Ata Aidoo and Mariama Ba." *Nasta* 129–51.
- Katrak, Ketu H. Afterword. *No Sweetness Here and Other Stories* By Ama Ata Aidoo. New York : Feminist, City Univ. of New York, 1995. 135–60.
- Korang, Kwaku Larbi. "Ama Ata Aidoo's Voyage Out: Mapping the Coordinates of Modernity and African Selfhood in *Our Sister Killjoy*." *Kunapipi* 14.3 (1992): 50–61.
- MacKenzie, Clayton G. "The Discourse of Sweetness in Ama Ata Aidoo's *No Sweetness Here*." *Studies in Short Fiction* 32.2 (1995): 161–70.
- Nwankwo, Chimalum. "The Feminist Impulse and Social Realism in Ama Ata Aidoo's *No Sweetness Here and Our Sister Killjoy*." Davies and Graves 151–9.
- Odamtten, Vincent O[kpoti]. *The Art of Ama Ata Aidoo: Polylectics and Reading Against Neocolonialism*. Gainesville: UP of Florida, 1994.
- . "The Developing Art of Ama Ata Aidoo." *DAI* 50(1989): 1303 A. State U of New York, Stony Brook.
- Ogede, Ode. "The Defense of Culture in Ama Ata Aidoo's *No Sweetness Here*: The Use of Orality as a Textual Strategy." *International Fiction Review* 21.1–2 (1994): 76–84.
- Opara, Chioma. "Clothing as Iconography: Examples of Bà, Aidoo, and Emecheta." Adebayo 110–25.
- . "Narrative Technique and the Politics of Gender: Ama Ata Aidoo's *Our Sister Killjoy* and *No Sweetness Here*." Newell 137–46.
- Opoku-Agyemang, Kwadwo. "A Crisis of Balance: The (Mis)Representation of Colonial History and the Slave Experience as Themes in Modern African Literature." *Nationalism vs. Internationalism: (Inter)National Dimensions of Literatures in English*. Ed. Wolfgang Zach and Ken L. Goodwin. Studies in English and Comparative Literature. Tübingen, Germany: Stauffenberg, 1996. 219–28.
- Owusu, Kofi. "Canons under Siege: Blackness, Femeness, and Ama Ata Aidoo's *Our Sister Killjoy*." *Callaloo* 13.2 (1990): 341–63.
- . "Fictionalizing as Fiction-Analyzing: A Study of Select 'Critical' Fiction by Ayi Kwei Armah, Wole Soyinka, Ama Ata Aidoo and Chinua Achebe." *DAI* 50 (1990): 3584 A. U of Alberta, Canada.
- Phillips, Maggi. "Engaging Dreams: Alternative Perspectives on Flora Nwapa, Buchi Emecheta, Ama Ata Aidoo, Bessie Head, and Tsitsi Dangarembga's Writing." *Research in African Literatures* 25.4 (1994): 89–103.
- Ramirez, Victoria Ann. "Writing Is But a Different Name for Conversation': Dialogism, Narrator, and Narratee in Sterne's *Tristram Shandy*, Aidoo's *Our Sister Killjoy*, and Pynchon's *Gravity's Rainbow*." *DAI* 58 (1997): 1702 A. State U of New York, Binghamton.
- Rooney, Caroline. "Are We in the Company of Feminists? A Preface for Bessie Head and Ama Ata Aidoo." *Diverse Voices*. Ed. Harriet Devine Jump. New York: St. Martin's, 1991. 214–47.
- . "'Dangerous Knowledge' and the Poetics of Survival: A Reading of *Our Sister Killjoy* and *A Question of Power*." *Nasta* 99–126.
- Sackey, Edward. "Oral Tradition and the African Novel." *Modern Fiction Studies* 37.3 (1991): 389–407.
- Samantrai, Ranu. "Caught at the Confluence of History: Ama Ata Aidoo's Necessary Nationalism." *Research in African Literatures* 26.2 (1995): 140–57.
- Utudjian, Elaine Saint Andre. "Ghana and Nigeria." *Post-Colonial English Drama: Commonwealth Drama since*

1960. Ed. Bruce King. New York: St. Martin's; London: Macmillan, 1992. 186–99.

Wilentz, Gay. “Ama Ata Aidoo: *The Dilemma of a Ghost*.” Wilentz 38–57.

———. “The Politics of Exile: Ama Ata Aidoo’s *Our Sister Killjoy*.” *Studies in Twentieth Century Literature* 15.1 (1991): 159–73.

Willey, Elizabeth. “National Identities, Tradition, and Feminism: The Novels of Ama Ata Aidoo Read in the Context of the Works of Kwame Nkrumah.” *Interventions: Feminist Dialogues on Third World Women’s Literature and Film*. Ed. Bishnupriya Gosh and Brinda Bose. Garland Reference Library of the Humanities. New York: Garland, 1997. 3–30.

Wright, Derek. “Returning Voyagers: The Ghanaian Novel in the Nineties.” *Journal of Modern African Studies* 34.1 (1996): 179–92.

## 2. Zaynab Alkali

### a. Works by Zaynab Alkali

#### (1) Works of Fiction

*The Stillborn*. Harlow: Longman, 1984.

*The Virtuous Woman*. Ikeja, Nigeria: Longman, 1987.

“Salzlose Asche” (Saltless Ash), “Das eigene Leben” (The Survivor), and “Haua des Schreckens” (House of Horror). *Salzlose Asche: Kurzgeschichten aus Nigeria*. Ed. Lotta Suter. Zurich: Stechapfel Verlag, 1989.

“Haua des Schreckens” is rpt. in *A Voyage Around: Literatur aus Kamerun, Nigeria, Simbabwe*. Berlin: Andenbuch, 1990.

“The Nightmare.” *Touchstone 15: African Women Write*. Ed. Guida Jackson. Houston: Touchstone, 1990.

“Saltless Ash.” *Touchstone 15: African Women Write*. Ed. Guida Jackson. Houston: Touchstone, 1990. Rpt. in Bruner, Heinemann 26–33.

*The Cobwebs*. Forthcoming.

#### (2) Essays

“Feminism: A Radical Theme in West African Literature.” *Touchstone 15: African Women Write*. Ed. Guida Jackson. Houston: Touchstone, 1990.

“Landlicher Markt in Nigeria.” *NZZ-Folio* Oct. 1992: 71–3.

#### (3) Interviews

Interview. *Guardian* (Lagos, Nigeria) 27 Mar. 1985: 9.

“Important . . . But Not the Same.” *West Africa* 11 July 1988.

“Women Writers Bag Top Fiction Prizes.” By Emmanuel Ibelele. *New African* 222 (Mar. 1989): 49.

“Zaynab Alkali.” *James* 28–32.

### b. Works on Zaynab Alkali

Galle, Etienne. “The Probable Young African Hero.” *Commonwealth Essays and Studies* 15.2 (1992): 29–35.

Kassam, Margaret Hauwa. “Behind the Veil in Northern Nigeria: The Writing of Zaynab Alkali and Hauwa Ali.” *Newell* 117–25.

Koroye, Seiyefa. “The Ascetic Feminist Vision of Zaynab Alkali.” *Otokunefor and Nwodo* 47–51.

Loflin, Christine. “Zaynab Alkali.” *Parekh and Jagne* 40–4

- Mojola, Ibiyemi. "The Onus of Womanhood: Mariama Bâ and Zaynab Alkali." *Newell* 126–36.
- Otiono, Nduka. "Colour Me Ba(r)d: Orality and the Feminist Question in Zaynab Alkali's *The Stillborn*." *Adebayo* 134–52.
- Udumukwu, Onyemaechi. "Post-Colonial Feminism: Zaynab Alkali's *The Stillborn*." *Literary Griot* 6.1 (1994): 47–60.
- Umeh, Marie. "Finale: Signifyin' the Griottes: Flora Nwapa's Legacy of (Re)Vision and Voice." *Research in African Literatures* 26.2 (1995): 114–23.

### 3. Mariama Bâ

#### a. Works by Mariama Bâ

##### (1) Works of Fiction

- Une si longue lettre*. Dakar: Nouvelles Éditions Africaines, 1980.
- So Long a Letter*. Trans. Modupe Thomas. London: Heinemann, 1981.
- 中島弘二訳『かくも長き手紙』講談社 1981年
- Un chant écarlate*. Nouvelles Éditions Africaines, 1981.
- Scarlet Song*. Trans. Dorothy Blair. Essex: Longman, 1986.

##### (2) Interviews

- "The Long Road to Emancipation: Interview with Mariama Bâ." *Afrika* 12 (1980): 12.
- "Mariama Bâ, Winner of the First Noma Award for Publishing in Africa: An Interview." *African Book Publishing Record* 6.3–4 (1980): 209–14.

#### b. Works on Mariama Bâ

- AbuBakr, Rashidah Ismaili. "The Emergence of Mariama Bâ." *Essays on African Writing, I: A Re-evaluation*. Ed. Abdulrazak Gurnah. Oxford: Heinemann, 1993. 24–37.
- Boateng, Faustine Ama. "At the Crossroads: Adolescence in the Novels of Mariama Bâ, Aminata Sow Fall, Ken Bugul and Khadi Fall." *DAI* 56 (1995): 926 A. Howard U.
- Brown, Ella. "Reactions to Western Values as Reflected in African Novels." *Phylon* 48.3 (1987): 216–28.
- Busia, Abena P. B. "Rebellious Women: Fictional Biographies-Nawal el Sa'adawi's *Woman at Point Zero* and Mariama Bâ's *So Long a Letter*." *Nasta* 88–98.
- . "Words Whispered over Voids: A Context for Black Women's Rebellious Voices in the Novel of the African Diaspora." *Black Feminist Criticism and Critical Theory*. Ed. Joe Weixlmann and Houston A. Baker Jr. *Studies in Black American Literature* 3. Greenwood, FL: Penkevill, 1988. 1–41.
- Cham, Mbye B[aboucar]. "Contemporary Society and the Female Imagination: A Study of the Novels of Mariama Bâ." *African Literature Today* 15 (1987): 89–101.
- . "The Female Condition in Africa: A Literary Exploration by Mariama Bâ." *Current Bibliography on African Affairs* 17.1 (1984–1985): 29–52.
- . "Islam in Senegalese Literature and Film." *Faces of Islam in African Literature*. Ed. Kenneth Harrow. London: Currey, 1991. 163–86.
- Champagne, John. "'A Feminist Just Like Us?' Teaching Mariama Bâ's *So Long a Letter*." *College English* 58.1 (1996): 22–42.

- D'Almeida, Irene AssiBa. "The Concept of Choice in Mariama Bâ's Fiction." *Davies and Graves* 161–72.
- Derakhshesh, Derayeh. "Un Chant Écarlate: The Song of an Exile." *CLA Journal* 42.1 (1998): 91–102.
- Edson, Laurie. "Mariama Bâ and the Politics of the Family." *Studies in Twentieth Century Literature* 17.1 (1993): 13–25.
- Esonwanne, Uzo. "Enlightenment Epistemology and 'Aesthetic Cognition': Mariama Bâ's *So Long A Letter*." Nnaemeka, *Politics* 82–100.
- Fetzer, Glenn W. "Women's Search for Voice and the Problem of Knowing in the Novels of Mariama Bâ." *College Language Association Journal* 35.1 (1991): 31–41.
- Flewellen, Elinor C. "Assertiveness vs. Submissiveness in Selected Works by African Women Writers." *Ba Shiru* 12.2 (1985): 3–18.
- Gavioli, Davida. "In Search of the Mother's Lost Voice: Mariama Bâ's *Une si longue lettre*, Francesca Sanvitale's *Madre e figlia*, and Amy Tan's *The Joy Luck Club*." *DAI* 55 (1994): 1552 A–53 A. Pennsylvania State U.
- Grimes, Dorothy. "Mariama Bâ's *So Long a Letter* and Alice Walker's *In Search of Our Mothers' Gardens*: A Senegalese and an African American Perspective on 'Womanism.'" *Global Perspectives on Teaching Literature: Shared Visions and Distinctive Visions*. Ed. Sandra Ward Lott, Maureen S. G. Hawkins and Norman McMillan. Urbana, IL: National Council of Teachers of English, 1993. 65–76.
- Innes, C. L. "Mothers or Sisters? Identity, Discourse and Audience in the Writing of Ama Ata Aidoo and Mariama Bâ." *Nasta* 129–51.
- Irlam, Shaun. "Mariama Bâ's *Une si longue lettre*: The Vocation of Memory and the Space of Writing." *Research in African Literatures* 29.2 (1998): 76–93.
- Jackson, Kathy Dunn. "The Epistolary Text: A Voice of Affirmation and Liberation in *So Long a Letter* and *The Color Purple*." *The Griot* 12.2 (1993): 13–20.
- Jagne, Siga Fatima. "African Women and the Category 'Woman': Through the Works of Mariama Bâ and Bessie Head." *DAI* 55 (1995): 3837 A. State U of New York, Binghamton.
- . "Mariama Bâ." Parekh and Jagne 59–74.
- Kemp, Yakini. "Romantic Love and the Individual in Novels by Mariama Bâ, Buchi Emecheta and Bessie Head." *Obsidian II* 3.3 (1988): 1–16.
- King, Adele. "The Personal and the Political in the Work of Mariama Bâ." *Studies in Twentieth Century Literature* 18.2 (1994): 177–88.
- Larrier, Renée. "Reconstructing Motherhood: Francophone African Women Autobiographers." Nnaemeka, *Politics* 192–204.
- McElaney-Johnson, Ann. "The Place of the Woman or the Woman Displaced in Mariama Bâ's *Une si longue lettre*." *College Language Association Journal* 37.1 (1993): 19–28.
- Makward, Edris. "Marriage, Tradition and Woman's Pursuit of Happiness in the Novels of Mariama Bâ." *Davies and Graves* 271–81.
- Miller, Elinor S. "Two Faces of the Exotic: Mariama Bâ's *Un chant écarlate*." *French Literature Series* 13 (1986): 144–7.
- Miller, Mary-Katherine Fleming. "(Re)production of Self: Colonialism, Infanticide, and Autobiography in the Works of Mariama Bâ, Aminata Sow Fall, and Marguerite Duras." *DAI* 53 (1993): 3896 A. Yale U.
- Mojola, Ibiyemi. "The Onus of Womanhood: Mariama Bâ and Zaynab Alkali." *Newell* 126–36.

- Mortimer, Mildred. "Enclosure/Disclosure in Mariama Bâ's *Une si longue lettre*." *The French Review* 64.1 (1990): 69–78.
- Nnaemeka, Obioma. "Mariama Bâ: Parallels, Convergence and Interior Space." *Feminist Issues* 10.1 (1990): 13–35.
- . "UrBan Spaces, Women's Places: Polygamy as Sign in Mariama Bâ's Novels." Nnaemeka, *Politics* 162–91.
- Nwachukwu-AgBada, J. O. J. "'One Wife Be for One Man': Mariama Ba's Doctrine for Matrimony." *Modern Fiction Studies* 37.3 (1991): 561–73.
- Okhamafe, E. Imafedia. "The Ramatoulaye-Aissatou Styles in Contemporary African Feminism(s): Homages to A. T. Tymieniecka." *Phenomenology and Aesthetics: Approaches to Comparative Literature and the Other Arts*. Ed. Marlies Kronegger. Analecta Husserliana 32. Dordrecht: Kluwer Acadrmy under Auspices of World Institution for Advanced Phenomenological Research & Learning, 1991. 131–48.
- Oko, Emelia. "Eros, Psyche, and Society: Narrative Continuity in Mariama Bâ's *So Long a Letter* and *Scarlet Song*." Adebayo 168–77.
- Opara, Chioma. "Clothing as Iconography: Examples of Bâ, Aidoo, and Emecheta." Adebayo 110–25.
- . "The Emergence of the Female Self: The Liberating Pen in Mariama Bâ's *Une si longue lettre* and Sembene Ousmane's 'Lettres de France.'" Adebayo 153–67.
- Picanco, Luciano. "A Letter Form as Self-Construction: A Reading of Mariama Bâ's *So Long a Letter*." *Tropos* 22.1 (1996): 29–36.
- Plant, Deborah G. "Mythic Dimensions in the Novels of Mariama Bâ." *Research in African Literatures* 27.2 (1996): 102–11.
- Reyes, Angelita [Dianne]. "Crossing the Bridge: The Great Mother in Selected Novels of Toni Morrison, Paule Marshall, Simone Schwarz-Bart, and Mariama Bâ." *DAI* 46 (1985): 1618 A. U of Iowa.
- . "The Epistolary Voice and Voices of Indigenous Feminism in Mariama Bâ's *Une si longue lettre*." Davies, *Moving* 195–217.
- Riesz, Janos. "Mariama Bâ's *Une si longue lettre*: An Erziehungsroman." *Research in African Literatures* 22.1 (1991): 27–42.
- Rueschmann, Eva. "Female Self-Definition and the African Community in Mariama Bâ's Epistolary Novel *So Long a Letter*." *International Women's Writing: New Landscapes of Identity*. Ed. Anne E Brown and Marjanne E. Gooze. Contributions in Women's Studies 147. Westport, CT: Greenwood, 1995. 3–18.
- Sarvan, Charles Ponnuthurai. "Feminism and African Fiction: The Novels of Mariama Bâ." *Modern Fiction Studies* 34.3 (1988): 453–64.
- Shevlin, Eleanor F. "Cartographic Refrains and Postcolonial Terrains: Mariama Bâ's *Scarlet Song*." *Meddelanden fran Strindbergssallskapet* 43.4 (1997): 933–62.
- Slomski, Genevieve. "Dialogue in the Discourse: A Study of Revolt in Selected Fiction by African Women." *DAI* 47 (1986): 1721 A. Indiana U.
- Staunton, Cheryl Antoinette. "Three Senegalese Women Novelists: A Study of Temporal/Spatial Structures." *DAI* 47 (1986): 528 A
- Staunton, Cheryl Wall. "Mariama Bâ: Pioneer Senegalese Woman Novelist." *College Language Association Journal* 37.3 (1994): 328–35.
- Stratton, Florence. "'Literature as a . . . . Weapon': The Novels of Mariama Bâ." Stratton 133–55.

- . “The Shallow Grave: Archetypes of Female Experience in African Fiction.” *Research in African Literatures* 19.2 (1988): 143–69.
- Stringer, Susan. “Cultural Conflict in the Novels of Two African Writers, Mariama Ba and Aminata Sow Fall.” *SAGE* 5.Supp (1988): 36–41. The George Washington U.
- Treiber, Jeanette. “The Construction of Identity and Representation of Gender in Four African Novels.” *DAI* 53 (1992): 1909 A–10 A. U of California, Davis.
- . “Feminism and Identity Politics: Mariama Bâ’s *Un chant écarlate*.” *Research in African Literatures* 27.4 (1996): 109–23.
- Walker, Keith L. “Postscripts: Mariama Bâ, Epistolarity, Menopause, and Postcoloniality.” Green et al. 246–64.
- Wills, Dorothy Davis. “Economic Violence in Postcolonial Senegal: Noisy Silence in Novels by Mariama Bâ and Aminata Sow Fall.” *Violence, Silence, and Anger: Women’s Writing as Transgression*. Ed. Deirdre Lashgari. Feminist Issues: Practice, Politics, Theory. Charlottesville: UP of Virginia, 1995. 158–71.
- Yousaf, Nahem. “The ‘Public’ versus the ‘Private’ in Mariama Bâ’s Novels.” *The Journal of Commonwealth Literature* 30.2 (1995): 85–98.
- Zongo, Opportune Marie C. “Body Politics: Representing the Body in *Le Vieux Nègre et la Médaille*, *The Beautiful Ones Are Not Yet Born*, and *Une Si Longue Lettre*.” *DAI* 53 (1993): 2366 A–67 A. U of California, Santa Cruz.

#### 4. Tsitsi Dangarembga

##### a. Works by Tsitsi Dangarembga

###### (1) Works of Fiction

- She No Longer Weeps*. Harare, ZimBabwe: College, 1987. (play)
- Nervous Conditions*. London: Women’s, 1988. (novel)
- Neria*. Dir. Godwin Mawuru. ZimBabwe, 1992. (film)

###### (2) Interviews

- “Women Write about the Things that Move Them’: A Conversation with Tsitsi Dangarembga.” *Matatu* 3.6 (1989): 101–8. Rpt. in *Moving beyond Boundaries, II: Black Women’s Diasporas*. Ed. Carole Boyce Davies. New York: New York UP, 1994. 27–31.
- “Tsitsi Dangarembga.” *Talking with African Writers: Interviews with African Poets, Playwrights and Novelists*. Ed. Jane Wilkinson. Studies in African Literature. London: Currey, 1992. 189–200.
- “An Interview with Tsitsi Dangarembga.” *Novel* 26.3 (1993): 309–19.
- “Between Gender, Race and History: Kirsten Holst Petersen Interviews Tsitsi Dangarembga.” *Kunapipi*.16.1 (1994): 345–8.
- “Interview with Tsitsi Dangarembga.” *African Literature Association Bulletin* 23.2 (1997): 11–6.

##### b. Works on Tsitsi Dangarembga

- Stummer, Peter O., and Balme Christopher, eds. *Fusion of Cultures? ASNEL Papers 2; Cross/Cultures 26*. Amsterdam, Netherlands; Atlanta, GA : Rodopi, 1996. (D. Dangarembga と G. Head の項のみ相互引照)
- Aegerter, Lindsay Pentolfe. “A Dialectic of Autonomy and Community: Tsitsi Dangarembga’s *Nervous*

- Conditions.*" *Tulsa Studies in Women's Literature* 15.2 (1996): 231–40.
- Bahri, Deepika. "Disembodying the Corpus: Postcolonial Pathology in Tsitsi Dangarembga's *Nervous Conditions.*" *Postmodern Culture* 5.1 (1994): 26 paragraphs.
- Bardolph, Jacqueline. "'The Tears of Childhood' of Tsitsi Dangarembga." *Commonwealth Essays and Studies* 13.1 (1990): 37–47.
- Basu, Biman. "Trapped and Troping: Allegories of the Transnational Intellectual in Tsitsi Dangarembga's *Nervous Conditions.*" *ARIEL*. 28.3 (1997): 7–24.
- Bosman, Brenda. "A Correspondence without Theory: Tsitsi Dangarembga's *Nervous Conditions.*" *Current Writing* 2.1 (1990): 91–100.
- Burke, Timothy, and Deepika Bahri (rejoinder). "Response to Deepika Bahri's Essay, 'Disembodying the Corpus: Postcolonial Pathology in Tsitsi Dangarembga's *Nervous Conditions.*'" *Postmodern Culture* 5.2 (1995): 8 paragraphs.
- Coundouriotis, Eleni. "Tsitsi Dangarembga." Parekh and Jagne 118–22.
- Creamer, Heidi. "An Apple for the Teacher? Femininity, Coloniality, and Food in *Nervous Conditions.*" *Kunapipi*.16.1 (1994): 349–60
- Flockemann, Miki. "'Not-Quite Insiders and Not-Quite Outsiders': The 'Process of Womanhood' in *Beka Lamb*, *Nervous Conditions* and *Daughters of the Twilight.*" *The Journal of Commonwealth Literature* 27.1 (1992): 37–47.
- Galle, Etienne. "Indigenous Embedments in Europhone African Literature." *Commonwealth Essays and Studies* 14.1 (1991): 16–20.
- Gorle, Gilian. "Fighting the Good Fight: What Tsitsi Dangarembga's *Nervous Conditions* Says about Language and Power." *Yearbook of English Studies* 27 (1997): 179–92.
- Harting, Heike. "The Profusion of Meanings and the Female Experience of Colonisation: Inscriptions of the Body as Site of Difference in Tsitsi Dangarembga's *Nervous Conditions* and Margaret Atwood's *The Edible Woman.*" Stummer and Christopher 237–46.
- Hill, Janice E. "Purging a Plate Full of Colonial History: The 'Nervous Conditions' of Silent Girls." *College Literature* 22.1 (1995): 78–90.
- Lederer, Mary Susan. "Becoming a Prophet: Representations of Madness in Bessie Head's Novels." *DAI* 57 (1996): 677 A. U of California, Los Angeles.
- McWilliams, Sally. "Tsitsi Dangarembga's *Nervous Conditions*: At the Crossroads of Feminism and Post-Colonialism." *World Literature Written in English* 31.1 (1991): 103–12.
- Nair, Supriya. "Melancholic Women: The Intellectual Hysteric(s) in *Nervous Conditions.*" *Research in African Literatures* 26.2 (1995): 130–9.
- Phillips, Maggi. "Engaging Dreams: Alternative Perspectives on Flora Nwapa, Buchi Emecheta, Ama Ata Aidoo, Bessie Head, and Tsitsi Dangarembga's Writing." *Research in African Literatures* 25.4 (1994): 89–103.
- Sugnet, Charles. "*Nervous Conditions*: Dangarembga's Feminist Reinvention of Fanon." Nnaemeka, *Politics* 33–49.
- Thomas, Sue. "Killing the Hysteric in the Colonized's House: Tsitsi Dangarembga's *Nervous Conditions.*" *The Journal of Commonwealth Literature* 27.1 (1992): 26–36.
- Torti, Carola, Karin Kilb, and, Mark Stein. "Groping for Coherence: Patriarchal Constraints and Female

Resistance in Tsitsi Dangarembga's *Nervous Conditions*." Stummer and Christopher 247–54.

Uwakweh, Pauline Ada. "Debunking Patriarchy: The Liberational Quality of Voicing in Tsitsi Dangarembga's *Nervous Conditions*." *Research in African Literatures* 26.1 (1995): 75–84.

Vizzard, Michelle. "'Of Mimicry and Woman': Hysteria and Anticolonial Feminism in Tsitsi Dangarembga's *Nervous Conditions*." *SPAN* 36 (1993): 202–10.

## 5. Assia Djébar

### a. Works by Assia Djébar

#### (1) Works of Fiction

*La soif*. Paris: Julliard, 1957.

*Les impatients*. Paris: Julliard, 1958.

*Les enfants du nouveau monde*. Paris: Julliard, 1962.

*Les alouettes naïves*. Paris: Julliard, 1967.

*Poèmes pour l'Algérie heureuse*. Algiers: SNED, 1969.

*Rouge l'aube*. Algiers: SNED, 1969 (1960). (play)

*Les femmes d'Alger dans leur appartement*. Paris: Éditions des Femmes, 1980. (short stories)

*Women of Algiers in Their Apartment*. Trans. Marjolijn de Jager. Charlottesville: UP of Virginia, 1992.

*L'Amour, la fantasia*. Paris: J. C. Lattes, 1985.

*Fantasia: An Algerian Cavalcade*. Trans. Dorothy S. Blair. London: Quartet, 1989.

*Ombre sultane*. Paris: J. C. Lattes, 1987.

*A Sister to Scheherazade*. Trans. Dorothy S. Blair. London: Quartet, 1987.

*Loin de Médine*. Paris: Albin Michel, 1991.

*Far from Madina*. Trans. Dorothy S. Blair. London: Quartet, 1994.

*Vaste est la prison*. Paris: Albin Michel, 1995.

*Le blanc de l'Algérie*. Paris: Albin Michel, 1995.

#### (2) Films

*La Nouba des femmes du Mont Chenoua*. 1979.

*La Zerda et les chants de l'oubli*. 1982.

#### (3) Essays

"A Noted Algerian Writer Presents Her Views of Muslim Women Today." *UNESCO Courier* Aug.–Sept. 1975: 23–25.

*Chronique d'une été algérien*. Paris: Éditions Plume, 1993. (essays and photographs)

*Women of Islam*. London: Deutsch, 1961.

#### (4) Interviews

"'When the Past Answers Our Present': Assia Djébar Talks about *Loin de Médine*." *Callaloo* 16.1 (1993): 116–31.

#### (5) Others

Translation with Assia Trabelsi and Preface. *Une voix de l'enfer*. By Nawal El Saadawi. Paris: Éditions des femmes, 1982.

**b. Works on Assia Djébar**

- Harrow, Kenneth W. ed. *The Marabout and the Muse: New Approaches to Islam in African Literature*. Studies in African Literature. Portsmouth, NH : Heinemann, 1996. (Djébar の項のみ相互参照)
- Abdel Jaouad, Hédi. "L'Amour, la fantasia: Autobiography as Fiction." *Revue Celfan/Celfan Review* 7.1-2 (1987-1988): 25-9.
- Accad, Evelyne. "Assia Djébar's Contribution to Arab Women's Literature: Rebellion, Maturity, Vision." *World Literature Today* 70.4 (1996): 801-12.
- Ahnouch, Fatima. "Assia Djébar: The Song of Writing." Trans. Pamela A. Genova. *World Literature Today* 70.4 (1996): 795-7.
- Ascarza Wegimont, Marie. "Djébar's *Ombre sultane*." *Explicator* 55.1 (1996): 55-7.
- Bensmaïa, Reda. "*La Nouba des femmes du Mont Chenoua*: Introduction to the Cinematic Fragment." Trans. Jennifer Curtiss Gage. *World Literature Today* 70.4 (1996): 877-84.
- Budig-Markin, Valerie. "Writing and Filming the Cries of Silence." *World Literature Today* 70.4 (1996): 893-904.
- Cooke, Miriam. "Arab Women Arab Wars." *Cultural Critique* 29 (1994-1995): 5-29.
- Dib, Mohammed. "Assia Djébar, or Eve in Her Garden." Trans. Pamela A. Genova. *World Literature Today* 70.4 (1996): 788.
- Dobie, Madeleine. "The Woman as Look and the Woman as Voice: Assia Djébar and Leïla Sebbar." *Constructions* 9 (1994): 89-105.
- Donadey, Anne. "Assia Djébar's Poetics of Subversion." *L'Esprit Créateur* 33.2 (1993): 107-17.
- . "Polyphonic and Palimpsestic Discourse in the Works of Assia Djébar and Leïla Sebbar." *DAI* 54 (1993): 1821 A. Northwestern U.
- . *Polyphonic and Palimpsestic Discourse in the Works of Assia Djébar and Leïla Sebbar*. Ann Arbor: Univ. Microfilms International. 1993.
- . "Rekindling the Vividness of the Past: Assia Djébar's Films and Fiction." *World Literature Today* 70.4 (1996): 885-92.
- Erickson, John. "Women's Space and Enabling Dialogue in Assia Djébar's *L'Amour, la fantasia*." Green et al 304-20.
- Faulkner, Rita A. "Assia Djébar, Frantz Fanon, Women, Veils, and Land." *World Literature Today* 70.4 (1996): 847-55.
- Frischmuth, Barbara. "A Letter to Assia Djébar." Trans. William Riggan. *World Literature Today* 70.4 (1996): 778-80.
- Gafaiti, Hafid. "The Blood of Writing: Assia Djébar's Unveiling of Women and History." *World Literature Today* 70.4 (1996): 813-22.
- Gass, William. "Encomium for Assia Djébar, 1996 Neustadt Prize Laureate." *World Literature Today* 70.4 (1996): 781-2.
- Geesey, Patricia. "Collective Autobiography: Algerian Women and History in Assia Djébar's *L'Amour, la fantasia*." *Dalhousie French Studies* 35 (1996): 153-67.
- . "Women's Words: Assia Djébar's *Loin de Médine*." Harrow 40-50.
- Ghaussy, Soheila. "A Stepmother Tongue: 'Feminine Writing' in Assia Djébar's *Fantasia*: An Algerian Cavalcade." *World Literature Today* 68.3 (1994): 457-62.
- Goodman, Joanna. "L'Écrit et le cri: Giving Voice in Assia Djébar's *L'Amour, la Fantasia*." *Edebiyat* 6.1 (1995):

1-19.

- Gracki, Katherine. "Writing Violence and the Violence of Writing in Assia Djébar's Algerian Quartet." *World Literature Today* 70.4 (1996): 835-43.
- Green, Mary Jean. "Dismantling the Colonizing Text: Anne Hebert's Kamouraska and Assia Djébar's *L'Amour, la fantasia*." *The French Review* 66.6 (1993): 959-66.
- Guyot Bender, Martine. "Harmony and Resistance in *L'Amour, la fantasia*'s Algerian Women's Communities." *Homemaking: Women Writers and the Politics and Poetics of Home*. Ed. Catherine Wiley and Fiona R. Barnes. Gender and Genre in Literature 8. New York: Garland, 1996. 175-99.
- Huughe, Laurence. "'Écrire comme un voile': The Problematics of the Gaze in the Work of Assia Djébar." Trans. Jennifer Curtiss Gage. *World Literature Today* 70.4 (1996): 867-76.
- Jager, Marjolijn de. "Translating Assia Djébar's *Femmes d'Alger dans leur appartement*: Listening for the Silence." *World Literature Today* 70.4 (1996): 856-8.
- Kelley, David. "Assia Djébar: Parallels and Paradoxes." *World Literature Today* 70.4 (1996): 844-6.
- Khodja, Soumya Ammar. "For Assia Djébar, Inspired by Her Book." Trans. Pamela A. Genova. *World Literature Today* 70.4 (1996): 793-4.
- Lang, George. "Jihad, Ijtihad, and Other Dialogical Wars in *La Mère du printemps*, *Le Harem politique*, and *Loin de Médine*." Harrow 1-22.
- Lauten, Kathryn M. "Discontinuous Continuities in Assia Djébar's *L'Amour la fantasia*." *Cincinnati Romance Review* 16 (1997): 101-8.
- . "Ex-hum(anize)/Re-hum(aniz)e: Disturbing Bodies in 'Post-Colonial' Francophone Literature and Film." *DAI* 58 (1997): 453 A. U of Michigan.
- Lee, Sonia. "Daughters of Hagar: Daughters of Muhammad." Harrow 51-61.
- Lionnet, Françoise. "'Logiques métisses': Cultural Appropriation and Postcolonial Representations." *College Literature* 19.3-20.1 (1992-1993): 100-20.
- Marx-Scouras, Danielle. "Muffled Screams/Stifled Voices." *Yale French Studies* 82 (1993): 172-82.
- Merini, Rafika. "The Subversion of the Culture of Voyeurism in the Works of Leila Sebbar and Assia Djébar: A Socio-Literary Study." *DAI* 53 (1993): 2804 A. State U of New York, Binghamton.
- . *Two Major Francophone Women Writers: Assia Djébar and Leila Sebbar*. Francophone Cultures and Literatures Ser. 5. New York: Lang, 1995.
- Mortimer, Mildred. *Assia Djébar*. Celfan Edition Monographs. Philadelphia: CELFAN Editions, 1988.
- . "Assia Djébar's Algerian Quartet: A Study in Fragmented Autobiography." *Research in African Literatures* 28.2 (1997): 102-17.
- . "Language and Space in the Fiction of Assia Djébar and Leila Sebbar." *Research in African Literatures* 19.3 (1988): 301-11.
- . "Reappropriating the Gaze in Assia Djébar's Fiction and Film." *World Literature Today* 70.4 (1996): 859-66.
- . "Women's Voice." *Journeys through the French African Novel*. Portsmouth, NH: Heinemann, 1990.
- Murdoch, [H.] Adlai. "Rewriting Writing: Identity, Exile and Renewal in Assia Djébar's *L'Amour, la fantasia*." *Yale French Studies* 83 (1993): 71-92.
- Nolin, Corinne M. "Intellectuels et pouvoir au Maghreb: Thématiques de l'exil et de la subversion." *DAI* 56 (1995): 956 A. Northwestern U.

- Orlando, Valerie Key. "Beyond Postcolonial Discourse: New Problematics of Feminine Identity in Contemporary Francophone Literature." *DAI* 57 (1997): 3931–2 A. Brown U.
- Page, Andrea. "Rape or Obscene Copulation?: Ambivalence and Complicity in Djébar's *L'Amour, la fantasia*." *Women in French Studies* 2 (1994): 42–54.
- Tahon, Marie-Blanche. "Women Novelists and Women in the Struggle for Algeria's National Liberation." *Research in African Literatures* 23.2 (1992): 39–51.
- Turk, Nada [Osman]. "Assia Djébar: Solitaire solidaire: Une étude de la lutte des Algériennes pour les libertés individuelles, dans l'œuvre romanesque d'Assia Djébar." *DAI* 49 (1988): 504 A. U of Colorado.
- Vogl, Mary B. "Assia Djébar." Parekh and Jagne 135–43.
- Woodhull, Winifred. "Algeria Unveiled." *Genders* 10 (1991): 112–31.
- . "Feminism and Islamic Tradition." *Studies in Twentieth-Century Literature* 17.1 (1993): 27–44.
- . *Transfigurations of the Maghreb: Feminism, Decolonization, and Literatures in French*. Minneapolis: U of Minnesota P, 1993.
- World Literature Today* 70.4 (1996). Special issue on Assia Djébar. Subtitled Assia Djébar: 1996 Neustadt International Prize for Literature. Ed. and Intro. Djelal Kadir.
- Zimra, Clarisse. "Disorienting the Subject in Djébar's *L'Amour, la fantasia*" *Another Look, Another Woman: Retranslations of French Feminism*. Ed. Lynne Huffer. Yale French Studies 87. Binghamton, NY: Vail Ballou, 1995. 149–70.
- . "Not So Far from Medina: Assia Djébar Charts Islam's 'Insupportable Feminist Revolution'" *World Literature Today* 70.4 (1996): 823–34.
- . "Writing Women: The Novels of Assia Djébar." *SubStance* 21.3 (1992): 68–84.

## 6. Buchi Emecheta

### a. Works by Buchi Emecheta

#### (1) Works of Fiction

- In the Ditch*. London: Barrie, 1972. New York: Schocken, 1980.
- The Second-Class Citizen*. London: Allison; New York: Braziller, 1975.
- The Bride Price*. London: Allison; New York: Braziller, 1976.
- The Slave Girl*. London: Allison; New York: Braziller, 1977.
- The Joys of Motherhood*. London: Allison; New York: Braziller, 1979.
- "Nostalgia." *Africa Woman* 19 (1979): 30. (poetry)
- Titch the Cat*. With Alice Onwordi. London: Allison, 1979. (Children's Literature)
- Nowhere to Play*. London: Allison, 1979. (Children's Literature)
- The Moonlight Bride*. London: Oxford UP, 1980. New York: Braziller, 1983. (Juvenile Literature)
- The Wrestling Match*. London: Oxford UP, 1980. New York: Braziller, 1983. (Juvenile Literature)
- Naira Power*. London: Macmillan, 1982. (Juvenile Literature)
- Destination Biafra*. London: Allison; New York: Braziller, 1982.
- Double Yoke*. London: Ogwugwu Afor, 1982. New York: Braziller, 1983.
- The Rape of Shavi*. London: Ogwugwu Afor, 1983. New York: Braziller, 1985.
- Ada's Story (In the Ditch and Second-Class Citizen)*. London: Allison, 1983.

*A Kind of Marriage*. London: Macmillan, 1986. (Juvenile Literature)  
*Gwendolen*. London: Collins, 1989. Rpt. as *The Family*. New York: Braziller, 1990.  
*Kehinde*. London: Heinemann, 1994.

(2) **Performed Plays**

“A Kind of Marriage.” B.B.C. Radio and Television.  
 “The Juju Landlord.” B.B.C. Radio.  
 “Tanya, a Black Woman.” B.B.C. Radio.  
 “Family Bargain.” B.B.C. Radio, 1987.

(3) **Autobiography**

*The Head Above Water*. London: Fontana, 1986.

(4) **Speeches**

“Building on Tradition: Can the Past Provide Direction for the Future?” Women and Work Symposium 6, University of Illinois, Urbana, 29 Apr. 1979.  
 “Tradition vs Modernism in Nation Building.” Graduate School of Public and International Affairs, U of Pittsburgh, Pennsylvania, 3 May 1979.  
 “The Problem that an African Novelist Faces in the Publishing World.” Department of Black Studies, U of Pittsburgh, Pennsylvania, 4 May 1979.  
 “Discussion of *The Rape of Shavi*.” Workshop on Commonwealth Women Novelists, Commonwealth Inst., London, 7 Jan. 1984.  
 “Speech for the Feminist Book Week.” Pimlico Library, London, 13 June 1984.

(5) **Essays**

“Buchi’s Social Column — Marriage Does It Pay?” *African Weekly Review* 20 Oct. 1967: 12.  
 “Should HusBands Control a Wife’s Salary?” *African Weekly Review* 1.3 (1967): 8.  
 “Mixed Marriage.” *African Weekly Review* 1.17 (1968): 13.  
 “Introduction and Comments.” *Our Own Freedom*. With Maggie Murray. London: SheBa Feminist, 1981.  
 Review of *Staying Power: This History of Black People in Britain*, by Peter Fryer. *New Society* 24 May 1984: 323.  
 “Nigeria — the Woman as a Writer.” *Realities* spring 1985: 1+  
 “African Women Step Out.” *New African* 1 Nov. 1985: 7–8.  
 “Education: US.” *Women: A World Report*. New York: Oxford UP, 1985. 205–18.  
 “Feminism with Small ‘f!’” *Criticism and Ideology: Second African Writers Conference, Stockholm, 1986*. Ed. Kirsten Holst Petersen. Uppsala, Sweden: Scandinavian Inst. of African Studies, 1988. 173–85.  
 “Nwayi Oma, Biko Nodu Nma” (Beautiful woman, please farewell). *West Africa* 24–30 Oct. 1994:1831.

(6) **Autobiographical Essays**

“Out of the Ditch into Print.” *West Africa* 3 Apr. 1978: 669–72.  
 “An African View of Church of England.” *West Africa* 24 Apr. 1978: 805–6.  
 “The Human Race Decides to March through London.” *West Africa* 19 June 1978: 1177–80.  
 “A Time Bomb.” *West Africa* 30 Oct. 1978: 2139–40.  
 “Through West African Eyes.” *CMS Magazine* Oct.–Dec. 1978: 18–9.  
 “Give Us This Day and Our Daily Bread.” *West Africa* 4 Dec. 1978: 2410–1.

- “Christmas Is for All.” *West Africa* 25 Dec. 1978: 2590–1.
- “Buchi Emecheta Goes Jogging.” *West Africa* 12 Mar. 1979: 444–5.
- “A Writer’s Day.” *New Fiction* 20 (1979): 119–20.
- “Another Fear of Flying.” *West Africa* 25 June 1979: 119–20.
- “Darry and Bouquet of Flowers.” *West Africa* 9 July 1979: 1215–6.
- “Language Difficulties.” *West Africa* 16 July 1979: 1215–6.
- “A Question of Dollars.” *West Africa* 30 July 1979: 1367–8.
- “US Longing for Roasted Yams.” *West Africa* 27 Aug. 1979: 1560–2.
- “US Police Convince Me I Am Lost.” *West Africa* 24 Sept. 1979: 1761–2.
- “What the Carol Singers Are Missing.” *West Africa* 24-31 Dec. 1979: 2385–6.
- “A Week of Ghana.” *West Africa* 13 Oct. 1980: 2015–6.
- “Calabar Contrasts and Complaints.” *West Africa* 12 Jan. 1981: 71–2.
- “Lagos Provides a Warm Welcome.” *West Africa* 19 Jan. 1981: 110+.
- “African Woman.” *Root* Aug. 1981: 22+
- “Simpler than Sociology.” *West Africa* 10 Aug. 1981: 1813–4.
- “Nigeria: Experiencing a Cultural Lag.” *West Africa* 2 Nov. 1981: 2582–3.
- “A Nigerian Writer Living in London.” *Kunapipi* 4.1 (1982): 114–23.
- “Women of Pittsburgh.” *Root* Feb. 1982: 14+
- “Black and a Woman.” *New Society* July 1984.

(7) Interviews

- “Two Faces of Emancipation.” *Africa Woman* Jan. 1976: 48–9.
- “Matchet’s Diary: Buchi Emecheta.” *West Africa* 6 Feb. 1978: 238–9.
- Interview. *West Africa* 3 Apr. 1978: 671.
- “A Worshipper from Afar.” *Punch* (Nigeria) 17 May 1979.
- “Buchi Emecheta: Africa from a Woman’s View.” *Essence* Feb. 1980: 12+.
- “Two Nigerian Women Writers.” *Centerpoint* 3.9 (1981).
- “It’s Me Who’s Changed.” *Opzij* (Amsterdam) Sept. 1981
- “Feminism with a Small ‘f.’” *The Leveller* 30 Oct. 1981: 15.
- Conversations with African Writers: Interviews with Twenty-six African Authors.* Ed. Lee Nichols. Washington D.C.: Voice of America, 1981.
- “Buchi Emecheta.” *Happy Home* Mar. 1982: 4+
- “Nefertiti’s New Clothes.” *Voice Literary Supplement* June 1982: 13–4.
- “Interview with Buchi Emecheta.” *Marxism Today* May 1983: 34–5.
- “A Room of My Own: Buchi Emecheta.” *Observer* 25 Mar. 1984: 46–7.
- “Buchi Emecheta at Spelman College.” *Sage* 2.1 (1985): 50–1.
- “An Interview with Buchi Emecheta.” *Ba Shiru* 12.2 (1985): 19–25.
- “Women and Empowerment: Interview with Buchi Emecheta.” *Ufahamu* 16.2 (1988): 93–100.
- “Buchi Emecheta.” *James* 35–46.
- “Buchi Emecheta.” Videocassette. Guardian Conversations Ser. East Sussex, U.K.: Rolland, n.d.
- “Buchi Emecheta: An African Story-Teller.” By Daphne Topouzis. *Africa Report* 35.2 (May–June 1990): 67–

70.

“A Writer Who Seeks To Reconcile Two Worlds.” *The New York Times* 2 June 1990.

“Interview with Buchi Emecheta.” *Interviews with Writers of the Post-Colonial World*. Ed. Feroza Jussawalla and Reed Way Dasenbrock. Jackson: U of Mississippi P, 1992. 82–91.

“Conversation with Buchi Emecheta.” *The Independent* Sept.–Oct. 1993: 19–2

“Conversation with Buchi Emecheta.” *Gender Issues in Nigeria: A Feminine Perspective*. T. Akachi Ezeigbo. Lagos, Nigeria: Vista, 1996. 95–105.

(8) Others

“The Extraordinary People Show: Buchi Emecheta.” B.B.C. Television Show, 1981.

“In the Light of Experience: Buchi Emecheta.” B.B.C. Television Show, 1983.

b. Works on Buchi Emecheta

Emenyonu, Ernest N., ed. *Critical Theory and African Literature*. Calabar Studies in African Literature 3. Ibadan, Nigeria: Heinemann Educational (Nigeria), 1987. (Emecheta の項のみの相互引照)

Allan, Tuzyline J. “Feminist and Womanist Aesthetics: A Comparative Study.” *DAI* 51 (1991): 3403 A. State U of New York, Stony Brook.

———. “*The Joys of Motherhood*: A Study of a Problematic Womanist Aesthetic.” *Womanist and Feminist Aesthetics: A Comparative Review*. Athens: Ohio UP, 1995. 95–117.

Andrade, Susan Z. “The Joys of Daughterhood: Gender, Nationalism, and the Making of Literary Tradition(s).” *Cultural Institutions of the Novel*. Ed. Deidre Lynch and William B. Warner. Durham, NC: Duke UP, 1996. 249–75.

———. “Rewriting History, Motherhood, and Rebellion: Naming an African Women’s History Literary Tradition.” *Research in African Literatures* 21.2 (1990): 91–110.

Asanbe, Joseph. “Context of Writer and Audience: Nwapa and Emecheta.” *LARES* 6–7 (1984–5): 186–96.

Barthelemy, Anthony. “Western Time, African Lives: Time in the Novels of Buchi Emecheta.” *Callaloo* 12.3 (1989): 559–74.

Bazin, Nancy Topping. “Feminist Perspectives in African Fiction: Bessie Head and Buchi Emecheta.” *Black Scholar* 17.2 (1986): 34–40.

———. “Weight of Custom, Signs of Change: Feminism in the Literature of African Women.” *World Literature Written in English* 25.2 (1985): 183–97.

Birch, Eva Lennox. “Autobiography: The Art of Self-Definition.” *Wisker* 127–45.

Brodzki, Bella. “‘Changing Masters’: Gender, Genre, and the Discourse of Slavery.” *Borderwork: Feminist Engagements with Comparative Literature*. Ed. Margaret R. Higonnet. Reading Women Writing. Ithaca: Cornell UP, 1994. 42–60.

Bruner, Charlotte. “The Other Audience: Children and the Example of Buchi Emecheta.” *The African Studies Review* 29.3 (1986): 129–40.

Bruner, Charlotte, and David Bruner. “Buchi Emecheta and Maryse Condé: Contemporary Writing from Africa and the Caribbean.” *World Literature Today* 59.1 (1985): 9–13.

Choi, Kyeong-Hee. “When the Colonized Mother Speaks: Post-Colonial and Maternal Narratives of Toni Morrison, Pak Wanso, and Buchi Emecheta.” *DAI* 57 (1997): 5148 A. Indiana U.

Christian, BarBara. “An Angle of Seeing: Motherhood in Buchi Emecheta’s *The Joys of Motherhood* and Alice

- Walker's *Meridian*." *Black Feminist Criticism*. New York: Pergamon, 1985. 211–52.
- Chukwuma, Helen. "Positivism and the Female Crisis: The Novels of Buchi Emecheta." Otokunefor and Nwodo 2–18.
- Cobham-Sandra, Rhonda. "Class vs Sex: The Problems of Values in the Modern Nigerian Novel." *The Black Scholar* 17.4 (1986): 17–27.
- Cooper, Helen. "Bessie Head and Buchi Emecheta: Voyagers." *Matatu* 11 (1994): 71–80.
- Davies, Carole Boyce. "Motherhood in the Works of Male and Female Igbo Writers: Achebe, Emecheta, Nwapa and Nzekwu." Davies and Graves 241–256.
- . "Private Selves and Public Spaces: Autobiography and the African Woman Writer." *College Language Association* 34.3 (1991): 267–89. Rpt. in *Criss-crossing Boundaries in African Literature, 1986*. Ed. Kenneth Harrow, et al. Washington D.C.: Three Continents, 1991. 109–27.
- Davis, Christina. "Mother and Writer: Means of Empowerment in the Work of Buchi Emecheta." *Commonwealth Essays and Studies* 13.1 (1990): 13–21.
- Diouf Kandji, Fatou. "Female Sexuality in Buchi Emecheta's Writings." *Bridges* 6 (1995): 11–27.
- Ebeogu, Afam. "Enter the Iconoclast: Buchi Emecheta and the Igbo Culture." *Commonwealth Essays and Studies* 7.2 (1985): 83–94.
- Emanuel George, Juliet. "The Quieted Voice in Multiculturalism: A Study of the Shifted Self in the Works of the Post-Colonial Writers Rhys, Riley, Emecheta, and Cliff." *DAI* 58 (1998): 4660 A. St. John's U.
- Ezeigbo, Theodora Akachi. "Traditional Women's Institutions in Igbo Society: Implications for the Igbo Female Writer." *African Languages and Cultures* 3.2 (1990): 149–65.
- Ezenwa Ohaeto. "Emecheta's Teenage Fiction: The Individual and Communal Values in *The Wrestling Match* and *The Moonlight Bride* ." *Commonwealth Essays and Studies* 13.1 (1990): 22–7.
- Fido, Elaine Savory. "Mother/lands: Self and Separation in the Work of Buchi Emecheta, Bessie Head and Jean Rhys." *Nasta* 330–49.
- Fishburn, Catherine. *Reading Buchi Emecheta: Cross-Cultural Conversations*. Contributions to the Study of World Literature 61. Westport, CT : Greenwood, 1995.
- Flewellen, Elinor C. "Assertiveness vs. Submissiveness in Selected Works by African Women Writers." *Ba Shiru* 12.2 (1985): 3–18.
- Frank, Katherine. "Women Without Men: The Feminist Novel in Africa." *African Literature Today* 15 (1987): 14–34.
- Gohrisch, Jana. "Crossing the Boundaries of Cultures: Buchi Emecheta's Novels." *Anglistik und Englischunterricht* 60 (1997): 129–42.
- Hooper, Lita. "A Black Feminist Critique of *The Bride Price* and *The Bluest Eye*." *Journal of African Children's and Youth Literature* 6 (1994–1995): 74–81.
- Hunter, Eva. "'What Exactly Is Civilisation?' 'Africa', 'The West', and Gender in Buchi Emecheta's *The Rape of Shavi*." *English Studies in Africa* 37.1 (1994): 47–61.
- Iyer, Lisa H. "The Second Sex Three Times Oppressed: Cultural Colonization and Coll(i)u(sion in Buchi Emecheta's Women." *Readerly Writerly Texts* 1.2 (1994): 97–114. Rpt. in *Writing the Nation: Self and Country in the Post-Colonial Imagination*. Ed. John C. Hawley. Critical Studies 7. Amsterdam: Rodopi, 1996. 123–38.
- Katrak, Ketu H. "Womanhood/Motherhood: Variations on a Theme in Selected Novels of Buchi Emecheta."

- The Journal of Commonwealth Literature* 22.1 (1987): 159–170.
- Kemp, Yakini. “Romantic Love and the Individual in Novels by Mariama Ba, Buchi Emecheta and Bessie Head.” *Obsidian II* 3.3 (1988): 1–16.
- Kenyon, Olga. “Alice Walker and Buchi Emecheta Rewrite the Myth of Motherhood.” *Forked Tongues? Comparing Twentieth-Century British and American Literature*. Ed. Ann Massa and Alistair Stead. London: Longman, 1994. 336–54.
- King, Bruce. “The New Internationalism: Shiva Naipaul, Salman Rushdie, Buchi Emecheta, Timothy Mo and Kazuo Ishiguro.” *The British and Irish Novel Since 1960*. Ed. James Acheson. New York: St. Martin’s, 1991. 192–211.
- Lewis, Desiree. “Myths of Motherhood and Power: The Construction of ‘Black Woman’ in Literature.” *English in Africa* 19.1 (1992): 35–51.
- Martini, Jurgen. “Linking Africa and the West: Buchi Emecheta.” *Festschrift zum 60.Geburtstag von Carl Hoffmann*. Ed. Franz Rottland. Hamburg: Buske, 1986. 223–33.
- Mezu, Rose Ure. “Buchi Emecheta’s *The Bride Price* and *The Slave Girl*: A Schizoanalytic Perspective.” *ARIEL* 28.1 (1997): 131–46.
- Nnaemeka, Obioma. “Feminist Protest in Buchi Emecheta’s Novels.” *International Third World Studies Journal and Review* 1.1 (1989): 1–10.
- . “From Orality to Writing: African Women Writers and the (Re) Inscription of Womanhood.” *Research in African Literatures* 25.4 (1994): 137–57.
- Newman, Judie. “‘He Neo-Tarzan, She Jane?’: Buchi Emecheta’s *The Rape of Shavi*.” *College English* 22.1 (1995): 161–70.
- Nwankwo, Chimalum. “Emecheta’s Social Vision: Fantasy or Reality?” *Ufahamu* 17.1 (1988): 35–44.
- Onyememi, Chikwenye O. “The Nigerian Female Novelist and the Feminist Encounter.” Paper presented at the Conference on the Black Women Writer and the Diaspora at Michigan State U, 27–30 Oct. 1985.
- . “Womanism: The Dynamics of the Contemporary Black Female Novel in English.” *Signs* 11.1 (1985): 63–80. Rpt. in *Revising the Word and the World: Essays in Feminist Literary Criticism*. Ed. Veve A. Clark, Ruth-Ellen B. Joeres and Madelon Sprengnether. Chicago: U of Chicago, 1993.
- Ojo-Ade, Femi. “Women and the Nigerian Civil War: Buchi Emecheta and Flora Nwapa.” *Etudes Germano-Africaines* 6 (1988): 75–86.
- Oko, Emelia. “The Female Estate: A Study of the Novels of Buchi Emecheta.” *Adebayo* 91–109.
- Oku, Juliana Inyang Essien. “Courtesans and Earthmothers: A Feminist Reading of Ekwensi’s *Jagua Nana’s Daughter* and Buchi Emecheta’s *The Joys of Motherhood*.” *Emenyonu* 225–33.
- Onwuhara, Kate. “The Tension of Two Cultures: Ambivalence in Buchi Emecheta’s Feminism.” *Emenyonu* 207–13.
- Opara, Chioma. “Clothing as Iconography: Examples of Bâ, Aidoo, and Emecheta.” *Adebayo* 110–25.
- Oriaku, Remy. “Buchi Emecheta: If Not a Feminist, Then What?” *Adebayo* 72–90.
- Petersen, Kirsten Holst. “Unorthodox Fictions about African Women.” *International Literature in English: Essays on the Major Writers*. Ed. Robert L. Ross. Garland Reference Library of the Humanities 1159. New York: Garland, 1991. 283–92.
- . “Unpopular Opinions: Some African Women Writers.” *Kunapipi* 7.2–3 (1985). Rpt. in *A Double Colonization: Colonial and Post-Colonial Women’s Writing*. Ed. Petersen and Anna Rutherford.

- Mundelstrup, Denmark: Dangaroo, 1986. 107–20.
- Phillips, Maggi. “Engaging Dreams: Alternative Perspectives on Flora Nwapa, Buchi Emecheta, Ama Ata Aidoo, Bessie Head, and Tsitsi Dangarembga’s Writing.” *Research in African Literatures* 25.4 (1994): 89–103.
- Ravell-Pinto, Thelma. “Buchi Emecheta at Spelman College.” *SAGE* 2.1 (1985): 50–1.
- Sample, Maxine J. Cornish. “The Representation of Space in Selected Works by Bessie Head, Buchi Emecheta, and Flora Nwapa.” *DAI* 51 (1990): 1611 A. Emory U.
- Sanders, Alvelyn J. “*The Bride Price* and Are You There God? : It’s Me, Margaret.” *Journal of African Children’s and Youth Literature* 7–8 (1995–1997): 28–38.
- Sarr, Ndiawar. “The Female Protagonist as Part of a Transitional Generation in *The Joys of Motherhood*.” *Bridges* 5.2 (1993): 25–33.
- Slomski, Genevieve. “Dialogue in the Discourse: A Study of Revolt in Selected Fiction by African Women.” *DAI* 47 (1986): 1721 A. Indiana U.
- Sougou, Omar. “The Experience of an African Woman in Britain: A Reading of Buchi Emecheta’s *Second-Class Citizen*.” *Crisis and Creativity in the New Literatures in English: Cross/Cultures*. Ed. Geoffrey V. Davis and Hena Maes Jelinek. Readings in the Post Colonial Literatures in English 1. Amsterdam: Rodopi, 1990. 511–22.
- Staub, Diane, and Lori Bianchini. “NCTE to You.” *College English* 55.3 (1993): 340–7.
- Stratton, Florence. “The Shallow Grave: Archetypes of Female Experience in African Fiction.” *Research in African Literatures* 19.1 (1988): 143–69.
- . “‘Their New Sister’: Buchi Emecheta and the Contemporary African Literary Tradition.” Stratton 108–32.
- Tax, Meredith. “Follow the Reader: Buchi Emecheta’s Text Education.” *Village Voice Literary Supplement* 85 (May 1990): 25.
- Umeh, Marie A. “Children’s Literature in Nigeria: Revolutionary Omissions.” *Preserving the Landscape of Imagination: Children’s Literature in Africa*. Ed. Raoul Granqvist and Jurgen Martini. Atlanta: Editions Rodopi, 1997. 191–206.
- . “A Comparative Study of the Idea of Motherhood in Two Third World Novels.” *College Language Association Journal* 31.1 (1987): 31–43.
- , ed. *Emerging Perspectives on Buchi Emecheta*. Trenton, NJ: Africa World, 1996.
- . “The Poetics of Thwarted Sensitivity.” Emenyonu 194–206.
- . “Reintegration with the Lost Self: A Study of Buchi Emecheta’s *Double Yoke*.” Davies and Graves 173–180.
- Uraizee, Joya Farooq. “‘Is There Nowhere Else Where We Can Meet?’: The Postcolonial Woman Writer and Political Fiction.” *DAI* 56 (1995): 562 A. Purdue U.
- Uwakweh, Pauline Ada. “The Dimensions of Female Militancy in African and African-American Women’s Fiction: Buchi Emecheta, Nawal El-Saadawi, Alice Walker, and Gloria Naylor.” *DAI* 56 (1996): 3574 A. Temple U.
- vanden Driesen, Cynthia. “Doughty Slave-Girls and Slavish Career-Girls: Representations of the West African (Ibo) Female in Selected Works of Emecheta and Achebe.” *SPAN* 36 (1993): 182–92.
- Ward, Cynthia. “What They Told Buchi Emecheta: Oral Subjectivity and the Joys of ‘Otherhood.’” *PMLA*

105.1 (1990): 83–97.

Yongue, Patricia Lee. “‘My Mother Is Here’: Buchi Emecheta’s Love Child.” *Women of Color: Mother-Daughter Relationships in 20th-Century Literature*. Ed. Guillory Elizabeth Brown. Austin, TX: U of Texas P, 1996. 74–94.

## 7. Bessie Head

### a. Works by Bessie Head

#### (1) Works of Fiction

*When Rain Clouds Gather*. New York: Simon, 1968.

*Maru*. London: Gollancz; Heinemann, 1971.

楠瀬佳子訳『マル——愛と友情の物語』学芸書林 1995年

*A Question of Power*. London: Davis-Poynter, 1973.

中村輝子訳『力の問題』学芸書林 1993年

*The Collector of Treasures, and Other Botswana Village Tales*. Oxford: Heinemann, 1977.

酒井格訳『宝を集める人——ボツワナの村の物語』創樹社 1992年

*A Bewitched Crossroad: An African Saga*. Craighall, South Africa: Donker, 1984.

*Tales of Tenderness and Power*. Ed. Gilliam Stead Eilersen. Johannesburg, South Africa: Donker, 1989.  
Oxford: Heinemann, 1990.

くはたのぞみ訳『優しさと力の物語』スリーエーネットワーク 1996年（アフリカ文学叢書）

*The Cardinals: With Meditations and Short Stories*. Ed. M. J. Daymond. Cape Town, South Africa: Philip, 1993.

“Bessie Head: Unpublished Early Poems.” *English in Africa* 23.1 (1996): 40–45.

#### (2) Interviews

“Interview.” *Ms* Sep 1975: 72+

“Conversations with Bessie.” *World Literature Written in English* 17.2 (1978): 427–34.

“Bessie Head, South Africa.” *Conversations with African Writers*. Washington, D.C.: Voice of America, 1981.  
49–57.

“Bessie Head in Garborne, Botswana: An Interview.” *Sage* 3.2 (1986): 44–7.

*Between the Lines: Interviews with Bessie Head, Sheila Roberts, Ellen Kuzwayo, Miriam Tlali*. Ed. Craig MacKenzie and Cherry Clayton. NELM Interviews Ser. 4. Grahamstown, South Africa: National English Literary Museum, 1989

#### (3) Others

*Serowe: Village of the Rain Wind*. Oxford: Heinemann, 1981. (a historical and anthropological record of a village)

*A Woman Alone*. Ed. Craig MacKenzie. Oxford: Heinemann, 1990. (autobiographical essays)

*A Gesture of Belonging: Letters from Bessie Head, 1965–1979*. Ed. Randolph Vigne. London: SA Writers; Portsmouth, NH: Heinemann, 1991.

### b. Works on Bessie Head

#### (1) Bibliography

Giffuni, Cathy. *Bessie Head: A Bibliography*. Gaborne: Botswana National Library Service, 1987. 作品及び研究320項目 Earlier Version in *A Current Bibliography on African Affairs* 19.3 (1986–7).

Mackenzie, Craig, and Catherine Woerber. *Bessie Head: A Bibliography*. Rev. ed. NELM Bibliographic Ser. 1. Grahamstown, South Africa: National English Literary Museum, 1992. 作品77項目 研究598項目 1st ed. By Susan Gardner, 1986.

(2) **Books (1990年以前のものも含む)**

- Abrahams, Cecil, ed. *The Tragic Life: Bessie Head and Literature in Southern Africa*. Trenton: Africa World, 1990.
- Eilersen, Gillian Stead. *Bessie Head: Thunder Behind Her Ears: Her Life and Writing*. Studies in African Literature. Portsmouth, NH: Heinemann; London: Currey; Cape Town: Philip, 1995.
- Ibrahim, Huma. *Bessie Head: Subversive Identities in Exile*. Charlottesville: UP of Virginia, 1996.
- 楠瀬佳子 『ベッシー・ヘッド 拒絶と受容の文学——アパルトヘイトを生きた女たち』 第三書館 1999年
- MacKenzie, Craig. *Bessie Head: An Introduction*. NELM Introduction Ser. 1. Grahamstown, South Africa: National English Literary Museum, 1989
- Ola, Virginia Uzoma. *The Life and Works of Bessie Head*. Lewiston, NY: Mellen, 1994.
- Olaussen, Maria. *Forceful Creation in Harsh Terrain: Place and Identity in Three Novels by Bessie Head*. European University Studies. Ser. 14, Anglo-Saxon Language and Literature, Vol. 325; Europäische Hochschulschriften. Reihe 14, Angelsächsische Sprache und Literatur, Bd.325. Frankfurt am Main, Germany; New York: Peter Lang, 1997.

(3) **Articles**

- Achufusi, Ify [or Ifeyinwa] Grace. "Bessie Head, Grace Ogot and Varieties of Apartness" *Africana Marburgensia* 16 (1996): 11–20.
- . "Conceptions of Ideal Womanhood: The Example of Bessie Head and Grace Ogot." *Neohelicon* 19.2 (1992): 87–101.
- . "Criticism and Evaluation of Womanhood in the Fiction of Bessie Head and Grace Ogot." *Afrikanistische Arbeitspapiere* 31 (1992): 119–30.
- . "Female African Writers and Social Criticism: A Study of the Works of Bessie Head and Grace Ogot." *DAI* 52 (1991): 1745 A–46 A. U of Wisconsin, Madison.
- Balseiro, Isabel. "Nation, Race, and Gender in the Writings of Bessie Head and Rosario Ferre." *DAI* 53 (1993): 2802 A. New York U.
- Bazin, Nancy Topping. "Madness, Mysticism, and Fantasy: Shifting Perspectives in the Novels of Doris Lessing, Bessie Head, and Nadine Gordimer." *Extrapolation* 33.1 (1992): 73–87.
- . "Southern Africa and the Themes of Madness: Novels by Doris Lessing, Bessie Head and Nadine Gordimer." *International Women's Writing: New Landscapes of Identity*. Ed. Anne E. Brown and Marjanne E. Gooze. Contributions in Women's Studies 147. Westport, CT: Greenwood, 1995. 137–49.
- Beard, Linda Susan. "Bessie Head's Syncretic Fictions: The Reconceptualization of Power and the Recovery of the Ordinary." *Modern Fiction Studies* 37.3 (1991): 575–89.
- Bryce-Okunlola, Jane. "Motherhood as a Metaphor for Creativity in Three African Women's Novels: Flora Nwapa, Rebeka Njau and Bessie Head." *Nasta* 200–18.
- Campbell, Elaine. "The Theme of Madness in Four African and Caribbean Novels by Women." *Commonwealth Novel in English* 6.1–2 (1993): 133–41.
- Campbell, June M. "Beyond Duality: A Buddhist Reading of Bessie Head's *A Question of Power*." *Journal of Commonwealth Literature* 29.1 (1993): 64–81.

- Chetin, Sara. "Rereading and Rewriting African Women: Ama Ata Aidoo and Bessie Head." *DAI* 53 (1992): 808 A. U of Kent.
- Chien, Ying Ying. "Deconstructing Patriarchy/Reconstructing Womanhood: Feminist Readings of Multicultural Women's Murder Films." *Tamkang Review* 26.1-2 (1995): 265-87.
- Coetzee, Paulette and Craig MacKenzie. "Bessie Head: Rediscovered Early Poems." *English in Africa* 23.1 (1996): 29-39.
- Cooper, Helen. "Bessie Head and Buchi Emecheta: Voyagers." *Matatu* 11 (1994): 71-80.
- Coundouriotis, Eleni. "Authority and Invention in the Fiction of Bessie Head." *Research in African Literatures* 27.2 (1996): 17-32.
- Desai, Gaurav. "Out in Africa." *Genders* 25 (1997): 120-143. Rpt. in *Sex Positives?: The Cultural Politics of Dissident Sexualities*. Ed. Thomas Foster, Carol Siegel and Ellen E. Berry. *Genders* 25. New York, NY: New York UP, 1997. 120-43.
- Driver, Dorothy. "Reconstructing the Past, Shaping the Future: Bessie Head and the Question of Feminism in a New South Africa." *Wisker* 160-87.
- . "Transformation through Art: Writing, Representation, and Subjectivity in Recent South African Fiction." *World Literature Today* 70.1 (1996): 45-52.
- Eilersen, Gillian Stead. "Social and Political Commitment in Bessie Head's *A Bewitched Crossroad*." *Critique* 33.1 (1991): 43-52.
- Elder, Arlene A. "Bessie Head: New Considerations, Continuing Questions." *Callaloo* 16.1 (1993): 277-84.
- Fido, Elaine Savory. "Mother/lands: Self and Separation in the Work of Buchi Emecheta, Bessie Head and Jean Rhys." *Nasta* 330-49.
- Flanagan, Kathleen. "Madness as Exile, Madness as Power: Bessie Head's *A Question of Power*." *MAWA Review* 7.2 (1992): 90-3.
- Fragd, Lula Mae. "U Got 2 Dis B 4 U Re/From Disease to Revival: Reading the Themes of Madness in Pan African Women's Literature." *DAI* 56 (1995): 1769 A. U of California, Berkeley.
- Gagiano, Annie. "Finding Foundations for Change in Bessie Head's *The Cardinals*." *The Journal of Commonwealth Literature* 31.2 (1996): 47-60.
- Harrow, Kenneth W. "Bessie Head and Death: Change on the Margins." *Shades of Empire in Colonial and Post-Colonial Literatures*. Ed. C. Barfoot C. and Theo D'haen. *Studies in Literature* 11. Amsterdam: Rodopi, 1993. 165-78.
- . "Bessie Head's *The Collector of Treasures*: Change on the Margins." *Callaloo* 16.1 (1993): 169-79.
- Hogan, Patrick Colm. "Bessie Head's *A Question of Power*: A Lacanian Psychosis." *Mosaic* 27.2 (1994): 95-112.
- Ingersoll, Earl G. "Sexuality in the Stories of Bessie Head." *College Language Association Journal* 39.4 (1996): 458-67.
- Jagne, Siga Fatima. "African Women and the Category 'Woman': Through the Works of Mariama Bâ and Bessie Head." *DAI* 55 (1995): 3837 A. State U of New York, Binghamton.
- Johnson, Joyce. "Proper Names and Thematic Concerns in Bessie Head's Novels." *World Literature Written in English* 30.1 (1990): 132-40.
- Kibera, Valerie. "Adopted Motherlands: The Novels of Marjorie Macgoye and Bessie Head." *Nasta* 310-29.
- Kincaid, Weekes, Mark. "Re-Placing the Exiled Imagination: D. H. Lawrence and Bessie Head." *Swansea Review* (1994): 43-62.

- Lederer, Mary Susan. "Becoming a Prophet: Representations of Madness in Bessie Head's Novels." *DAI* 57 (1996): 677 A. U of California, Los Angeles.
- Lewis, Desiree. "The Cardinals and Bessie Head's Allegories of Self." *World Literature Today* 70.1 (1996): 73–77.
- Lionnet, Françoise. "Geographies of Pain: Captive Bodies and Violent Acts in the Fictions of Myriam Warner Vieyra, Gayl Jones, and Bessie Head." *Callaloo* 16.1 (1993): 132–52. Rpt. in *Postcolonial Representations: Women, Literature, Identity*. Ithaca: Cornell UP, 1995. 101–28; and Nnaemeka, *Politics* 205–27.
- Lorenz, Paul H. "Colonization and the Feminine in Bessie Head's *A Question of Power*." *Modern Fiction Studies* 37.3 (1991): 591–605.
- MacKenzie, Craig. "Alienation, Breakdown, and Renewal." *International Literature in English: Essays on the Major Writers*. Garland Reference Library of the Humanities 1159. Ed. Robert L. Ross. New York: Garland, 1991. 557–69.
- . "Allegiance and Alienation in the Novels of Bessie Head." *Essays on African Writing, 1: A Re-evaluation*. Ed. Abdulrazak Gurnah. Oxford: Heinemann, 1993. 111–25.
- Matsikidze, Isabella [Pupurai]. "Beyond Revolution: Nationalism and the South African Woman Author." *Writing the Nation: Self and Country in the Post-Colonial Imagination*. Ed. John C. Hawley. Critical Studies 7. Amsterdam: Rodopi, 1996. 139–50.
- . "Connecting the Spheres: The Home Front and the Public Domain in Bessie Head's Fiction." *DAI* 52 (1992): 3925 A–26 A. U of Massachusetts.
- . "The Postnationalistic Phase: A Poetics of Bessie Head's Fiction." *Bucknell Review* 37.1 (1993): 123–33.
- . "Toward a Redemptive Political Philosophy: Bessie Head's *Maru*." *World Literature Written in English* 30.2 (1990): 105–9.
- Menager-Everson, V. S. "*Maru* by Bessie Head: The Dilepe Quartet from Drought to Beer." *Commonwealth Essays and Studies* 14.2 (1992): 44–8.
- Mukherjee, Arun P. "Bahktinian Dialogism and Bessie Head's Dialogue with India." *Dialogism and Cultural Criticism*. Ed. Clive Thomson, and Raj Dua Hans. London: Mestengo, 1995. 217–35.
- Newell, Stephanie. "Conflict and Transformation in Bessie Head's *A Question of Power*, *Serowe: Village of the Rain Wind* and *A Bewitched Crossroad*." *The Journal of Commonwealth Literature* 30.2 (1995): 65–83.
- Newmarch, David. "*Bewitched Crossroads*: The Problematic of Bessie Head's Contribution to a Literature of Botswana." *Swansea Review* (1994): 439–49.
- Nixon, Rob. "Refugees and Homecomings: Bessie Head and the End of Exile." *Late Imperial Culture*. Ed. Roman de la Campa, Ann Kaplan E. and Michael Sprinker. London: Verso, 1995. 149–65.
- Olaogun, Modupe O. "Irony and Schizophrenia in Bessie Head's *Maru*." *Research in African Literatures* 25.4 (1994): 69–87.
- Osagie, Iyunolu Folayan. "Technologies of Myth and the Inscription of Subjectivity: Reading Bessie Head's *A Question of Power* and Toni Morrison's *Beloved*." *DAI* 53 (1993): 2805 A. Cornell U.
- Phillips, Maggi. "Engaging Dreams: Alternative Perspectives on Flora Nwapa, Buchi Emecheta, Ama Ata Aidoo, Bessie Head, and Tsitsi Dangarembga's Writing." *Research in African Literatures* 25.4 (1994): 89–103.
- Rooney, Caroline. "'Dangerous Knowledge' and the Poetics of Survival: A Reading of *Our Sister Killjoy* and *A Question of Power*." *Nasta* 99–126.
- Rose, Jacqueline. "On the 'Universality' of Madness: Bessie Head's *A Question of Power*." *Critical Inquiry* 20.3

- (1994): 401–18.
- Sample, Maxine [J. Cornish]. “Landscape and Spatial Metaphor in Bessie Head’s *The Collector of Treasures*.” *Studies in Short Fiction* 28.3 (1991): 311–9.
- . “Psychic Journeys and the Fragmented Self: Navigating Bessie Head’s *A Question of Power* and Alice Walker’s *Possessing the Secret of Joy*: Proceedings of the First Conference of the Cape American Studies Association, 4 July 1996.” *Fissions and Fusions*. Ed. Lesley Marx, Loes Nas and Lara Dunwell. Bellville, South Africa: University of the Western Cape, 1997. 64–71.
- . “The Representation of Space in Selected Works by Bessie Head, Buchi Emecheta, and Flora Nwapa.” *DAI* 51 (1990): 1611 A. Emory U.
- Schafer, Uwe. “‘Both/and’ and/or ‘Either/or’: Syncretism and Imagination in the Novels of Wilson Harris and Bessie Head.” *Stummer and Balme* 41–7.
- Severac, Alain. “Beyond Identity: Bessie Head’s Spiritual Quest in *Maru*.” *Commonwealth Essays and Studies* 14.1 (1991): 58–64.
- Starfield, Jane. “The Return of Bessie Head.” *Journal of South African Studies* 23.4 (1997): 655–64.
- Streiter, Susan E. “*A Question of Power*: Bessie Head Confronts Francis Bacon’s Idols.” *The Arkansas Review* 4.1 (1995): 31–44.
- Visel, Robin. “‘We Bear the World and We Make It’: Bessie Head and Olive Schreiner.” *Research in African Literatures* 21.3 (1990): 115–24.
- Zeleza, Paul Tiyambe. “Visions of Freedom and Democracy in Postcolonial African Literature.” *Women’s Studies Quarterly* 25.3–4 (1997): 10–33.

## 8. Flora Nwapa

### a. Works by Flora Nwapa

#### (1) Works of Fiction

##### (a) Novels

*Efuru*. London: Heinemann, 1966.

*Idu*. London: Heinemann, 1970.

*Never Again*. Enugu, Nigeria: Nwamife, 1975. Trenton, NJ: Africa World, 1992.

*One is Enough*. Enugu, Nigeria: Tana, 1981. Trenton, NJ: Africa World, 1992.

*Women are Different*. Enugu, Nigeria: Tana, 1986. Trenton, NJ: Africa World, 1992.

*The Lake Goddess*. Lawrenceville, NJ: Africa World, 1995.

*The Umbilical Cord*. Unpublished manuscript.

##### (b) Short Stories

“My Spoons Are Finished.” *Présence Africaine* 63 (1967): 227–35.

“Idu.” *Présence Africaine* 1.4 (1968): 50–2.

*This is Lagos and Other Stories*. Enugu, Nigeria: Nwankwo-Ikejika, 1971. Trenton, NJ: Africa World, 1992.

“The Campaigner.” *The Insider: Stories of War and Peace from Nigeria*. Ed. Chinua Achebe. Enugu, Nigeria: Nwankwo-Ifejika, 1971. 73–8. Rpt. in *African Rhythms: Selected Stories and Poems*. Ed. Charlotte Brooks. New York: Washington Square, 1974. 136–55.

“Ada.” *Black Orpheus* 3.4 (1976): 20–30.

*Wives At War and Other Stories*. Enugu, Nigeria: Tana, 1980. Trenton, NJ: Africa World, 1992.

*The New Game and Other Stories*. Unpublished Manuscript.

*The Silent Passengers and Other Stories*. Unpublished Manuscript.

*Miri and Other Stories*. Unpublished Manuscript.

*The Debt and Other Stories*. Unpublished Manuscript.

(c) **Plays**

*The First Lady: [A Play]*. Enugu, Nigeria: Tana, 1993.

“The Sychophants.” *Conversations: [Plays]*. Enugu, Nigeria: Tana, 1993.

“Two Women in Conversation.” *Conversations: [Plays]*. Enugu, Nigeria: Tana, 1993.

(d) **Children’s Literature**

*Emeka – Driver’s Guard*. London: U of London, 1972.

*Mammywater*. Enugu, Nigeria: Flora Nwapa, 1979.

*My Animal Colouring Book*. Enugu, Nigeria: Flora Nwapa, 1979.

*My Tana Colouring Book*. Enugu, Nigeria: Flora Nwapa, 1979.

*The Adventures of Deke*. Enugu, Nigeria: Flora Nwapa, 1980.

*Journey to Space and Other Stories*. Enugu, Nigeria: Flora Nwapa, 1980.

*The Miracle Kittens*. Read It Yourself Ser. Enugu, Nigeria: Flora Nwapa, 1980.

*My Tana Alphabet Book*. Enugu, Nigeria: Flora Nwapa, 1981.

*My Animal Number Book*. Enugu, Nigeria: Flora Nwapa, 1981.

(e) **Poetry**

*Cassava Song and Rice Song*. Enugu, Nigeria: Tana, 1986.

(2) **Essays**

“Women in Politics.” *Présence Africaine* 141.1 (1987): 115–21.

“Nigeria-The Woman as a Writer.” *Realities* (1985): 1+

“Sisterhood and Survival: The Nigerian Experience.” Paper presented at the Second International Feminist Book Fair, Oslo, Norway, 1986. 1–20. Unpublished paper.

“Writers, Printers and Publishers.” *Guardian* (Lagos, Nigeria) 17 Aug. 1988: 16.

“The Role of Women in Nigeria.” 1–17. Unpublished paper.

“Priestesses and Power among the Riverain Igbo.” *Queens, Queen Mothers, Priestesses and Power: Case Studies in African Gender*. Ed. Flora Edouwaye S. Kaplan. New York: New York Academy of Sciences, 1997. 415–24.

“Women and Creative Writing in Africa.” Nnaemeka, *Sisterhood* 89–99.

“Writing and Publishing for Children in Africa-A Personal Account.” *Preserving the Landscape of the Imagination: Children’s Literature in Africa*. Ed. Raoul Granqvist and Jurgen Martini. Amsterdam; Atlanta: Rodopi, 1997. 265–75.

(3) **Interviews**

Interview. *West Africa* 14 July 1972: 891

Interview. *West Africa* 9 Oct. 1972: 1355.

- “Flora Nwakuche.” Ed. John Agueta. *Interview with Six Nigerian Writers*. Benin, Nigeria: Bendel Newspapers, 1974. 22–7.
- “Flora Nwakuche.” *Sunday Observer* 18 Aug. 1975: 6.
- “Flora Nwakuche, nee Nwapa, A Former Cabinet Minister and One of Africa’s Leading Women Writers, Talks to Austa Uwechue.” *Africa Woman* 10 (1977): 8–10.
- “Personality Interviewed.” *Cactus* (1980–81): 28–9.
- “Nwakuche-Novelist with Concern for Women.” *Daily Times* (Lagos) 3 July 1982: 7.
- “Flora Nwapa, Africa’s First Woman Publisher.” *Africa Now* May 1983: 61–2.
- “Meeting Flora Nwapa.” *West Africa* 18 June 1984: 1262.
- “Flora Nwapa: The Stories of Women Come Naturally to Me.” *The Guardian* (Lagos) 25 Mar. 1985: 4.
- “Flora Nwapa Interviewed.” *Outlook* 1 (1986): 1–7.
- “We Are Not Feminists.” *African Guardian* 18 Sept. 1986: 40.
- “Flora Nwapa: Nigeria’s First Female Novelist.” *National Concord* 23 Jan. 1989: 7.
- “Flora Nwapa.” *James* 111–7.
- “A Writer Who Seeks to Reconcile 2 Worlds.” *The New York Times* 2 June 1990.
- “Interview with Flora Nwapa: some ANA Members Are Crazy.” *Quality Weekly* 23 Aug. 1990: 28+
- “Flora Nwapa: An Interview.” *Commonwealth of Letters* 2.1 (1990): 14–27.
- “Flora Nwapa: A Swipe at the Ideologies.” *The Guardian* (Lagos) 5 Jan. 1991: 6.
- “Interview for the VOA with Flora Nwapa, ALA Annual Meeting March 23, 1991.” *ALA Bulletin* 17.3 (1991): 8–9.
- “Nigerian Female Writers: Scanty Drops from the Inkpot.” *Sunday Times* 22 Sept. 1991: 17–8.
- “I Am Not a Feminist-Flora Nwapa.” *Daily Times* (Lagos) 16 Nov. 1991: 20.
- “Flora Nwapa.” *ALA Bulletin* 19.4 (1993): 12–8.
- Umeh, Marie. “The Poetics of Economic Independence for Female Empowerment: An Interview with Flora Nwapa.” *ALA Bulletin* 20.2 (1994): 26–36. Rpt. in *Research in African Literatures* 26.2 (1995): 22–9.
- “A Chat with Flora Nwapa.” *Gender Issues in Nigeria: A Feminine Perspective*. T. Akachi Ezeigbo. Lagos, Nigeria: Vista, 1996. 89–94.

#### (4) Others

*Golden Wedding Jubilee of Chief and Mrs. C. I. Nwapa, April 20, 1930–April 20, 1980*. Enugu, Nigeria: Flora Nwapa, 1980. (biography)

#### b. Works on Flora Nwapa

- Acholonu, Rose. “The Dynamism of Love: Flora Nwapa’s *Idu* and *Efuru*.” *Family Love in Nigerian Fiction: Feminist Perspectives*. Ed. Acholonu. Owerri, Nigeria: Achinsons, 1995. 126–48.
- . “Flora Nwapa’s Heroines: *One is Enough* and *Women Are Different*.” *Family Love in Nigerian Fiction: Feminist Perspectives*. Ed. Acholonu. Owerri, Nigeria: Achinsons, 1995. 177–92.
- Achufusi, Ify [or Ifeyinwa] G[race]. “Feminist Inclinations of Flora Nwapa.” *African Literature Today* 19 (1994): 101–14.
- Aidoo, Ama Ata. “THESE DAYS [III]-A Letter to Flora Nwapa.” *Research in African Literatures* 26.2 (1995): 17–21. (poem)
- Andrade, Susan Z. “The Joys of Daughterhood: Gender, Nationalism, and the Making of Literary

- Tradition(s).” *Cultural Institutions of the Novel*. Eds. Deidre Lynch; and William B. Warner. Durham, NC: Duke UP, 1996. 249–75.
- . “Rewriting History, Motherhood, and Rebellion: Naming an African Women’s Literary Tradition.” *Research in African Literatures* 21.2 (1990): 91–110.
- Asanbe, Joseph. “Context of Writer and Audience: Nwapa and Emecheta.” *LARES* 6–7 (1984–5): 186–96.
- Azuonye, Chukwuma. “Folk Stereotypes and the Theme of Marital Compatibility in the Novels of Flora Nwapa.” *NKA* 2 (1988): 1–2.
- Bala, L. Sasi. “Heroines of Flora Nwapa.” *Commonwealth Fiction*. 2<sup>nd</sup> vol. Ed. R. K. Dhawan. New Delhi: Classical, 1988. 260–72.
- Banyiwa-Horne, Naana. “African Womanhood: The Contrasting Perspectives of Flora Nwapa’s *Efuru* and Elechi Amadi’s *The Concubine*.” Davies and Graves 119–29.
- Bazin, Nancy Topping. “Weight of Custom, Signs of Change: Feminism in the Literature of African Women.” *World Literature Written in English* 25.2 (1985): 183–97.
- Berrian, Brenda F. (compiler) “Flora Nwapa (1931–1993): A Bibliography.” *Research in African Literatures* 26.2 (1995): 124–9.
- . “In Memoriam: Flora Nwapa.” *Signs* 20.4 (1995): 126–9.
- . “The Reinvention of Woman Through Conversations and Humor in Flora Nwapa’s *One Is Enough*.” *Research in African Literatures* 26.2 (1995): 53–67.
- Boehmer, Elleke. “Stories of Women and Mothers: Gender and Nationalism in the Early Fiction of Flora Nwapa.” *Nasta* 3–23.
- Bryce-Okunlola, Jane. “Motherhood as a Metaphor for Creativity in Three African Women’s Novels: Flora Nwapa, Rebeka Njau and Bessie Head.” *Nasta* 200–18.
- Busia, Abena. “A Tribute from the President of the ALA.” *ALA Bulletin* 20.1 (1994): 7.
- Chukwuma, Helen. “Flora Nwapa is Different.” *Chukwuma* 115–30.
- Coulon, Virginia. “*Women at War*: Nigerian Women Writers and the Civil War.” *Commonwealth Essays and Studies* 13.1 (1990): 1–12.
- Davies, Carole Boyce. “Motherhood in the Works of Male and Female Igbo Writers: Achebe, Emecheta, Nwapa and Nzekwu.” Davies and Graves 241–56.
- Duruoha, S. I. “The Language of Flora Nwapa’s *Efuru* and *Idu*: A Study in Ambiguity.” *Adebayo* 126–33.
- Egejuru, Phaniel. “Flora, OnyiBa Nwanyi.” *ALA Bulletin* 20.1 (1994): 16–7.
- . “The Nigerian Civil War and the Nigerian Novel: The Writer as Historical Witness.” *Studies on the Nigerian Novel*. Ibadan, Nigeria: Heinemann, 1991. 89–105.
- Eko, Ebele, Julius Ogu and Emelia Oko. *Flora Nwapa: Critical Perspectives*. Calabar: U of Calabar P, 1997.
- Emenyonu, Patricia T. “The Role of Contemporary Female Nigerian Writers in the Education of Nigerian Youth.” *Literary Criterion* 23.1–2 (1988): 216–21.
- Ezeigbo, Theodora Akachi. “Gender Conflict in Flora Nwapa’s Novels.” *Newell* 95–104.
- . “Traditional Women’s Institutions in Igbo Society: Implications for the Igbo Female Writer.” *African Languages and Cultures* 3.2 (1990): 149–65.
- Ezenwa Ohaeto. “The Child Figures and Childhood Symbolisms in Flora Nwapa’s Children’s Fiction.” *Research in African Literatures* 26.2 (1995): 68–79.
- . “The Notion of Fulfillment in Flora Nwapa’s *Women Are Different*.” *Neohelicon* 19.1 (1992): 323–33.

- Frank, Katherine. "Women Without Men: The Feminist Novel in Africa." *African Literature Today* 15 (1987): 14–34.
- Ikonne, Chidi. "The Folk Roots of Flora Nwapa's Early Novels." *African Literature Today* 18 (1992): 96–102.
- Jell-Bahlsen, Sabine. "The Concept of Mammywater in Flora Nwapa's Novels." *Research in African Literatures* 26.2 (1995): 30–41.
- Loflin, Christine. "Flora Nwapa." Parekh and Jagne 337–44.
- Lyonga, Pauline Nalova. "Uhamiri or a Feminist Approach to African Literature: An Analysis of Selected Texts by Women in Oral and Written Literature." *DAI* 46.7 (1986): 1940 A. U of Michigan.
- Maja-Pearce, Adewale. "Flora Nwapa's *Efuru*: A Study in Misplaced Hostility." *World Literature Written in English* 25 (1985): 10–5.
- Mojola, Yemi [I]. "The Novelist's View of Women in Igbo Traditional Culture: The Example of Flora Nwapa." *Nigeria Magazine* 563–4 (1988): 25–33.
- . "The Works of Flora Nwapa." Otokunefor and Nwodo 19–29.
- Mugambi, Helen NaBasuta. "Re-creating a Discourse: the Scriptable Novels of Nwapa and Emecheta." *Understanding Women: The Challenge of Cross-Cultural Perspectives*. Ed. Marilyn R. Walden, Artemis Leontis and Muge Galin. Papers in Comparative Studies 7. Athens: the Ohio State U, 1992. 167–79.
- Njoku, Teresa U. "Womanism in Flora Nwapa's *One Is Enough* and *Women Are Different*." *Commonwealth Quarterly* 14. 39 (1989): 1–16.
- Nnaemeka, Obioma. "Feminism, Rebellious Women, and Cultural Boundaries: Rereading Flora Nwapa and Her Compatriots." *Research in African Literatures* 26.2 (1995): 80–113.
- . "From Orality to Writing: African Women Writers and the (Re) Inscription of Womanhood." *Research in African Literatures* 25.4 (1994): 137–57.
- Nwankwo, Chimalum. "The Igbo Word in Flora Nwapa's Craft." *Research in African Literatures* 26.2 (1995): 42–52.
- Ogunyemi, Chikwenye Okonjo. "Introduction: The Invalid, Dea(r)th, and the Author: The Case of Flora Nwapa, aka Professor (Mrs.) Flora Nwanzuruahu Nwakuhe." *Research in African Literatures* 26.2 (1995): 1–16.
- . "Womanism: The Dynamics of the Contemporary Black Female Novel in English." *Signs* 11.1 (1985): 63–80. Rpt. in *Revising the Word and the World: Essays in Feminist Literary Criticism*. Ed. Veve A. Clark, Ruth-Ellen B. Joeres and Madelon Sprengnether. Chicago: U of Chicago, 1993.
- Oha, Obododimma. "Culture and Gender Semantics in Flora Nwapa's Poetry." Newell 105–16.
- Ojo-Ade, Femi. "Women and the Nigerian Civil War: Buchi Emecheta and Flora Nwapa." *Etudes Germano-Africaines* 6 (1988): 75–86.
- Petersen, Kirsten Holst. "Unpopular Opinions: Some African Women Writers." *Kunapipi* 7.2–3 (1985): 107–20. Rpt. in *A Double Colonization: Colonial and Post-colonial Women's Writing*. Ed. Petersen and Anna Rutherford. Mundelstrup, Denmark: Dangaroo, 1986. 107–22.
- Phillips, Maggi. "Engaging Dreams: Alternative Perspectives on Flora Nwapa, Buchi Emecheta, Ama Ata Aidoo, Bessie Head, and Tsitsi Dangarembga's Writing." *Research in African Literatures* 25.4 (1994): 89–103.
- Research in African Literatures* 26.2 (1995). Special issue on Flora Nwapa. Ed. Chikwenye Okonjo Ogunyemi and Marie Umeh.

- Sample, Maxine [J. Cornish]. "In Another Life: The Refugee Phenomenon in Two Novels of the Nigerian Civil War." *Modern Fiction Studies* 37.3 (1991): 445–54.
- . "The Representation of Space in Selected Works by Bessie Head, Buchi Emecheta, and Flora Nwapa." *DAI* 51.1 (1990): 1611 A. Emory U.
- Stratton, Florence. "Flora Nwapa and the Female Novel of Development." Stratton 80–107.
- Strong Leek, Linda McNeely. "Excising the Spiritual, Physical, and Psychological Self: An Analysis of Female Circumcision in the Works of Flora Nwapa, Ngugi Wa Thiongo, and Alice Walker." *DAI* 55 (1995): 1951 A. Michigan State U.
- Swann, Joseph. "The Heroic, the Ironic, and the Underlying Condition: Interpretations of (African) Life in the Short Stories of Cyprian Ekwensi, Chinua Achebe and Flora Nwapa." *The Story Must Be Told: Short Narrative Prose in the New English Literatures*. Ed. Peter O. Strummer. Wurzburg: Konigshausen und Neumann, 1986. 47–57.
- Umeh, Marie, ed. *Emerging Perspectives on Flora Nwapa: Critical and Theoretical Essays*. Trenton, NJ: Africa World, 1998.
- . "Finale: Signifyin(g) The Griottes: Flora Nwapa's Legacy of (Re)Vision and Voice." *Research in African Literatures* 26.2 (1995): 114–23.
- . "A Tribute to Flora Nwapa." *ALA Bulletin* 20.1 (1994): 8–9.
- Wilentz, Gay. "Flora Nwapa: *Efuru*." Wilentz 3–19.
- . "Flora Nwapa [Nwakuche] 1931–1993." *ALA Bulletin* 20.1 (1994): 12–3.
- . "The Individual Voice in the Communal Chorus: The Possibility of Choice in Flora Nwapa's *Efuru*." *ACLALS Bulletin* 7.4 (1986): 30–36.
- Zongo, Opportune. "Rethinking African Literary Criticism: Obioma Nnaemeka." *Research in African Literatures* 27.2 (1996): 178–84.

## 9. Grace Ogot

### a. Works by Grace Ogot

#### (1) Works of Fiction

##### (a) Novels

*The Promised Land*. Nairobi: East African, 1966.

*Nehi Bila Ngurumo*. Swahili translation. Nairobi: Longman, 1979.

*The Graduate*. Nairobi: Uzima, 1980.

*Ber Wat*. (Luo novel)

*A loo kod Apol Apol*. (Luo novel Based on Luo myth and legends)

*Simbi Nyayima*. (Luo novel Based on Luo myth and legends)

*Miaha*. Nairobi: Heinemann, 1983. (Luo novel)

*The Strange Bride*. Trans. Okoth Okombo. Nairobi: Heinemann, 1989.

##### (b) Short Stories

"The Year of the Sacrifice." *Black Orpheus* 11 (1962): 41–50.

"Ward Nine." *Transition* 3.13 (1966): 11–8.

*Land Without Thunder*. Nairobi: East African, 1968.

土屋英子訳 「エリザベス」 土屋哲編訳 『現代アフリカ文学短編集』 鷹書房 1977年 183-205頁

“The Promised Land.” *Palaver: Modern African Writings*. Ed Wilfred Cartey. New York: Nelson, 1970. 83-92.

“Anyiembo’s Ghost.” *Viva* 1.1 (1974): 51-5.

*The Other Woman*. Nairobi: Transafrica, 1977.

“The Fisherman.” *Folkei Bilk-Kulturfront* (Stockholm), 21 Nov. 1979: 15-21.

*The Island of Tears*. Nairobi: Uzima, 1980.

### (c) Plays

“Oganda’s Journey.” *Staffrider* 2.3 (1979): 38-47. (A dramatization by Ezekiel Mphahlele of a short story by Grace Ogot)

“Miahe.” Reunion Cultural Group, Kisumu, Kenya, 28 Dec. 1981-1 Jan. 1982. (A play adapted by Asenath Odaga in Luo from the novel *The Promised Land*)

### (2) Essays

Rev. of *Efuru*, by Flora Nwapa. *East African Journal* 3.7 (1966): 38-9.

“Family Planning for African Women.” *East Africa Journal* 4.4 (1967): 19-23.

“The African Writer.” *East Africa Journal* 5.9 (1968): 35-7.

### (3) Interviews

“A Writer Prefers Pleasing to Preaching.” *Sunday Nation* 28 Nov. 1971: 15-6.

“Grace Ogot.” *Topic* 92 (1975): 5.

“Genuine Talent.” *Viva* 2.11 (1976): 19.

“An Afternoon with Grace Ogot.” *Femina* 8-22 Sep. 1979: 39.

“Interview with Grace Ogot.” *World Literature Written in English* 18.1 (1979): 57-68.

“Grace Ogot.” *Mzungumzo: Interviews with East African Writers, Publishers, Editors, and Scholars*. Ohio U Monographs in International Studies, Africa Ser. 41. Athens, OH: Ohio U, 1981. 123-3.

“Grace Ogot.” *Wanasema: Conversations with African Writers*. Ed. Donald Burness. Ohio U Monographs in International Studies, Africa Ser. 46. Athens, OH: Ohio U, 1985. 59-66.

“Distant Voices: The Lives of African Women.” *Boston Globe Magazine* 26 Jan. 1986: 50+

### (4) Others

*A Glossary in English-Kiswahili, Kikuyu and Dhuluo*. London: Cassell, 1972. (Co-author)

Reading of the short story, “The Middle Door,” from *The Other Woman* (1976). Audiotape. First Person Feminine, Radio Ser., Iowa State U, Ames, Iowa. IV.

### b. Works on Grace Ogot

Achufusi, Ify [or Ifeyinwa] Grace. “Bessie Head, Grace Ogot and Varieties of Apartness.” *Africana Marburgensia* 16 (1996): 11-20.

———. “Conceptions of Ideal Womanhood: The Example of Bessie Head and Grace Ogot.” *Neohelicon*: 19.2 (1992): 87-101.

———. “Criticism and Evaluation of Womanhood in the Fiction of Bessie Head and Grace Ogot.” *Afrikanistische Arbeitspapiere* 31 (1992): 119-30.

———. “Female African Writers and Social Criticism: A Study of the Works of Bessie Head and Grace

- Ogot.” *DAI* 52 (1991): 1745 A–46 A. U of Wisconsin, Madison.
- . “Problems of Nationhood in Grace Ogot’s Fiction.” *The Journal of Commonwealth Literature* 26.1 (1991): 179–87.
- Flanagan, Kathleen. “African Folk Tales as Disruptions of Narrative in the Works of Grace Ogot and Elspeth Huxley.” *Women’s Studies* 25.4 (1996): 371–84.
- Reid, Margaret A. “Conflict or Compromise: The Changing Roles of Women in the Writings of Rebekah Njau and Grace Ogot.” *MWA Review* 5.2 (1990): 51–55.
- Stratton, Florence. “Men Fall Apart: Grace Ogot’s Novels and Short Stories.” *Stratton* 58–79.

(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター研究機関研究員)

# ジェンダー研究センター彙報<平成9年度>

(平成9年4月1日～平成10年3月31日)

職名は発令時による

## 1. 人事関係

<運営委員会名簿> (括弧内は在任期間)

ジェンダー研究センター長 (併)	利谷 信義	(平成8年5月11日～平成10年3月31日)
文教育学部長	平野由紀子	(平成8年10月1日～平成10年9月30日)
理学部長	石和 貞男	(平成8年5月11日～平成10年3月31日)
生活科学部長 兼家政学部長	小林 彰夫	(平成8年5月11日～平成10年3月31日)
人間文化研究科長	徳丸 吉彦	(平成9年4月1日～平成12年3月31日)
附属図書館長	大口勇次郎	(平成8年5月11日～平成10年3月31日)
文教育学部教授	天野 正子	(平成8年5月11日～平成10年3月31日)
理学部教授	室伏きみ子	(平成8年5月11日～平成10年3月31日)
生活科学部教授	田中 辰明	(平成8年5月11日～平成10年3月31日)
人間文化研究科教授	清水 碩	(平成8年5月11日～平成10年3月31日)
ジェンダー研究センター教授	原 ひろ子	(平成8年5月11日～)
ジェンダー研究センター助教授	舘 かおる	(平成8年5月11日～)
事務局長	橋本 幹夫	(平成9年4月1日～平成11年3月31日)

<スタッフ名簿> (括弧内は在任期間)

センター長 (併) 生活科学部教授	利谷 信義	(平成8年5月11日～平成10年3月31日)
専任教授	原 ひろ子	(平成8年5月11日～)
専任助教授	舘 かおる	(平成8年5月11日～)
外国人客員教授	金 在仁 <sup>キム ジェイン</sup>	(韓国女性開発院教授) (平成9年1月1日～平成9年4月30日)

Frances E. Olsen (フランセス・オルセン)  
(カリフォルニア大学ロスアンゼルス校  
法学研究科教授)

(平成9年5月6日～平成9年8月30日)

Bina Pradhan (ビーナ・プラダハン)  
(ネパール国立トリブヴァン大学教授)  
(平成9年9月5日～平成9年12月20日)

Saskia E. Wieringa (サスキア・E・ヴィーリンガ)  
(オランダ国立社会科学研究所教授)  
(平成10年1月6日～平成10年4月27日)

客員教授 (国内) 小林富久子 (早稲田大学教授)  
(平成9年4月1日～平成10年3月31日)

伊藤 るり (立教大学教授)  
(平成9年5月1日～平成10年1月31日)

研究員 (非常勤講師) 大澤 真理  
(東京大学社会科学研究所助教授)  
(平成9年4月1日～平成10年3月31日)

芦野由利子  
(日本家族計画連盟事務局次長)  
(平成9年4月1日～平成10年3月31日)

研究協力員 天野 正子  
(本学文教育学部教授)  
(平成9年4月1日～平成10年3月31日)

大口勇次郎  
(本学文教育学部教授) (同上)

亀井 理  
(本学理学部教授) (同上)

島田 淳子  
(本学生活科学部教授) (同上)

篠塚 英子 (本学生活科学部教授) (同上)	研究機関研究員	根村 直美 (平成9年4月1日～平成10年3月31日)
大井 玄 (国立環境研究所副所長) (同上)		海妻 径子 (平成9年7月1日～平成10年3月31日)
サイキ 戈木クレイグヒル滋子 (東海大学助教授) (同上)		石川 裕子 (平成9年11月1日～平成10年3月31日)
鈴木 伸枝 (ハワイ大学大学院 博士課程 Ph. D.取得資格) (同上)	研究支援推進員	川原ゆかり (平成9年4月25日～平成9年3月31日)
鈴木 陽子 (JICA 専門員) (同上)		村上みどり (平成9年8月18日～平成10年3月31日)
田澤 薫 (国際医療福祉大学 専任講師) (同上)	リサーチ・ アシスタント	小山 直子 (平成9年9月1日～平成10年3月31日)
Tatiana Dahlgren (タチアナ・ダールグレン) (ストックホルム大学大学院博士課程) (平成9年4月15日～平成9年7月15日)	教務補佐員	鶴沢由美子 (平成9年6月1日～平成10年2月28日)
チョン ミョンソク 全 明淑 (元韓国建国大学校講師) (平成9年4月15日～平成10年3月31日)		浅海 智子 (平成9年4月1日～平成10年3月31日)
柘植あづみ (北海道医療大学専任講師) (平成9年4月1日～平成10年3月31日)	<研修員等>	荻野 正恵 (同上)
中山 道子 (元立教大学助教授) (同上)	外国人研究員	片田江綾子 (同上)
西山千恵子 (東京国際大学非常勤講師) (同上)		造力 由美 (同上)
Noll Ortega Tamiko (ノール・オルテガ・タミコ) (ピッツバーグ大学大学院 博士課程 Ph. D.取得資格) (同上)		堀 千鶴子 (同上)
松浦 いね (たばこ総合研究センター客員研究員) (同上)	<研修員等>	
松田 久子 (元理化学研究所非常勤職員) (同上)	外国人研究員	パク フムオク 朴 今玉 (韓国中央日報社編集委員) (平成9年9月24日～平成10年9月23日)
村松 安子 (東京女子大学教授) (同上)	公立大学研修員	松本(米田) 佐代子 (山梨県立女子短期大学教授) (平成9年10月1日～平成10年3月31日)
山崎美和恵 (埼玉大学名誉教授) (同上)		
山本 禮子 (和洋女子大学教授) (同上)		

## 2. 会議関係

### <運営委員会の開催>

平成9年4月11日/5月12日/5月30日(持回り)/6月24日/7月11日/8月7日(持回り)/9月11日/10月16日/11月20日/12月11日/平成10年1月22日/2月19日/3月18日

## 3. 研究調査活動

### <センター研究プロジェクト>

#### I-1-1 「アジアにおける女性と開発」研究

[研究担当]

サスキア・ヴィーリンハ(ジェンダー研究センター外国人客員教授・オランダ社会科学研究所教授)

伊藤 るり(ジェンダー研究センター客員教授・立教大学教

授)

大澤 真理 (ジェンダー研究センター研究員・東京大学社会科学研究所助教授)

村松 安子 (ジェンダー研究センター研究協力員・東京女子大学教授)

鈴木 伸枝 (ジェンダー研究センター研究協力員・ハワイ大学大学院博士課程 Ph.D.取得資格)

鈴木 陽子 (ジェンダー研究センター研究協力員・JICA 専門員)

原 ひろ子 (ジェンダー研究センター教授)

館 かおる (ジェンダー研究センター助教授)

村上みどり (ジェンダー研究センター研究支援推進員)

## 〔研究内容〕

サスキア・ヴィーリンハ教授が、平成10年3月24日(火)～3月25日(水)にわたり、ワークショップ「文化、アイデンティティ、セクシュアリティ―社会過程と開発との関連で―」を開催した。於：附属図書館第二会議室。参加者延べ30名。

3月24日(火)

Session 1 (14:00～16:30) “Measuring Gender Equality: A Critique on UNDP’s GDI and GEM”  
「ジェンダー平等を測定する―国連開発計画のジェンダー開発指数とジェンダーエンパワメント測定の批判」

Session 2 (18:30～20:00) “The Gender Equality Index: Women’s Empowerment in Japan”  
「ジェンダー平等指数―日本における女性のエンパワメント」

3月25日(水)

Session 3 (14:00～16:30) “The Gender Equality Index: Women’s Empowerment in Indonesia in Historical Context”  
「ジェンダー平等指数―歴史的な文脈にみるインドネシアの女性のエンパワメント」

Session 4 (18:30～20:00) “Women’s Empowerment and Autonomy of the Body: Transgender Practices Crossculturally, with a Focus on Japan”  
「女性のエンパワメントと身体の自律性―トランスジェンダー現状を比較文化的にみる(日本を中心に)」

## I-2-1 「アジアにおけるリプロダクティブ・ヘルス/ライツ」に関する研究

## 〔研究担当〕

ビーナ・プラダーン (ジェンダー研究センター外国人客員教授・ネパール国立トリブヴァン大学教授)

原 ひろ子 (ジェンダー研究センター教授)

芦野由利子 (ジェンダー研究センター研究員・日本家族計画連盟事務局次長)

大井 玄 (ジェンダー研究センター研究協力員・国立環境研究所副所長)

戈木クレイグヒル滋子 (ジェンダー研究センター研究協力員・東海大学助教授)

田澤 薫 (ジェンダー研究センター研究協力員・国際医療福祉大学専任講師)

柘植あづみ (ジェンダー研究センター研究協力員・北海道医療大学専任講師)

根村 直美 (ジェンダー研究センター研究機関研究員)

## 〔研究内容〕

①ビーナ・プラダーン教授が、平成9年10月15日(火)～12月17日(水)にわたり、6回の夜間セミナー“Gender and Development”「ネパールにおける開発とジェンダー」を開催した。於：附属図書館第二会議室(18:00～21:00)。参加者延べ300名。

10月15日(水) “Role of Women in the Household Economy of Nepal: Inter-/Intra-Ethnic Variation”  
「ネパールの家庭経済における女性の役割：エスニックグループ内・間における多様性」

10月29日(水) “Newar Women of Bulu: An Analysis of Women’s Autonomy in the Kinship and Household Production System”  
「ブル村におけるネワール女性：親族と世帯単位の生産組織における女性の自立性」

11月12日(水) “Gender Issues in Development : 20 of women’s Experiences in Development in Nepal”  
「開発過程におけるジェンダー課題：ネパールにおける20年間の女性の経験」

11月26日(水) “Women’s Autonomy & Reproductive Health in Nepal”  
「ネパールにおける女性の主体性と性と生殖に関する研究(リプロダクティブヘルス)」

12月10日(水) “Socio-Cultural Perspective of Maternal Health in Nepal”  
「社会文化的に見たネパールにおける女性(妊産婦を含む)の健康」

12月17日(水) “Alternative Approach to Women’s Empowerment: Conceptualizing Methodological Framework for Gender Balanced Approach to Development” 「女性のエンパワーメント：ジェンダー均衡を旨とする開発に関する手法の枠組み」

②「ジェンダーと健康(GHS)研究会」を開催し、研究発表と成果報告について検討した。於：附属図書館第二会議室(18:00~21:00)。

4月18日(金) 高橋 都(東京大学大学院博士課程)

「日本の病院における乳癌患者の相互扶助行動」

6月6日(金) ミーティング「今後の研究活動・成果報告書の内容構成について」

7月4日(金) 〃

9月19日(金) 〃

10月24日(金) 根村 直美「論文『WHOの健康の定義』(ダニエル・キャラハン)を読む」

11月21日(金) 高橋 都(東京大学大学院博士課程)  
「WHOの歴史」

平成10年

1月23日(金) 根村 直美「Wrongful Life および Wrongful Birth 訴訟についての覚え書き」

2月17日(金) ミーティング 今後の研究活動・成果報告書の内容構成について

#### II-1-1 「映像表現とジェンダー」に関する研究

〔研究担当〕

小林富久子(ジェンダー研究センター客員教授・早稲田大学教授)

館 かのる(ジェンダー研究センター助教授)

〔研究内容〕

「フェミニズムと現代思想／映像表現とジェンダー」の研究会を開催した。於：附属図書館第二会議室(13:00~17:00)。

5月20日(火) 「プーナム・アローラ『第三世界の作品は欧米諸国においていかに消費されるのか? 「サラーム・ボンベイ」と「パラマ」の比較分析』」について、村尾静二(千葉大学大学院修士課程)が報告。

6月24日(火) ミラ・ナイール監督『サラーム・ボンベイ』、『ミシシッピー・マサラ』ビデオ鑑賞およびディスカッション。

8月6日(水) デビット・リー監督『インドへの道』ビデオ鑑賞。「ローラ・E・ドナルドソンの『インドへの道——植民地主義と映画表象』」について、小林

富久子が解説。今後の研究会運営についてのディスカッション。

9月16日(火) 岩井俊二監督『スワロウテイル』ビデオ鑑賞。中島佐和子(お茶の水女子大学大学院博士課程)解説。アーロン・ジェロウ(横浜国立大学助教授)による映画批評。

10月28日(火) 侯孝賢<sup>ホウシャオシェン</sup>監督『好男好女』ビデオ鑑賞。桜井智之(早稲田大学大学院映画学修了)解説。

11月25日(火) フランク・キャブラ監督『袁<sup>イェン</sup>將軍の苦いお茶』ビデオ鑑賞。サラ・ティズリー(ジェンダー研究センター研究生)報告。

12月18日(火) 崔洋一監督『月はどっちに出ている』ビデオ鑑賞。磯山久美子(お茶の水女子大学大学院博士課程)による監督のプロフィール紹介。吉田俊実(東京工科大学助教授)による映画批評。

平成10年

1月30日(金) 小津安二郎監督『麦秋』ビデオ鑑賞。堀ひかり(学習院大学大学院博士課程)による「『麦秋』のレズビアニズムについて」の報告。

2月27日(金) 五所平之助監督『人生のお荷物』ビデオ鑑賞。ミツヨ・ワダ・マルシアーノ(アイオワ大学大学院・早稲田大学大学院)「松竹蒲田映画における“女性映画”の創造：『人生のお荷物(1935)その物語の読み替え』」の報告。

#### II-1-2 「公共芸術におけるジェンダー」

〔研究担当及び内容〕

西山千恵子(東京国際大学非常勤講師)が公共芸術とジェンダーに関する文献レビューを行なった。

#### II-2-1 「近世日本の女性と社会」

〔研究担当〕

大口勇次郎(ジェンダー研究センター研究協力員・文教育学部教授)

その他頼梅颯研究会メンバー

〔研究内容〕

頼梅颯日記についての研究。論文集の発行に向けての準備を行なった。各人の構想と草稿をもとに全体会を開催した。

#### III-1-1 「ジェンダー規範とその作用形態に関する研究」

〔研究担当〕

たばこ総合研究センターとの「国内共同研究プロジェクト」として推進。

館 かのる(ジェンダー研究センター助教授)

松浦 いね (ジェンダー研究センター研究協力員・たばこ総合研究センター客員研究員)

その他の「女性とたばこ」研究会メンバー

堀 千鶴子 (ジェンダー研究センター教務補佐員・一橋大学大学院博士課程)

山崎 朋子 (千葉大学大学院博士課程)

磯山久美子 (本学大学院人間文化研究科博士課程)

中村 文 (本学大学院人間文化研究科博士課程)

藤田 和美 (本学大学院人間文化研究科博士課程)

サラ・ティズリー (ジェンダー研究センター研究生)

〔研究内容〕

「女性とたばこ」研究会を「喫煙倫理とジェンダー」というテーマで開催した。於：附属図書館第二会議室。研究報告書としてたばこ総合研究センター／お茶の水女子大学ジェンダー研究センター編『喫煙倫理とジェンダー』を刊行した。

平成9年4月14日 (11:00~15:00) / 8月1日 (10:00~15:30) / 10月30日 (10:30~14:00) / 11月29日 (10:00~14:00) / 12月19日 (10:00~13:30) / 平成10年1月29日 (10:30~15:00)

III-1-2 「植民地下朝鮮における女子中等教育の研究」

〔研究担当〕

山本 禮子 (ジェンダー研究センター研究協力員・和洋女子大学教授)

館 かおる (ジェンダー研究センター助教授)

その他の高等女学校研究会メンバー

新井 淑子 (埼玉大学教授)

福田須美子 (相模女子大学教授)

太田 孝子 (岐阜大学助教授)

〔研究内容〕

高等女学校研究会を開催した。於：ジェンダー研究センター長室。平成9年度は山本禮子教授、新井淑子教授が中心となり台湾の高等女学校に関する調査研究を行なった。

平成9年7月26日 (土) (10:00~13:30) / 10月18日 (土) (10:00~13:30), 平成10年 / 1月20日 (土) (10:00~16:30) / 2月21日 (土) (10:00~16:30)

III-2-1 「日本社会のジェンダー観」に関する研究

〔研究担当及び内容〕

タチアナ・ダールグレン (ストックホルム大学大学院博士課程) が、平塚らいてうとエレン・ケイのジェンダー観について比較研究を行なった。

て比較研究を行なった。

III-2-2 「現代日本における『未婚』『独身』『シングル』『非婚』とジェンダー」に関する研究

〔研究担当及び内容〕

ノール・オルテガ・タミコ (ピッツバーグ大学大学院博士課程 Ph. D.取得資格) が、日本の婚姻観にかかわる調査研究を行なった。

IV-1-1 「大学教育とジェンダー」に関する研究

〔研究担当〕

〈学内共同研究プロジェクト〉として、時限研究促進経費による研究組織を構成。

利谷 信義 (研究代表者：ジェンダー研究センター長)

秋山 光文 (本学文教育学部教授)

天野 正子 (本学文教育学部教授)

宮尾 正樹 (本学文教育学部助教授)

海老根静江 (本学文教育学部教授)

上野 浩道 (本学文教育学部教授)

粕川 正充 (本学理学部助教授)

杉田 孝夫 (本学生活科学部助教授)

原 ひろ子 (ジェンダー研究センター教授)

館 かおる (ジェンダー研究センター助教授)

石川 裕子 (ジェンダー研究センター研究機関研究員)

海妻 径子 (同上)

根村 直美 (同上)

〔研究内容〕

研究報告書としてジェンダー研究センター編『大学教育とジェンダーⅡ』を刊行した。

IV-2-1 「科学研究者の環境に関する調査研究—男女比較を中心に—」

〔研究担当〕

〈国内共同研究プロジェクト〉として文部省科学研究費による研究組織を構成。

原 ひろ子 (研究代表者：ジェンダー研究センター教授)

浅倉むつ子 (東京都立大学教授)

池田 裕恵 (東洋英和女学院大学教授)

石井摩耶子 (恵泉女学園大学教授)

一番ヶ瀬康子 (長崎純心大学教授)

岩崎 芳枝 (郡山女子大学教授)

大隅 正子 (日本女子大学教授)

大野 凜 (東京工業大学助教授)

垣本由紀子 (鹿児島県立短期大学教授)

加藤春恵子 (東京女子大学教授)  
木野内清子 (大妻女子大学教授)  
玄番 央恵 (関西医科大学教授)  
小島 操子 (聖路加看護大学教授)  
島田 淳子 (ジェンダー研究センター研究協力員・本学生活科学部教授)  
島村 礼子 (津田塾大学教授)  
下村 道子 (大妻女子大学教授)  
田端 光美 (日本女子大学教授)  
土器屋由紀子 (気象庁気象大学教授)  
鳥居 淳子 (成城大学教授)  
直井 道子 (東京学芸大学教授)  
永井 玲子 (大阪大学名誉教授)  
丹羽 雅子 (奈良女子大学学長・教授)  
馬場 房子 (亜細亜大学教授)  
森島 啓子 (国立遺伝学研究所教授)  
川原ゆかり (ジェンダー研究センター研究支援推進員)  
小山 直子 (ジェンダー研究センター研究支援推進員)  
鶴沢由美子 (ジェンダー研究センターリサーチ・アシスタント)

〔研究内容〕

『科学研究者の環境に関する調査研究—男女比較を中心に—』(課題番号08301023)平成8～9年度科学研究費補助金(基盤研究A(1))研究成果報告書を作成した。

IV-2-2 「女性と自然科学に関する研究」

〔研究担当〕

亀井 理 (ジェンダー研究センター研究協力員・お茶の水女子大学理学部教授)  
松田 久子 (ジェンダー研究センター研究協力員)  
山崎美和恵 (ジェンダー研究センター研究協力員・埼玉大学名誉教授)  
館 かおる (ジェンダー研究センター助教授)

〔研究内容〕

湯浅年子の総合的研究を行い、目録作成作業を行なった。

IV-2-3 「法学とジェンダー」

〔研究担当〕

フランセス・オルセン (ジェンダー研究センター外国人客員教授、カルフォルニア大学ロスアンジェルス校法学研究科教授)  
利谷 信義 (ジェンダー研究センター長)  
中山 道子 (ジェンダー研究センター研究協力員)  
館 かおる (ジェンダー研究センター助教授)

原 ひろ子 (ジェンダー研究センター教授)

〔研究内容〕

①7月11日(金)ジェンダー研究センター一周年記念講演会を開催した。於:文教育学部棟大会議室(15:30~17:30)。参加者90名。  
利谷 信義「日本における女性政策の動向」  
フランセス・オルセン“The Role of Legal Studies in Gender Studies”「法にみるジェンダー」  
通訳:中山道子

②フランセス・オルセン教授が、6月11日(水)~7月9日(水)まで5回にわたって夜間セミナー“How Legal Studies Can Contribute to Gender Studies: Toward a Broader Understanding of Law”「法研究はジェンダー研究にいかに関与できるか?より広い法理解に向けて」を開催した。於:附属図書館第二会議室。参加者延べ200名。

6月11日(水)“The Public-private Distinction: Law’s Images of Society”「公と私の区分:法の社会像」  
コメンテーター:中山 道子  
(ジェンダー研究センター研究協力員)

6月17日(水)“Legal Equality for Women: An End to Protective Labour Law?”「女性の法的平等:保護法の終焉」  
コメンテーター:浅倉むつ子(東京都立大学教授)

6月25日(水)“Family Law: New Perspectives on the Homework Debate of the1950s”「家族法:1950年代の家族労働をめぐる論争に関する新たな視点」  
コメンテーター:棚村 政行(早稲田大学教授)

7月2日(水)“Human Rights and Women’s Rights”  
「人権と女性の権利」  
コメンテーター:神長百合子(専修大学教授)

7月9日(水)“Sexual Rights, Reproductive Rights, and Protection Against Sexual Violence”「性的権利とリプロダクティブ・ライツと性暴力に関する保護」  
コメンテーター:角田由紀子(弁護士)

③7月24日(木)、25日(金)(10:00~17:00)にフランセス・オルセン教授が、ワークショップ“Academic Sexual Harassment: Combatting Sexual Exploitation in Academic Institutions”「アカデミック・セクシュアル・ハラスメント:学術研究・教育機関における性的搾取への

取り組み」を2回開催した。於：附属図書館第二会議室。  
参加者延べ58名。

7月24日(木) “An Introduction to Issues in Academic Sexual Harassment: Lessons from Experiences in the United States” 「アカデミック・セクシュアル・ハラスメントー理論的アプローチ」  
コメンテーター：武田万里子(金城学院大学助教授)、  
角田由紀子(弁護士)  
通訳：寺尾美子(東京大学教授)

7月25日(金) “Remedies for Sexual Harassment: Practical Problem” 「アカデミック・セクシュアル・ハラスメントー実践的アプローチ」  
コメンテーター：渡辺 和子(京都産業大学教授)、  
戒能 民江(東邦学園短期大学教授)  
通訳：伊藤 るり  
(ジェンダー研究センター客員教授・立教大学教授)

#### V-1-1 「女性政策推進機構の研究」

〔研究担当〕

金 在任キム ジョイン(ジェンダー研究センター外国人客員教授・韓国女性開発院教授)  
館 かつおキム ジョイン(ジェンダー研究センター助教授)

〔研究内容〕

平成9年4月12日(土) 国際シンポジウム「女性政策の日韓比較研究」を開催した。於：文教育学部大会議室(13:30~17:00)。参加者延べ78名。

金 在任キム ジョイン(ジェンダー研究センター外国人客員教授・韓国女性開発院教授)

「韓国における女性政策の現局面ー女性発展基本法および放課後保育制度を中心にー」

韓 明淑ハン ミョンスク(梨花女子大学校アジア女性学センター研究員)

「韓国における性暴力特別法の制定と改正運動」

水野 順子(アジア経済研究所研究員)

「韓国の社会経済発展と女性労働」

金 富子キム フジコ(東京学芸大学大学院修士課程)

「日本の社会政策と慰安婦問題」

大澤 真理(ジェンダー研究センター研究員・東京大学社会科学研究所助教授)

「日本における女性政策の現局面ー日韓比較の試みー」

#### V-1-2 「社会政策、社会保障制度とジェンダー」に関する研究

〔研究担当〕

篠塚 英子(本学生活科学部教授)

全 明淑チョン ミョンスク(ジェンダー研究センター研究協力員・元韓国建国大学講師)

〔研究内容〕

「日本の社会保障制度とジェンダー研究」に関する文献レビューを行なった。

#### V-2-1 「女性の国際ネットワーク活動」に関する研究

〔研究担当〕

原 ひろ子(ジェンダー研究センター教授)

村上みどり(ジェンダー研究センター研究支援推進員)

〔研究内容〕

GO、NGOの連携の推進と国際ネットワークの情報を収集した。

#### VI-1-1 ジェンダー研究に関する文献・情報の総合的包括的収集及び提供システムの研究

〔研究担当〕

館 かつおキム ジョイン(ジェンダー研究センター助教授)

小山 直子(ジェンダー研究センター研究支援推進員)

鶴沢由美子(ジェンダー研究センターリサーチ・アシスタント)

〔研究内容〕

ジェンダー研究に関する文献収集とともに、ジェンダー研究センターのホームページを作成した。鶴沢由美子が「専門職と女性」に関する文献目録を作成した。

#### VI-2-1 ジェンダー研究文献のカテゴリー化に関する研究

〔研究担当及び内容〕

館かつお助教授が「女性学とジェンダー研究」の概念成立にかかわる研究を行なった。

<学内共同研究プロジェクト>

①時限研究促進経費による<学内共同研究プロジェクト>として、「大学教育とジェンダーII」の研究を行い、研究報告書を刊行した。(IV-1-1「大学教育とジェンダーに関する研究」参照)

②大学院人間文化研究科博士課程との共同研究プロジェクト「諸文化における女性の一生に関する研究会」を開催した。

〔研究担当〕

原 ひろ子（ジェンダー研究センター教授）

田中真砂子（本学教育学部教授）

本学大学院人間文化研究科博士課程学生

<国内共同研究プロジェクト>

- ①科学研究者の環境に関する調査研究（文部省科学研究費基盤研究（A））として「科学研究者の環境に関する調査研究－男女比較を中心に－」を行なった。（IV-2-1「科学研究者の環境に関する調査研究－男女比較を中心に－」参照）
- ②たばこ総合研究センターと共同研究を行い、研究報告書『喫煙倫理とジェンダー』を刊行した。（III-1-1「ジェンダー規範とその作用形態に関する調査研究」参照）
- ③国立民族学博物館地域研究企画交流センター（研究代表：押川文子）とジェンダー研究センター（研究代表：原ひろ子）との連携研究として、「地域社会の変化と女性」研究会を組織し、東アジア、南アジア、中東を中心とする研究報告を行なった。

<国際共同研究>

国立婦人教育会館との共同研究「アジアにおけるく開発と女性」に関する文化横断的調査研究（平成9年度文部省科学研究費補助金国際学術研究：研究代表者大野曜）におけるタイの研究分担者として原ひろ子がタイ調査等に参加し、報告書を作成した。

4. 研究交流・成果公表活動

<公開研究会・講演会・シンポジウム>

平成9年4月より平成10年3月の間の発表者及びその題目は次の通りである。（敬称略）

4月12日（土）国際シンポジウム「女性政策の日韓比較研究」

金 在任（ジェンダー研究センター外国員客員教授・韓国女性開発院教授）

「韓国における女性政策の現局面－女性発展基本法および放課後保育制度を中心に－」

韓 明淑（梨花女子大学校アジア女性学センター研究員）

「韓国における性暴力特別法の制定と改正運動」

水野 順子（アジア経済研究所研究員）

「韓国の社会経済発展と女性労働」

金 富子（東京学芸大学大学院修士課程）

「日本の社会政策と慰安婦問題」

大澤 真理（ジェンダー研究センター研究員・東京大学社会科学研究所助教授）

「日本における女性政策の現局面－日韓比較の試み－」

6月20日（金）月例研究会

マーガレット・サーキシアン（スミス・カレッジ助教授）“Gender Issues in Music”「音楽とジェンダー」

通訳：勝村 仁子（国立音楽大学非常勤講師）

7月11日（金）ジェンダー研究センター一周年記念講演会

利谷 信義（ジェンダー研究センター長）「日本における女性政策の動向」

フランセス・オルセン（ジェンダー研究センター外国人客員教授・カリフォルニア大学ロスアンジェルス校教授）“The Role of Legal Studies in Gender Studies”「法にみるジェンダー」

通訳：中山 道子（ジェンダー研究センター研究協力員）

9月18日（木）月例研究会

イルゼ・レンツ（ボッフム大学教授・東京大学社会科学研究所客員教授）

“Feminism in International Perspective: The Meaning of the German and the Japanese Experience”「国際的視野から見たフェミニズム－日独の経験の意味するもの」

9月27日（土）ラウンドテーブル・ディスカッション

ビーナ・プラダーン（ネパール国立トリブヴァン大学教授）“Current Situation of Women and Women’s Policy in the Republic of Maldives”

「モルディブ共和国における女性の現状と女性政策」

11月1日（土）国際シンポジウム「技術とジェンダー」

バーバラ・ラザルス（カーネギー・メロン大学教授）“Women in Science and Engineering in the United States”「自然科学・工学の分野で活躍する女性たち－米国の事例から－」

村松 安子（ジェンダー研究センター研究協力員・東京女子大学教授）「技術は、女性のエンパワーメントに資するか？」

ビーナ・プラダーン（ネパール国立トリブヴァン大学教授）“From the Viewpoints of Women in Developing Countries”「開発途上国の女性の視点から」

通訳：辻 信子

11月12日(水) 月例研究会  
ブイ・ティ・キム・クイ(ベトナム、社会学研究  
所女性学研究センター所長)「ベトナム ホーチ  
ミン市の縫製工場働く女性労働者たち」  
解説:織田由紀子

(アジア女性交流・研究フォーラム主任研究員)

11月20日(木) 月例研究会  
バーバラ・トーマス・スレイター(クラーク大学  
教授)“Socio-Economic and Gender Analysis”  
「社会経済とジェンダー分析」

12月4日(木) 月例研究会  
ダウン・H・キュリー(プリティッシュコロンビ  
ア大学社会学部准教授兼女性とジェンダー研究セ  
ンター所長)“Women’s Studies and Gender  
Relations”「女性学とジェンダー研究」

平成10年

1月19日(月) 月例研究会  
サスキア・エレノア・ヴィーリンハ(ジェンダー  
研究センター外国人客員教授・オランダ国立社会  
科学研究所教授)“Women’s Movements and  
Public Policy in Europe, Latin America and the  
Caribbean”「ヨーロッパとラテンアメリカとカ  
リブ地域における女性運動と公共政策」

3月5日(木) 月例研究会  
朴 今玉(韓国中央日報社編集委員・ジェンダー  
研究センター外国人研究員)「女性新聞記者の地  
位と役割—韓日比較のために—」

3月19日(木) 月例研究会  
松本(米田) 佐代子(山梨県立女子短期大学教  
授・ジェンダー研究センター公立大学研修員)  
「国民国家とジェンダー・アイデンティティー—日  
露戦争期のナショナリズムと女性をめぐる—」

<セミナー・ワークショップ>

6月11日(水)～7月9日(水) 夜間セミナー(計5回)  
フランスス・オルセン「法研究はジェンダー研究に  
いかに貢献できるか?より広い法理解をめざして」  
(IV-2-3参照)

7月24日(木)～25日(金) ワークショップ2日間  
フランスス・オルセン「アカデミック・セクシュア  
ル・ハラスメント:学問研究機関における性的搾取  
の取り組み」(IV-2-3参照)

10月15日(水)～12月17日(水) 夜間セミナー(計6回)  
ビーナ・プラダーン「ネパールにおける開発とジェ  
ンダー」(I-2-1参照)

平成10年3月24日(火)～25日(水) ワークショップ2日間  
サスキア・エレノア・ヴィーリンハ「文化、アイデ  
ンティティ、セクシュアリティ—社会過程と開発と  
の関連で—」(I-1-1参照)

<刊行物>

- ①『ジェンダー研究—お茶の水女子大学ジェンダー研究セン  
ター年報—』第1号刊行(平成10年3月)
- ②お茶の水女子大学ジェンダー研究センター編・刊『大学教  
育とジェンダーII』(平成10年3月)
- ③たばこ総合研究センター/お茶の水女子大学ジェンダー研  
究センター編・刊『喫煙倫理とジェンダー』(平成10年3  
月)
- ④原 ひろ子(研究代表)文部省科学研究費研究成果報告書  
『科学研究費の環境に関する調査研究—男女比較を中心  
に—』(平成10年3月)

## 5. 研究指導・教育活動

<研究生>(括弧内は在籍期間)

- 魚住みつ子 「母性とジェンダー」  
(平成9年4月1日～平成10年3月31日)
- 中野裕美子 「『日本的経営』と『主婦』役割に関する研  
究」  
(平成9年4月1日～平成10年3月31日)
- サラ・ティズリー(カナダ)  
「大正時代における生活文化の変化と女性身  
体像」  
(平成9年4月1日～平成10年3月31日)
- セーラ・フレデリック(アメリカ合衆国)  
「1911～1932日本女性雑誌における近代と女  
性の関係の現われ方」  
(平成9年10月1日～平成10年3月31日)
- 何 璋(中華人民共和国)  
「下田歌子の女子教育論の誕生と社会的展開  
の諸条件」  
(平成9年4月1日～平成9年9月30日)
- 丁 銘(中華人民共和国)  
「中国と日本の化粧品発展と女性の化粧意識  
の比較研究」  
(平成9年4月1日～平成10年3月31日)

<学部出講・大学院担当>

- 原 ひろ子  
生活科学部 比較女性論(春学期)  
家政学研究科 女性学特論/修士論文指導(通年)

人間文化研究科博士前期課程 発達社会科学専攻  
開発・ジェンダー論コース

比較ジェンダー開発論 (春学期)

比較ジェンダー開発論演習 (秋学期)

人間文化研究科博士後期課程 人間発達学専攻  
女性学講座

比較ジェンダー論演習 (1)(2)

館 かおる

文教育学部 社会教育特講 I (春学期)

生活科学部 女性社会史/ジェンダー論 (秋学期)

人間文化研究科博士前期課程 発達社会科学専攻  
開発・ジェンダー論コース

ジェンダー関係論 (春学期)

ジェンダー関係論演習 (秋学期)

人間文化研究科博士後期課程 人間発達学専攻  
女性学講座

ジェンダー形成論演習 (1)(2)

## 6. 文献・資料収集/情報提供/閲覧

<収集資料点数>

平成9年4月から平成10年3月までに収集した資料は和漢書単行本359冊, 洋書単行本86冊, その他雑誌・パンフレットなど多数。

<主要収集資料>

ジェンダーとセクシュアリティに関する文献・資料/ネパール・タイの女性に関する文献・資料/開発とジェンダー教育に関する文献・資料/女性と自然科学者に関する文献・資料/リプロダクティブ・ヘルス/ライツに関する文献・資料/アジアの女性政策と開発に関する文献・資料/女性とたばこをめぐる関係資料/韓国の女子中等教育に関する資料/韓国の女性政策に関する資料

<資料提供>

○平成9年6月 日本テレビ「おもいきりテレビ」に使用するため、明治8年頃の東京女子師範学校の外観写真1葉を提供。

○平成9年11月 すみだ郷土文化資料館(仮称)のコンピュータシステムの画像に入力のため、荻野吟子卒業名簿のコピーを、すみだ郷土文化資料館に提供。

○平成10年2月 山梨県立青少年科学館(仮称)において常設の「21人の日本の学者たち」展に展示するために、株式会社フェイスに黒田チカ、保井コノ、湯浅年子の肖像写真各々1葉を提供。

○平成10年2月 日本テレビ「おもいきりテレビ」に使用するため、明治14年頃の東京女子師範学校校舎の写真1葉を提供。

<リファレンス・サービス、閲覧、貸出等>

常時附属図書館情報サービス係・情報システム係で担当。

<図書・資料寄贈>(敬称略)

掲載は、和書:寄贈者名『書名』(著者名)、洋書:寄贈者名 書名(イタリック)(著者名)の順とした。

横浜市女性協会『女性問題キーワード111』(横浜市女性協会) 利谷信義『長寿社会を企画する』(藤井隆) 京都橋女子大学女性歴史研究所『伝えたい思い 枚方女性史』(京都橋女子大学女性歴史研究所) フランセス・オルセン『ロサーリオの死』(マイグル・アクセルソン) 阿武喜美子『瀬野信子名誉教授研究業績集I、II、III巻』(阿武喜美子他編) 上野千鶴子『キャンパス性差別事情』(上野千鶴子他編) 矢野ハギ『髪ひとすじ』(矢野ハギ) 信田さよ子『一卵性母娘な関係』(信田さよ子) 篠塚英子『女性と家族』(篠塚英子) アジア女性史国際シンポジウム実行委員会『アジア女性史』(アジア女性史国際シンポジウム実行委員会) 山田佐和子『百合樹の蔭に過ぎた日』(45回生西組一同) 浅倉むつ子『女性労働判例ガイド』(浅倉むつ子, 今野久子) 館かおる『女性がつくる家族女性学研究4号』(女性学研究会編) 寺田鎮子『20世紀:ある小路にて』(シャイレンドラ・サーカル, カシナート・タモト編) 勝方恵子『差異に生きる姉妹たち』(ヴィッキー・ルイス他編) 江原絢子『高等女学校における食物教育の形成と展開』(江原絢子) 女性のためのアジア平和国民基金『慰安婦 関係文献目録』(女性のためのアジア平和国民基金編) 長崎県立大学『ケガレとしての花嫁』(近藤直也) 翰林書房『総力討論 ジェンダーで読む「或る女」』(中山和子, 江種満子編) 大空社『現代日本における女子教育研究の動向』(真橋美智子) 新曜社・村松泰子『メディアがつくるジェンダー』(村松泰子他編) エンゼル財団『暮らしの哲学としての「生活文化」』(松田義幸編) 東京女性財団『「ことば」に見る女性』(東京女性財団編著) 『都民女性の戦後50年』(東京女性財団編著) 松田久子『美しく立てり』(田中寿美子さんを偲ぶ会事務局編) 『津田塾理科・数学科50年のあゆみ』(50年史編集委員会) 大沢三奈子『黄色い髪』(干刈あがた)、『名残のコスモス』(干刈あがた)、『窓の下の天の川』(干刈あがた)、『樹下の家族』(干刈あがた)、『切ない30代に捧ぐ』(内館牧子)、『金子みすゞへの旅』(鳥田陽子)、『わたしと小鳥とすずと』(金子みすゞ)、『西色の戦記』(津村節子)、『看護形態機

能学』(菱沼典子) 米田佐代子『雲よ還れ』(米田ひさ),『新しい保育を求めて』(東京弁護士会・両性の平等に関する委員会編),『歴史に人権を刻んだ女たち』(米田佐代子他編),『おんなの昭和史 増補版』(永原和子, 米田佐代子) 原ひろ子『女性研究者』(女性研究者 愛知女性研究者の会20年のあゆみ編集委員会),『中小企業における女性管理職者等の登用の実態と問題点』(中小企業研究所),『あなたもシングル』(千野境子編著),『青少年問題読本 非行の追跡』(西尾示郎),『PERT 新しい仕事のまとめ方』(森竜雄),『日本輸送史』(日通総合研究所編),『現代の経営』正, 続(ピーター・ドラッカー),『目標管理による親方日の丸意識の払拭』(影山裕子),『憂論 日本は今なにを考へなすべきか』(松下幸之助, 盛田昭夫),『統一地方選挙の手引』(自治省選挙部編),『いま家族に何が起きているのか』(野々山久也他),『ドナ・マルガリータ・渡辺』(前山隆編著),『「ささえあい」の人間学』(森岡正博編著),『トーテムのすむ森』(大塚柳太郎),『交換日記』(本田和子),『現代家族の社会学』(石川実編),『社会の民俗』(赤田光男他編),『アメリカ消費者運動の50年』(リチャード・L・D・モース編),『女と男の時空』(山下悦子),『生活の経営』(白井和恵編著),『響きあう女たち』(あだち女性学研究会編),『アジア読本 韓国』(伊藤重人),『子どもと生きる』(河合隼雄編),『家族の文化誌』(原ひろ子編),『先住民ミヘへの静かな変容』(黒田悦子),『生活情報論』(林雄二郎他編),『国民医療年鑑』(日本医師会編),『自給自足12ヶ月』(明峯哲夫, 明峯惇子),『現代の経済と消費生活』(慶応義塾大学経済学部編),『危機の20年』(E・H・カー),『花嫁はモンペ』(婦人コミュニケーション会議),『気になるアメリカ雑誌』(加賀山弘),『近代日本女性史への証言』(『歴史評論』編集部編),『明治女性史上, 中巻前篇, 中巻後篇』(村上信彦),『江戸女豆事典』(田井友季子),『江戸女人物事典』(田井友季子),『幕末・明治 女の事件簿』(田井友季子),『ふるさとと女たち』(古庄ゆき子),『わたしの横浜』(郷静子),『周防の女たち』(島利栄子),『炭山に生きる』(堀添絹子),『日本女性史』(脇田晴子他編),『六枚の肖像画』(美尾浩子),『日本女性史1巻~5巻』(女性史総合研究会編),『静岡おんな百年 上下』(市原正恵),『未来を紡ぐ女たち』(林郁),『良妻賢母という規範』(小山静子),『わが町・浦安』(小林トミ),『日本史にみる女の愛と生き方』(永井路子),『ヒメの民俗学』(宮田登),『祖母, わたしの明治』(志賀かう子),『日本古代婚姻史の研究 上下』(関口裕子),『母たちの肖像』(松永伍一),『雪華の刻をきざむ』(新潟女性史クラブ),『明治期家庭生活の研究』(中部家庭経営学研究会),『地ぶき花ゆら』(高橋撰一郎),『女性が自由を選ぶとき』(ジゼル・アリミ),『幕末明治女百話』(篠田鑛造),『講座現代・女の一生2』(天野正子他),

『紅と紺と』(林屋辰三郎編),『母親たちの自分史』(わいふ編集部編),『愛の目録』(尾崎秀樹, 尾崎恵子),『わが道』(藤田たき),『母が泣いた日』(玉井義臣),『母の台所 娘のキッチン』(藤原房子),『あざやかな女たち』(佐田智子),『オス・メスから男・女への歴史』(岩田好宏),『女が自分と向きあうとき』(吉武輝子),『おんなの性』(吉武輝子),『おんなの近代史』(大谷晃一),『地底の青春』(真尾悦子),『日本女性生活史1』(女性史総合研究会編),『ちさ・女の歴史1~5』(早船ちよ),『母たちの時代』(長田かな子),『現代母親考』(島雪子),『夜と朝の手紙』(津島佑子),『女が自分をみつめるとき』(久保克児),『江戸の小さな神々』(宮田登),『二度わらべの母と生きる』(中島誠),『恋を駆ける女性』(サンドラ・ホックマン),『女は世界を救えるか』(上野千鶴子),『こころの処方箋』(河合隼雄),『独りを恐れず』(丸岡秀子),『埋葬を許さず』(丸岡秀子),『女のいい分』(丸岡秀子編),『鍛冶屋の母』(谷川健一),『母のあしあと』(種岡敏子他),『女のはたらき』(もろさわようこ編),『加賀の工芸』(高橋勇),『結婚すべきか』(富岡多恵子他),『おんなと母のあいだ』(小林佐智子他),『そして, おんなは・・・』(多田道太郎他),『わたしのあしあと』(柴野和子他),『いずみのほとりに』(一粒のひまわりの種編),『家族史研究3』(『家族史研究』編集委員会),『ふおん・しいほととの娘 上中下』(吉村昭),『歴史をさわがせた夫婦たち 外国篇』(永井路子),『歴史をさわがせた女たち 外国篇』(永井路子),『歴史をさわがせた女たち 日本篇』(永井路子),『歴史をさわがせた女たち 庶民篇』(永井路子),『祖母・母・娘の時代』(鹿野政直他),『伝習館・複数の母たち』(柳下村塾経営委員会編),『光ほのかなれども』(上笙一郎, 山崎朋子),『女性むかしむかし』(牧田茂他編),『近代日本女性史 上下』(米田佐代子),『ひとり暮らしの戦後史』(塩沢美代子他),『女たちが変えるアメリカ』(ホーン川嶋瑤子),『伝統文化と女性達』(小栗純子他),『女性の生き方』(安西篤子他),『魔女狩り』(森島恒雄),『女性の英語』(南和子),『新版日本女性史』(井上清),『現代日本女性史』(井上清),『明治女性史1~4』(村上信彦),『事件』(大岡昇平),『その橋まで 上下』(水上勉),『女性教師論』(深谷昌志),『女性の権利』(ネー・バンサドン),『悪女の法律』(和久峻三),『ツアラトウストラ』(永上英廣他),『家父長制と資本制』(上野千鶴子),『主婦論争を読む1』(上野千鶴子),『女性が科学をみつめるとき』(生活科学研究所編),『燃えて尽きたし』(斎藤茂男編),『科学史から消された女性たち』(ロンダ・シービング),『遥かなるボストン』(小西章子),『世界の女たちはいま』(柴山恵美子編著),『近代を生きる女たち』(川越修他編),『ふたつの文化の間で』(広中和歌子),『ふたつの文化のはざまから』(加藤シヅエ),『フェミニズム論争』(江原

由美子編),『イーグルウーマン』(リン・アンドルーズ),『メ  
 デイション・ウーマン』(リン・アンドルーズ),『ジャガー・  
 ウーマン』(リン・アンドルーズ),『エデンは北か』(川崎則  
 子),『湯浅年子ノバリに生きて』(山崎美和恵編),『ドイツ  
 婦人の家庭学』(八木あき子),『新約聖書の女性観』(荒井  
 献),『娘と母のハイデルベルグ』(高橋観子),『バンコクの  
 妻と娘』(近藤紘一),『セーヌ左岸そだち』(フランソワ  
 ズ・モレシャン),『主婦が歩きだすとき』(高橋ますみ),『女  
 が定年を迎えるとき』(佐藤洋子),『主婦が輝くとき』(富士  
 谷あつ子),『主婦とおんな』(国立市民会館市民大学セミ  
 ナーの記録),『主婦ブルース』(目黒依子),『仕事』(スタッ  
 ズ・ターケル),『40代はややこ思惟 いそが思惟』(干刈あ  
 がた),『キャリア・ウーマン』(マーガレット・ヘニング  
 他),『貧困と人間開発』(広野良吉他監修),『七十七人の侍  
 アメリカへ行く』(服部逸郎),『エスニック・アメリカ』(明  
 石紀雄他),『朝子ニューヨークへ翔ぶ』(東畑朝子),『母と  
 娘の関係 下』(ナンシー・フライデー),『ソーシャルステ  
 イタスの社会心理学』(山本真理子編),『現代ヤングレディ  
 考』(菅原真理子),『新 中国の女性たち』(西園寺雪江),『ア  
 メリカ大衆文化』(本間長世編),『アメリカの家族』(NHK  
 取材班),『江崎玲於奈一家のアメリカ日記』(江崎真佐子),  
 『ハワイの辛抱人』(前山隆編著),『いま家庭で』(メア  
 リー・J・ベイン),『女性研究者の可能性をさぐる』  
 (JAICOWS 編)

中野卓 *Makiko's Diary* (Makiko Nakano, et al.), Frances E.  
 Olsen *Feminist Legal Theory 1, 2* (Frances E. Olsen), Barbara  
 Thomas-Slaytar *Power, Process and Participation* (Barbara  
 Thomas-Slaytar), *Gender, Environment and Development in  
 Kenya* (Barbara Thomas-Slaytar), *Feminist Political Ecology*  
 (Barbara Thomas-Slaytar) 生活文化研究会 *Radically  
 Speaking* (Diana Bell & Renate Klein, eds.), *Feminist  
 Contentions* (Seyla Benhabid), *Feminist and The Power of  
 Low* (Carol Smart), *Gender & Technology in The Making*  
 (Cynthia Cockburn & Susan Ormrod), *The Economics of  
 Gender* (Joyce P. Jacobson), *Solidarity of Strangers* (Jodi  
 Dean), *Planning Development with Women* (Kate Young),  
*Living with Contradictions* (Alison M. Jaggar, ed.), *Bridges of  
 Power* (Lisa Albrecht & Rose M. Brewer, eds.), *Confronting  
 State, Capital and Patriarchy* (Amrita Chhachhi, ed.), *The  
 Strategic Silence* (Isabella Bakker, ed.), *Dignity and Daily  
 Bread* (Sheila Rowbotham), *The New Untouchables* (Nigel  
 Harris), *Engendering Wealth and Well-Being* (Rae Lesser  
 Blumberg, ed.), *Women's Rights Human Rights* (Julie Paters,  
 ed.), *Global Gender Issues* (Spike Peterson, et al.), *Gender,*

*Economic Growth and Poverty* (Noeleen Heyzer, ed.), *Women  
 and Politics World Wide* (Barbara J. Nelson, ed.), *Women's  
 Work in East & West* (Norman Stockman, et al.), *Social  
 Postmodernism* (Linda Nicholson, ed.), *Feminism, Objectivity &  
 Economics* (Julie A. Nelson) 原ひろ子 *Gender-Scientific  
 Participatory Approach in Technical Co-operation* (Brigit  
 Kerstan), *Songs My Mother Taught Me* (Wakako Yamauchi),  
*Women's Studies International* (Aruna Rao, ed.), *Japanese  
 Women* (Kumiko Fujimura Fanselow, ed.), *A Rising Public  
 Voice* (Alide Brill, ed.), *Motherhood by Choice* (Perdita  
 Huston), *Portraits of Chinese Women in Revolution* (Agnes  
 Smedley), *Seed 2* (Ann Leonard, ed.), *Sultana's Dream*  
 (Roushan Jahan), *Women of Color and the Multicultural  
 Curriculum* (Liza Fiol-Matta, ed.), *Challenging Racism &  
 Sexism* (Ethel Tobach, ed.), *Challenges for Women* (Chung Sei-  
 Wha, ed.), *Female of the Species* (M. Kay Martin & Barbara  
 Voorhies), *Women: a bibliography on their education & careers*  
 (Helen S. Astin), *Toward a Feminist Theory of the State*  
 (Catharine A. Mackinnon), *The Sceptical Feminist* (Janet  
 Radcliffe Richards), *Feminism and Socialism in China*  
 (Elisabeth Croll), *Female Revolt* (Janet Soltzman Chafetz, et  
 al.), *Women Under Communism* (Barbara Wolf Jancar), *Beyond  
 Separate Spheres* (Rosalind Rosenberg), *Toward a Sociology of  
 Women* (Constantine Safilions-Rothschild), *Family Planning in  
 Japanese Society* (Samuel Coleman), *Women in Perspective*  
 (Sue-Ellen Jacobs), *Women in Changing Japan* (Joyce Lebra,  
 ed.), *The Japanese Women* (Sumiko Iwao), *Women's Realities,  
 Women's Choices* (Florence Penmark, et al.), *Rethinking  
 Women's Roles* (Denise O'Brien, ed.), *Japanese Women* (Taki  
 Sugiyama Lebra), *Who's Who and Where in Women's Studies*  
 (Tamar Berkowitz, ed.), *Feminism and Anthropology*  
 (Henrietta L. Moore), *Women in the Workplace* (Kathryn M.  
 Borman, ed.), *Women Work and Values* (Zarina Rahman  
 Khan), *The Fifty Percent* (Salma Khan), *Women and Social  
 Change in India* (Jana Matson Everett), *The One-Straw  
 Revolution* (Masanobu Fukuoka), *A Lesser Life* (Sylvia Ann  
 Hewlett), *Political Women in Japan* (Susan J. Pharr), *Sexual  
 Stratification* (Alice Schlegel, ed.), *Middletown in Transition*  
 (Robert S. Lynd, Helen Merrell Lynd), *The Women of  
 Suyemura* (Robert J. Smith, Ella Lury Wiswell), *Women's  
 Rights* (Anna Coote, et al.), *The Woman in America* (Robert  
 Jay Lifton, ed.), *Women of the Forest* (Yolanda Murphy,  
 Robert Murphy), *Changing Women in a Changing Society*  
 (Joan Huber, ed.), *A Feminist Perspective in the Academy*  
 (Elizabeth Langland, ed.), *Bridewealth and Dowry* (Jack

Goody, S. T. Tambiah), *Women's Informal Associations in Developing Countries* (Kathryn March), *Jan Ken Po* (Dennis M. Ogawa), *How To Save Your Own Life* (Erica Jong) Helene Sylverberg *Abortion & the Politics of Motherhood* (Kristin Luker) *Daring to Be Bad* (Alice Echoles), *The Reproduction of Mothering* (Nancy Chodorow), *Feminist Theory* (Nannerl Keohane, Michelle Rosaldo, Barbara Gelpi), *Feminist Theory in Practice and Process* (Micheline Malson, et al.), *How Women Legislate*" (Sue Thomas), *Women, War and Revolution*(Carol Berkin, Clara Lovett), *The Sexual Contract*" (Elenor Flexner), *Constitutional Inequality* (Gilbert Steiner), *Modern Sexism* (Nijole Benokraitis, Joe Feagin), *Sacred Bond*" (Phyllis Chesler), *Maternity and Gender Policies* (Gisela Bock, Pat Thane, eds.), *Abortion and American Politics, Woman's Body, Woman's Right* (Linda Gordon), *At Odds* (Carl Degler), *The Obsession* (Kim Chernin), *Everyone Was Brave* (William L. O'Neill), *The Elizabeth Cady Stanton* (Susan B. Anthony, et al.), *What Women Want* (Gayle Graham Yates), *The American Woman* (William H. Chafe), *Up From the Pedestal* (Aileens Krador, ed.), *Birth power* (Carmel Shalev), *When and Where I Enter* (Paula Giddings), *Against Our Will* (Susan Brownmiller), *The Feminine Mystique* (Betty Friedan), *Another Voice* (Marcia Millman, et al.), *Sexual Politics* (Kate Millet), *A Different Voice* (Carol Gilligan), *The Lowell Offering* (Benita Eisler, ed.), *The Economic Emergence of Women* (Barbara Bergmann), *Women & Equality* (William Chafe), *Feminist Challenges* (Carol Pateman, et al.), *Liberating Women's History* (Berenice Carroll), *Women & Public Policy* (M. Margaret Conway, et al.), *Democracy and the Welfare State*" (Amy Gutmann, ed.), *Gender Justice* (David L. Kirp, Mark Yudof, Marlene Strongks)

<来館・閲覧者> (抄) (敬称略、表記は記名による)

平成9年4月3日 何瑋 (北京日本学研究中心), 4月9日 ウピック・タムリン, 4月28日 米澤正雄 (実践女子大学教授), 5月15日 (大阪府立大学経済学研究科), 5月20日 伊集院絹子 (株式会社太陽企画出版), 6月10日 南ちよみ, 6月13日 坂本嘉章, 6月16日 外山由紀江 (笹川平和財団), 6月25日 磯部彩 (獨協大学), グッドチャイルド・ロビン (獨協大学), 武田宏子 (立教大学大学院), 7月7日 増田十和子 (ワシントン州立大学大学院), 7月11日 イルゼ・レンツ, 7月22日 久木野友 (東京学芸大学4年生), 7月25日 小林花, 7月30日 小野美智代 (同志社女子大学4年), 8月6日 プリンドル玉枝(Colby College), 池田春子 (岩波書店編集部), 8月11日 木寺博子 (十文字

学園女子短期大学), 8月18日 渋谷美穂 (女子栄養大学大学院), 石川真理子 (女子栄養大学大学院), 8月19日 船橋周, 松野菜穂子 (勁草書房), 8月20日 中村律子 (コーネル大学大学院), 8月26日 クリーゼル (デュッセルドルフ大学), 8月27日 光部俊美, 9月1日 武藤洋美 (日本大学大学院), 9月2日 井上幸子 (翻訳業), クリーゼル・コーネリア (デュッセルドルフ大学助手), 9月3日 吉田恵美子 (大阪府立大学), 9月8日 金居真希 (京都精華大学), 小林利子 (イメージファクトリー), 宮島桂子 (東京大学), 9月10日 Ann Britt Mossberg, Ulla Sunden Jene Olsen, 9月24日 船野綾子 (大坂府立大学), 10月2日 今井康雄 (東京都立大学助教授), 米田美智子 (金沢経済大学), Dominic Orr (Technische Universität), Daren Edlich (MA Erziehungswissenschaft), Katharina Gerber, Barbara Drinck (Universität Berlin), Dietmar Waterkamp (Technische Universität), 10月8日 北島直美 (松竹), 10月13日 藤原千沙 (東京大学大学院), 10月16日 角津栄一 (朝日新聞), 10月17日 榎英男 (パソコンコンサルティング顧問), 小村陽子, 小林達, 安田房子, 矢野誠治 (立巳物産株式会社), 野本怜子, 紺田隆弥, 田中孝子, 板橋寛二, 栗林得夫 (栗原工業), 高月優子, 松本一乃, 野中康子, 佐川公博, 10月23日 ファンユンイル (武蔵大学大学院), 10月27日 松田篤子, 10月29日 柳蓮淑 (東京学芸大学大学院), 高橋絹代 (桜美林大学非常勤講師), 10月31日 佐藤 (佐久間) りか (プリンストン大学大学院), 松島紀子 (城西国際大学大学院), 栗崎朋子 (城西国際大学大学院), 11月12日 秋葉亜子, 11月12日 Bui Thi Kim Quy (Director, Center for Women's Studies Institute of Social Sciences in Ho CHI Minh City), 11月16日 プレヒンガー・ヘレーナ (ドイツー日本研究所), 11月25日 Eriko Aoki (Suzuka International University), Ananda Kumara (Suzuka International University), Julianne Belbin-Sakuma (Columbia University), 12月18日 渡辺美恵子 (國學院大学), 12月19日 小山志津子 (カリフォルニア大学大学院), 平成10年1月19日 笹川あゆみ (オックスフォード・ブルックス大学大学院), 1月26日 Giron Noriega, Carlos Abilio (グアテマラ地域教育指導部地域長官), Rivera Gracia, Humberto (グアテマラ地域教育指導部地域長官), Cermen Guerra, Hector Antonio (グアテマラ地域教育指導部地域長官), Simon Sucuc, Jose Arnulfo (グアテマラ二言語併用教育局教育課程企画部長), Batz De Tzul, Virginia Tacam (グアテマラ二言語併用教育局教育課程企画部長), Franco De Leon, Miguel Angel (グアテマラ地域教育指導部地域訓練コーディネーター), Alfaro Perez, Francisco Oswaldo (グアテマラ地域教育指導部指導技術教官), Tavico

Solloy De Cay, Estela (グアテマラ二言語併用地域教育局調査評価官), Samayoa Alvarez, Julio Cesar (グアテマラ教育局地域訓練コーディネーター), Rouanet Guzman De Nunez, Rina Patricia (グアテマラ地域教育局地域訓練コーディネーター), Cortez Sic, Jose Enrique (グアテマラ人的資源教育課程企画強化全国組織), Cabarrus De Franco, Julia Mireya Poggio (グアテマラ地域教育局), Diaz Sales, Baudilio (グアテマラ地域教育局), Vielman Reyes, Leonel Orlando (グアテマラ教育局), 1月29日 萩原 範子 (西オーストラリア大学大学院), 2月4日 デイナ・ロイ (ラトガズ大学), 2月5日 シャハナ (バングラデシュ初等教育局事務局長), クイ (カンボジア教育・青少年・スポーツ省企画調整係所轄教育管理情報システム・センター所長), ヌカンチョア (カメルーン社会福祉・女性省女性局長), リンダ (グアテマラ教育省国内協力局コーディネーター), ヌルサーダ (インドネシア技術・職業教育局刊行教育人材開発係長), ロゼリン (ケニア教育省ナンザ地区教育長), アリス (マラウイ女性・青少年・地球振興省プログラム・オフィサー), ダウ (ミャンマー教育研究局上級教育研究官), キン (歯科大学解剖学科長), マリア (ナウル南太平洋大学センター長), マイラガ (パキスタン教育省教育副アドバイザー), ネスタ (タンザニア教育文化省教育委員長補佐), セコウエ (コートジボアール統計評価計画局調査官), 油原 ゆう子 (国立婦人教育会館情報交流専門職員), 2月17日 高橋由紀 (民族学振興会), 3月3日 大塚浩介, 3月5日 柳蓮淑 (東京学芸大学大学院), 3月17日 磯部美良 (愛知淑徳大学)

## あ と が き

原 ひろ子

平成8（1996）年5月11日、お茶の水女子大学ジェンダー研究センター発足時に、初代センター長を務められた利谷信義教授が、平成10年3月31日をもって、お茶の水女子大学を定年退官された。二代目のセンター長は、ジェンダー研究センター専任教員の原ひろ子が務め、しばらく専任2人の厳しい体制が続いたが、平成10年10月からは、川嶋瑤子氏が教授として赴任された。長年『日米女性ジャーナル』の編集長を務められてきた経験を有する川嶋瑤子氏は、強力な編集委員として第2号の編集に従事して下さった。

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報『ジェンダー研究』第2号は、基本的に第1号の「あとかき」に記された編集方針に依拠している。

まず、ジェンダー研究センターに改組してから設置された、外国人客員教授の日本での研究成果の公表である。第2号では、サスキア・ヴィーリンハ、金恵善の両教授に論文を寄稿していただいた。トリン・T・ミンハ外国人客員教授については、夜間セミナーと講演会をしていただいたが、日本での研究成果は、ビデオ作成でその表現がなされることになっている。従ってトリン・T・ミンハ教授自身による寄稿論文はないが、センターの石川裕子研究機関研究員が、夜間セミナーの内容について考察しまとめている。また、国立韓国女性開発院長をつとめられた鄭世華梨花女子大学校名誉教授にもご寄稿いただいた。

投稿原稿については、編集委員やセンター・スタッフ以外には、本学文教育学部内田正子教授、鈴木泰教授にレフェリーをお願いした。記して謝意を表する次第である。

その他に、センター・スタッフからは、川嶋瑤子教授、中山道子研究協力員、大池真知子研究機関研究員が研究論文や文献目録の執筆にあたっている。

本号の掲載論文等を眺めても、様々な学問分野に関わるジェンダー研究の広がりや担い手が増加していることを痛感する。20世紀も終わりに近づき、社会の変容は著しいが、次の世紀にむけてのジェンダー研究の方向を常に模索していきたいと考えている。

編集委員 原 ひろ子（編集委員長）、川嶋 瑤子、館 かおる

天野 正子、松浦 悦子、會川 義寛

編集補佐 堀 千鶴子、長妻 由里子

---

平成11年3月31日 印刷  
平成11年3月31日 発行

編集・発行 お茶の水女子大学ジェンダー研究センター  
〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1  
Tel 03-5978-5846  
Fax 03-5978-5845

印刷・製本 よしみ工産株式会社  
〒804-0094 北九州市戸畑区天神1-13-5  
Tel 093-882-1661

---